
W i s h

川之瀬 洸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wish

【Nコード】

N9636A

【作者名】

川之瀬 洸

【あらすじ】

2079年。一年に渡り続いた第三次世界大戦は平和的解決策が見出だせないまま『世界精神の疲弊』を理由に終結する。その時、一人の少女は世界の悪意に触れた。少女の心は蝕まれ、固く閉ざされる。心の意味とは、想いの価値とは、願いの尊さとは何か。答を見つける為に、信じる者の為に、少女は辛い現実に向き合い、未来へと歩き出そうとする。

Prologue

生きたくても生きられない者。

死にたくても死ねない者。逃げたくても逃げられない者。

何が正しく何が過ちなのか……真実を見極める事すら叶わない。

その術すら与えられない。それが私達の戦争だった。

正義とは望まれる儚い象徴でしかなく、悪意は流行りのウィルスのように蔓延し、人々や世界を蝕んでいく。

希望などという政治家や官僚の戯言がどれほどの意味を成すだろうか。

言葉が持つ力など、たかが知れている。それは人間にとっては単なる建前でしかない。

私には全て分かっていた。

人間の世界を司る精神と呼ばれる心の根底が。

それはただただ醜く、浅ましく、愚かで、度し難い人間の慣例。

巧みに構築された偽善の中で、私達ハイブリッド—Humanoid Interface Bio Linkage Device—は生み出されたに外ならない。その力は世界を救う為と謳われ、その存在は新時代を担うと祭り上げられた。だが、真実は違う。兵器として扱われたハイブリッドは破壊と殺戮を招くだけで、平和などまさに傍観者の戯言に過ぎない。故に、変わり果てていく世界に悲しむ権利すら、ハイブリッドには無かった。

『敵』を倒し続ける途方もない時間だけがハイブリッドの今。

戦争は醜い。果たしてその先に平和があるのだろうか。確証の無い未来の為に戦うハイブリッドの命に、どれだけの価値があるのか……何時しか、私は降り積もる疑問を吐き出していた。

囁き。

否応なく聞こえてくる男の答が、幻聴ではないと分かっていた。

幻聴だと思うことはできても、それに意味は無い。たとえば耳を塞いだとしても、それは呪いのように脳裏で高鳴る。

『真に憎むべきは誰か。お前にはそれが分かるはずだ』

意識をかい潜り、無意識が支配されていく。脳髓のうずいからの痛みは全身に広がり、五感が麻痺する。肺の中を掻きむしられるような息苦しさに喘ぎあえ、止まらない吐き気に涙が零れ、やがて、寒気ではない体の奮えは芯から溢れ出した。

未曾有みぞうの苦しみに抗う事もできず、更に喘ぐ。横隔膜が痙攣けいれんしそうな程の叫び。自分の耳すらつんざく絶叫——情動の咆哮ほうこう。

『あああああつつ!!』

『なら、知ればいい。真に憎むべき者。忌むべき存在を。……お前が望めば、顕現けんげんされる現実がある!』

もはやそれは恫喝どうかつに似た物言이었다。剥き出しの男の意志は、意識すら霧散させていく。人の意志が渦巻く表象……紛れも無い漆黒の悪意に、心が蝕むしばまれていくのが分かった。

『……わ……私は』

朦朧もうろうとした意識と共に、抗いの言葉が消えてゆく。だが、男の囁きは未だ脳裏に染み込むように聞こえてきた。

『ノエマ・デユナミス。その名は究極の力を冠する者の証明。摂理を越えた最強の存在。万象ばんしやうを掌握する精神の根底。お前は……』

『……黙れ!……私は……私は!』

私の名は、エリファ。

私はその日、『世界精神の破滅』を望んだ。

悪意の胎動

天井が、世界が回った。

同時に心地よさすら感じる浮遊感が全身を包む。が、次の瞬間には右半身を激しい衝撃が襲った。

朦朧とした意識でかろうじて受け身をとったつもりだったが、僅かに遅れていた。

（一瞬気を失っていた！？）

何が自分の身に起きたのか分からない数秒に困惑する思考回路。ただ一つ明確だったのは忌まわしい記憶が意識の片隅を吹き抜けた不快感。

「くっ！」

滲み出る苛立ちを吐き捨てたい衝動にかられたが、今はそれどころではない。

横倒しになったままの体勢から下半身だけを捻り上げ、両足を回転させた反動でエリファは跳ね起きた。

廃墟となった研究施設。明滅する切れかけた照明は、萎びた観葉植物や得体の知れないボンベや機材が散乱した通路を殺風景に映し出している。

そして、目の前には一人ではない、人知からはみ出した存在、異形の生物がいた。

イボガエルのような無数の小さな突起物に覆われた褐色の皮膚、上半身だけが極度に発達した二足歩行の生物。

『キメラ・オーガ』と呼ばれるそれは、飢えた獣のような唸り声を発した。

「見下されたものね」

自分の未熟さが招いた結果とはいえ、下級のキメラにダメージを負った不甲斐なさにまた苛立つ。

咄くが早いか、エリファは反撃に転じた。低い姿勢で間合いを詰

めつつ、右の拳を褐色の皮膚に減り込ませた。鈍い感触が右手を伝う。オーガの左腕が本来有り得ない角度で曲がったまま、胸部へと突き刺さる。だがオーガは痛みを感じた素振りも無いまま、右腕を投じてくる。遠心力の勢いそのままに巨大な拳がエリファの身体を捉らえた。

「うぐっ!!」

息が上がっている。

吐く息に酸素が逃げているのではないかと勘繰る程、エリファは息苦しさに喘いだ。

思うに、施設内部の淀んだ空気からは十分な酸素を得られそうもない。が、理性で理解しても、本能はただ役目を果たそうと、ひたすら体内の呼吸器官を働かせる。だが止まるわけにはいかない。エリファは悲鳴をあげる体を強引に動かし続けた。

「しつこい」

つい漏れた呟きに後悔しながらも、再び拳を叩き付ける。折れていた腕が更に深く刺さり、オーガは倒れ伏していく。それを見届けてから、エリファは顔に付いた返り血を拭った。

思った以上に動いてくれない下半身。もつれる足を庇いながら、壁に背中を預ける。

「ハアハア……少しはまともに動いて」

上がった息を抑えてまで自分の緩慢な怠さに叱咤する。休めば済む事だが、今は休む事を許される状況ではない。すでに新たなキメラが迫って来ている。

(反応2、オーガね)

力技でどうにかできる体力が残っていないのは明らかだった。エリファは透かさず左手首に装着したMTS（多機能戦闘用機構）を起動させた。

脳に酸素が行き届かず目の前が霞む。しかし気にする程度の事ではない。キメラの反応と距離が分かればそれで事足りる。

『スピードトランス
STインストール。NBM（超微人工細胞素子）スタビライズL

V3にシフト』

疲労感に有無を言わず躍動する全身の細胞に任せて、エリファは神速で間合いを詰めた。捉らえた2体のオーガ。

サンダーボックス
『TTインストール。NBM／TML（組織変成制限）解除』

振り上げた左手からは直ぐさま空中電気との放電によって無数の稲妻が発生し、手首から先が長剣へと変化する。そして間髪入れず、左手の長剣を2体のオーガ目掛け斬りつけた。

紫電一閃。まばゆい閃光の中、創傷から碎けるように2体のキメラは消滅していく。

（もう、いないようね）

力無く折れる膝に抗わず再び壁に寄り掛かったエリファは、周囲にキメラの生体反応がないかを確かめた。反応は無い。インカムデバイスにも『Safety』の文字が浮かぶ。

「第4区画のオーガ掃討完了」

思わず溜め息を漏らし、左手を元の定形へと戻しつつインカムデバイスの無線を繋いだエリファは、抑揚なく呟いた。

『お疲れ！ こちらでも今確認した。そのまま予定通り第6区画まで進行してくれ』

聞こえてきた男性の声。誰もが羨む美声——というわけではないが、エリファにとっては心地よく、温情に満ちた声だった。

声の主の名は、グラウー・グラウ・ユラナス。

「でもグラウ？ この施設内部のホログラムデータ、僅かだけど相違点があるわ」

インカムデバイスのバイザー状ディスプレイに表示した立体映像。自分がいる場所を示す赤い光点は、あきらかに通路ではない場所で点滅していた。

『我慢してくれ。奴らだって馬鹿じゃないさ、正規のデータをリークするわけないだろ？ 許容範囲だと思ってくれ』

「……でも」

と、抗言しようと言いかけたその時、通信に割り込む声があった。

いや、わずかだが肉声でも聞こえてくる。

「あの、それはともかくとして、こんだけ大量のカメラ片付けて俺達報われるんですかね」

重苦しい緊張感の中で、彼の間延びした声は耳障りではないが異質に響く。

『後でチヨコパフェ奢ってやる』

「チヨコパフェかぁ」

やがて肉声は通信を掻き消し――同じハイブリッドであるゼーンはどこか不満げな面持ちで暢気に現れた。

「ま、我慢しますよ」

グラウの本気かどうか察し難い提案とゼーンの投げやりな返答は理解に苦しむ物言いではあったが、不毛なやり取りで時間を無駄に消費するわけにはいかない。

「一応了解。このまま進行するわ」

気抜けしながらも不承不承頷き、エリファは一方的に通信を断った。

「……樂觀的過ぎる」

かぶりを振って独りごちてから、ゼーンに視線を戻す。彼はまだ不満げに小首を傾げている。と、こちらの視線に気付いたのか、苦笑しながら言ってくる。

「で？ どうすんのさ」

ゼーンの年端は――確かめたことはないが――自分と大差はないはずだった。人間の肉体年齢でいえば20歳前後だろう。シルバーグレーの髪が特徴の彼は、暗緑の瞳だけはしっかりと見据えてきていた。

「どうするって、予定通りでしょ？ いい加減、ゼーンも頭を使う事を覚えたら？」

「俺はどっちかといやぁ行動派なんだよ。ただ、後60メートル付近まで接近してるケルベロスの反応に危惧する事くらいはできるぞ？」

胸を張り、どこと無く得意げに言うど勢いよくゼーンは駆け出した。

（当然でしょ。その為の私達なんだから）

口に出す気力も湧かず心中で毒づいたエリファは、ゼーンに追隨しその方向へと足を向けた。

たいして広くない通路の先。明滅する役立たずの照明はまるでスローモーションのように敵の姿を映し出す。数は2体。

炎のような真紅の総身に銀色のたて髪を揺らして、約2メートルの巨体が床や両壁、天井を強靱な脚力と鋭い跳躍で弾丸の如く猛進してくる。

「まだ息上がってるんだろ？ 俺に任せてくれていいんだぜ？」

そう言って意気揚々と駆けるゼーンだったが、エリファは胸部プロテクターの肩口から、残りエネルギーの少ない準指向性ビームナイフ――シュナーベル――を抜いてから事もなげに言いやる。

「待つのは嫌いなのだ」

「……言ってくれて」

最後に舌打ちらしき音も聞こえたが、それはケルベロスの虫酸が走る雄叫びにあっさりと消された。

エリファは右の一体をはたと睨み、そして肉薄。疾駆の勢いそのままに、ケルベロスは前足を振り下ろしてきた。だがそれを見切るのは容易い。問題は体が思い通りに動いてくれるかだった。

ケルベロスの前足をかい潜る為に身を屈ませ、踏ん張りのきかない両足に鞭打って素早く懐へ潜り込む。

この際恰好はどうでもいい。両足を目一杯伸ばし、シュナーベルの短い実体刃の先に形成させたビーム刃をケルベロスの喉元に刺し通した。そして振り斬る。

肉の焼き切れる音。同時に鼻をつく激臭が漂う。

慣れたくもない、慣れようはずもないその異臭に不快感すら覚えない自分を虚しく思いながら、エリファは踵を返して後方を見遣った。胴体が真っ二つに斬られ切断面からはあらゆる臓器を垂れ流し

ながら、ケルベロスはくずおれていく。

ふと見ると、もう一方のケルベロスも、同様に絶命していた。

「まあ、ざっとこんなもんよ」

小鼻を蠢かしながら物言うゼーンはあえて無視して、エリファは再び踵を返した。エネルギーの切れてしまったシュナーベルを肩口に戻す。そして、呼吸を整えながら歩を進めた。

と――

それを遮るかのように、ゼーンが顔を割り込ませてきた。

「何か機嫌悪い今日？」

「そう？　いつもと変わらないけど、私もゼーンも」

エリファは答えながらも努めて視線は前を見据えた。

「ならいいけどさ。ま、グラウだけじゃなくて、たまには俺等にも頼ってくれよな」

「気が向いたらね」

「素直じゃねえなあ」

（……素直、か）

溜め息混じりに漏らすゼーンの気持ちは少なからず分かる気はした。時には鬱陶しく感じるゼーンの楽観的な素直さは、本心から言えば羨ましくもあった。だが、

（……まだ）

胸の奥が突如疼き、エリファは息苦しさを覚えた。プロテクターの上から胸を押さえ、その痛みから逃れる為に思考を断ち切る。何も考えなければ何も思わない。何も思わなければ何も感じない。何も感じなければ、痛くはない。

幸いな事に珍しく沈黙していたゼーンだが、しばらくして待ちあぐねていたかのように口を開いた。

「お、こいつかな？　第6区画は」

気付くと、目の前には3メートル近い巨大な電子扉が立ち塞がった。堅牢な作りで、簡単に壊せるような代物には見えない。

「グラウ、着いたわ」

『了解……っと、こいつだな。これから解除コードを送信するから、ゼーン頼むぞ』

「あいよお」

生返事のゼーンは、インカムデバイスに受信された解除コードを見ながら、電子扉脇にあるパネルを操作し、ロックを解除する。

軋めきながら開いていく扉の忌まわしい雰囲気のエリファは我知らず息を詰めていた。

開かれた扉の先には、通路と大差ない――むしろそれより暗いだろうか――仄暗い空間が広がっていた。

中へと進む。そこには所狭しと計器類が並び、何かの調整槽らしき物が何本も並んでいた。だが、今はその全てが沈黙し、埃が積もっている。

「さあて、どうしたもんかねこりゃ」

「私に聞かないで。見て分かるでしょ？」

「ま、見事にハズレか」

ぼやくゼーンを横目に、エリファは溜め息をゆっくり吐き出しながら、心中で嘆息した。

「グラウ聞こえた？ 第6区画、特に異常は見られないわ。ここもハズレよ」

『これだけの施設にも関わらず、収穫ゼロとはね』

どんな表情をしているかまでは分かるはずもないが、グラウのその声には落胆や口惜しさは感じられない。いや、それとも感じ取れないだけなのか。

「どうするの？ これ以上この施設にいる理由はなくなったけど」

『まだ内部に数体のカメラの反応が残ってるから、その排除が完了したら帰還してくれ』

「構わないけど、チョコパフェじゃ足りないよ？」

「もう、不謹慎」

言いながらゼーンを小突いたエリファは、自分もうっかり緩めていた緊張感を再び引き締め、残りのカメラの排除に駆け出した。

まだ後少し、痛みは閉ざしたままに。

2078年。加速度的に発達したテクノロジーは、世界に3度目の大戦をもたらす。

反連合政府同盟と、ト・コイノン国際連環機関との間に勃発した戦争。

戦争とは往々にして、人間の意思によってもたらされ、人間の手によって争われてきた。だが、アウガルと、ト・コイノンとの戦争において、戦場で直接人間が争う事はなかった。その戦場で戦いを繰り広げたのは、人間が遺伝子操作によって作り出した生体兵器。『キメラ』そして『ハイブリッド』と呼ばれる生命の戦い。それは人間の過度に露呈された性故の^{さが}大過に外ならなかった。

戦いは拮抗した。それは双方の力の増長を促し、戦争を激化させる。だが、どちらかが優勢になることもなく、ただ激しさを増すだけの戦いは続いた。その『つけ』とも言える戦禍は、世界人口を開戦前の3割にまで激減させる。

やがて、前触れもなく訪れた終戦。どちらかの支配でも、和解でもなく、まして勝者など存在しない終戦。その理由――それは『世界精神の疲弊』だった。

終戦から2年。少なからず予期されていたことではあったが、尊いはずの平穏は忽焉と終わりを告げる。

戦後、力を蓄えていた反連合政府同盟の残党リベラルは、廃滅への一途を辿っていたキメラを強化改良し、再び世界を跳梁させる。それは、世界を震撼させる新たな脅威の始まりだった。

懸念されたのは言うまでもなく、4度目の大戦。

時を同じくして、別名『優性遺伝合成体』とも呼ばれるハイブリッドは、戦前から、バイオテクノロジーやナノテクノロジー分野で飛躍的な発展を遂げた世界一の先進企業、ジオ社によってその大半が管理され、ハイブリッドの精製、補強、調整などが兼行されるほ

か、キメラの根絶にも力を入れ始める。

ハイブリッドは、唯一キメラを淘汰できる力を持つ、別格の存在として是認され始め、期待を集めることとなった。

朱色の陽光が一面を照らし、東の天と地が曖昧になる朝焼けの風景。程よい採光に保たれた窓辺で朝焼けの光芒に溶け込むように、ジオ社総裁ガヴリア・フォルストはいた。

昨日中にこなさなければならなかった仕事は日を跨ぎ、すでに時刻は午前5時を過ぎた。ようやく処理し終えた書類は、デスクの上に山の如く積み上げられている。

そのやり遂げた仕事を前にし――これから今日の仕事が始まるが――今朝の天気同様、気分も晴れ晴れとするはずだったが、ガヴリアの心は曇っていた。

その原因は、朝のニュースで流れる、キメラの被害を伝える内容の報道だった。今日もまた死傷者が出ている。

「……またか。今週に発生しただけでも13件目か」

ぼやき、溜め息を漏らす。

「今月に入ってからには特に増加傾向にあるな。やはりリベラルが本格的に活動をし始めたと考えていいか」

「そうですね。すでに何件かの犯行声明らしきものも確認されていますし」

そう語ったのは、ガヴリアの秘書から護衛までをも勤める側近のエームズ・アインゼンだった。軍人だと言われれば疑う余地のない恵まれた体格だが、その見た目とは不釣り合いな程の繊細な挙動で、煎れたてのコーヒーをガヴリアの前に置き、続けて小脇に抱えていたいくつかの書類の束を差し出した。

「第一管下からの、昨夜の研究所調査報告書もあります。今回も結果は芳しくないようですが」

「そうか。でも、エンジニアの仕事だけでも多忙なのに、グラウ達

は善処してくれている。……ただ現状を考えれば、HCT（第一種危険生体分子対策部隊）の発足は急いだ方がいいかもしれない」

「MTS適合者の選定はすでに終わっています。ただ、彼等の返答如何によってはずれ込む可能性が」

「……分かつてる。グラウに至急コンタクトを取ってもらえるかな。彼に意見を仰ぐ。エリファの状態も気になるしね」

「了解しました」

そう頷くと、エームズはデスクに山積みになっていた書類を軽々と持ち上げ、総裁室を後にする。

そして、訪れた静寂。香ばしい匂いに誘われ、ガヴリアはようやくコーヒーカップに手を伸ばした。

「一刻の猶予もないわけではないだろうが……不謹慎だろうな、私は」

独りごちる。総裁にとつてのつかの間の休息をコーヒーで味わいながら、ガヴリアは第一管下から提出された書類に目を落とした。

世界の中心として全てを俯瞰するかのようにそびえるジオ本社は、直径が約30キロにも及ぶ至大な円筒形をしており、世界唯一の軌道エレベーターの役割も担っていた。それはさながら天空へとそそり立つ大樹のようにも見えた。

総裁室がある350階より下層。ジオ社第一管下ラボのある264階へは、社用エアターミナルから、エリア直通式エレベーターと区画シャトルを乗り継ぎ、約30分かかる。

調査から帰社したグラウは直ぐさま報告書を提出した後、ハイブリッドの調整に取り掛かった。

特殊羊水に満たされた、ハイブリッド調整用のNBMAセンブラー槽の中では、すでにエリファとゼーンが仰向けに寝ている。

いくつかの計器やディスプレイパネルに羅列されていく調整状態に目を通す。

「自己組織化機能、分子スタビライザー、TMLS（組織変成制限

システム）……それと、バイオリンケージも良好と」

現行型のハイブリッドは、その骨格や内臓、脳やその他体内器官は普通の人間と変わりはないが、筋肉や皮膚組織――主に四肢のほとんどは、NBMと呼ばれる人工細胞素子が使用されている。それは戦闘後、更には定期的にNBMアセンブラーによる調整が義務付けられていた。

NBMアセンブラーとは、各ハイブリッドに適合したプログラムをもとに、分子部品を組み立ててNBMを構築する為のもので、NBM自体に多少の再生機能はあったが、永続できるものではないため、補修や、自己組織化機能の補助などを行う必要があった。

「NBMの再構築75%まで完了。今回はかなり劣化が激しかったわね？」

エリファの調整作業を進めていた同僚のシレーヌ・ヴィエラは長い黒髪をかき上げながら、聞いてきた。

「純粋な戦闘用ハイブリッドじゃない分、今回は少し無理がたたったかもしれないな。よく言えばデリケートだし。まあ、今回もメンタルな部分での影響が大きいだろうけど」

「相変わらず、か……特にエリファの能力にとっては致命傷よね。体はこうやって修復できても、デリケートな心はそう簡単に治るものじゃないし」

シレーヌは俯き、悲愴な面持ちで呟く。だが、そんな表情も、明眸皓齒いばうしうしの彼女が見せると不思議と艶やかに見えてしまう。

思わず見惚れていると、突然無愛想な嫌味が聞こえてきた。

「あんな環境下で戦闘させるのも悪いでしょおに」

などと、差し出がましく非を鳴らしたのはシレーヌと同じく同僚のアオイ・タチバナだった。彼女はゼーンの調整作業を担当している。

「何だか俺だけに責任があるみたいないやうだな。統制本部からの要請なんだから仕方ないだろ」

「えゝだって、グラウってHCTの主任に推薦されてるし」

聞き覚えのない言葉に、グラウは寝ぼけた思考を巡らせた。嫌な予感が脳裏を過る。

「……まさか」

「総裁から直々に話が来るかもね」

他人事のように言い、アオイは薄ら笑う。だがそれは捨て置いて、グラウはジオ社を統率する友の顔を思い浮かべる。

「あいつ、専横にも程があるぞ」

やる瀬なさに、思わず愚痴る。とやかく言える立場ではないのは分かっているが、少しは配慮というものがあっても損はないはずだ。「幼なじみのよしみね」

にやりとシレーヌ。だったら尚更だ――とは口に出さず、ゼーンの調整をしながらもくつくつと笑うアオイに眉根を寄せて言い放つ。「MTSの適合者のゼーンを担当する以上お前も同類なんだけどな、その厚顔無知の大和撫子。二日酔いでちんたら仕事してる場合じゃないぞ」

「あ、あはは。それはその、ねえ……っていうか、厚顔無知の大和撫子ってどんな褒め言葉よ？」

馬鹿は再び捨て置いて、グラウはゼーンの調整状況が表示されたディスプレイに目を移した。エリファよりも状態はいいため、特に心配するような点は見当たらない。

「再構築も98%まで終了か。問題無さそうだな」

「グラウの態度には問題あるけど」

もはや酔っ払いおやじのからみに等しい。アオイの性格に辟易しつつ漏れたのはやはり溜め息だった。そして訪れた疲労感に目眩を起こし、グラウは手近な椅子を引き寄せ腰を下ろした。仕事も一段落しそうな事もあり、徹夜明けの気怠い体を包む眠気はあっさりと意識を支配していく。

そこで――突如携帯がポケットで震え出した。

（嫌なタイミングだな）

恐る恐る発信相手の名前を見る。と、そこにはジオ社総裁の敏腕

秘書エームズの名前が表示されていた。

「……噂をすればだ」

しかし、一度支配された意識はもはや抵抗する術を持たなかった。心地よい背もたれに体を預けたままグラウはしばし夢を結んだ。

高度約36000キロ、衛星軌道上。ジオ社保有の宇宙施設ネウロン。

その施設の所長、カスミ・イーリスは数日間溜め込んだ残務整理に追われていた。

自室。耳障りならない程度に流れるBGM、適当に選んだチャンネルで放映されている古い映画。しかし、今はどちらも静寂を葬る為の存在に過ぎなかった。ソファアに俯せの状態で片足だけが床に落ちているというのは、傍目にも不恰好なのは分かっていたが、特に気にせず、カスミはノートパソコンのキーボードの上で指を踊らせながら独りごちた。

「まったく、相変わらず2課の連中は無駄遣いが激しいわね」

不意に過った苛立ちがキーボードを叩く指に現れているのに気づき、カスミは苦笑しながらその指を止めた。

（やだ、私ったらヒスってるの？）

それは自問ではなく、単なる自嘲でしかなかった。そんな寸感を振り払うようにかぶりを振り、ふと時計に目をやる。

（もう12時になるのか）

思い起こせば、朝食は食べていなかった。道理で仕事がかどらないはずだ。重たく感じる体をやおら起こし、デスクへと足を向ける。

デスクの上は少しばかり雑然としていた。納品書やその領収書に、部下の始末書。ボールペンと万年筆。計算機。電子辞書。地球にいる愛犬と友人との写真が入った写真立て。無意味にオーナメントされた骨董品の時計。ファンデーションに口紅。表紙に『理想の上司になる秘訣』と書かれた書籍。そして、冷え切った紅茶が入っ

たカップ。

空腹感を紛らわすには物足りないが、とりあえずカップに口をつけ喉を潤す。

「さ、ランチは何にしようかな」

現在、ネウロンは無稼働状態にあるため、軌道エレベーターの宇宙ステーションに係留されている。昼食は宇宙ステーションにあるフードセンターまで行くことになる。

「あれ、財布はどこに置いたっけ？」

素直に散らかっていると認めつつ、財布を探す。

と――その時、不意に警報が鳴り響いた。

「……訓練、だったかしら？」

だが、その予想はあっさりと否定される。

デスクのモニターに、コントロールルームからの通信が入る。

そこに映る所員が狼狽しているのが、手に取るように分かった。

『所長、大変です！　すぐこちらに来て下さい！』

カスミは息が詰まるのを感じながら、半ば強引に生唾を飲み込んだ。

「いったい何の騒ぎなの！？」

『そ……っ！』

刹那。モニターから聞こえたのは何発かの銃声だった。モニターが血で赤く染まる。

「……きゃああああっ！」

全身が粟立ち、戦慄を覚えたカスミは、たまらず絶叫した。

辛苦領域

エリファは、朧げに映る風景、焦点の定まっていない視界を正そうとはしなかった。正したところで、瞳に映る景観はなんというものでもない。

完全でもなく不完全でもなく、この上なく曖昧な虚構。

自分が人の概念を超越した観念、夢想ならば、自分は何を想い何を望めばいいのか。自分が切に願い、儚い想いを焦がし、夢に抱けば、それが顕現けんげんされる現実があるのだろうか。

（だけど、今の私にはもう関係ない。“あの男”とはもう）

むしろ——今、自分自身に望むこと。希求することがあるはず。胸につかえて取れない悲愴感に苛まれることを、月日を費やすことで霧散できると思い込むのは愚行だろう。

（だけど、私は自分を癒す術なんて知らない。望める純粋な心なんて……私には無い）

希望的観測に思いを馳せようとするこすら苦痛になり、エリファは小さくかぶりを振った。

（グラウが望んでくれているなら……それだけでいい。それは諦観でも、妥協でもない。それが私の意志）

そこはかとなく感じる利己の意志と、一縷いちろの希望にエリファは安堵した。

その時——いや、少し前からのような気もしたが深くは考えず——何とは無しに耳についた呼び声で我に返った。

それは、今1番聞きたくない不快な声だった。

深く溜め息をついて見せて、咎とがめる視線を声の主に向ける。

「……何よ、ゼーン」

「やっと気付いたか。何度呼んだと思ってんだよ。……あつ、まさかわざと無視してたんじゃないだろうな？」

大袈裟にむくれるゼーンをそのまま睨み据えて、言いやる。

「故意じゃなかったにしても、私は別に用は無いもの」

ゼーンは苦悩するように頭を抱えてから重々しく口を開く。

「あ、あのなあ、その血も涙もない態度はどうにかしろよ」

逆に咎められたことを不満に思いながらもエリファは渋々本題に話を戻した。とはいえ、ゼーンがまともな用件を切り出すとは思わなかったが。

「用件は何？」

折れたのがよほど嬉しかったのか、ゼーンは満足げに目を細めて言ってくる。

「初めからそう素直になればいいのに。まあいいや、あのさ、グラウはどこにいるか知ってるか？」

分かってはいた。所詮その程度の用件だということは。その程度の用件で貴重な沈潜ちんせんに水を差されたのだ。そんな落胆が表情に出てしまったのか、ゼーンは慌てて続ける。

「あ、今やっぱりそんな事か、とか思っただろ？」

「当たり前じゃない。私はグラウのマネージャーじゃないもの。逐一報告できるわけないでしょ」

「そりゃそうだけどさ。心当たりもないか？」

「んん……この後、総裁室に行くつもりらしいから何か準備してるのかも」

「そっかあ、もうお昼だしランチでも食べに行こうかって話だったんだけどさ」

ゼーンの語り途中、ラボに戻って来たアオイが話に加わり、

「何だ、もしかしてグラウまだ行ってなかったの？」

「あ、そうだよ。総裁を待たせるとは何事か！ 俺は“お惣菜”（そうざい）を待たせたりはしないよ〜フフフ。待ってるよ、お惣菜達♪」

ゼーンがもたらした一瞬の沈黙。それは宇宙の静寂を思わせる一程ではなかったが、エリファはまるで重りのついた足枷あしかせを引きずるような心地で口を開いた。侮蔑を込めて。

「哀れね。……キャラとネタで相殺^{そうさい}してるわ」

「なぼっ！」

見えないボディブローにゼーンが卒倒する。リアクション自体は悪くないが、正直月並みだ。

「や、やるわねエリファ。……さあゼーン、気の毒だけど負け犬は大人しく去りましょう」

依然白目を剥^むいて卒倒しているゼーンの片腕を持ち上げ、ズルズルと引きずり、

「ま、今日は仕方ないわね。他の面子^{めんつ}と昼食に行って来るわ。グラウとのデート楽しんでらっしゃい」

意味深ににやけながらアオイはゼーンとラボを出て行く。

「……デートって、何？」

ラボの自動扉に引っ掛かったゼーンの片足が乱暴に引き抜かれていった事よりもアオイの言い残した言葉を怪訝に思っていると、アオイ達と入れ違いでグラウの姿が目に入った。グラウは右眉を吊り上げながら、聞いてくる。

「何かあったのか？」

アオイに何かを聞いたとは思えないが、エリファは妙に疲れた気力を振り絞り、憂鬱に言った。

「互いに差し引いて損得なしにすることの教訓よ」

「……はあ？」

その困惑した表情はどこか可笑しく、エリファは心中で笑った。

「はははっ、なるほどね。そういうことか」

総裁室へ向かうエレベーターの中。今し方あったゼーンとの事の顛末^{てんまつ}を話すと、グラウは朗らかに笑った。

エリファはそれを横目に、エレベーターに備え付けの鏡の前で淡いベージュの髪を結わえ直していた。それが特別お洒落というわけではない。ハイブリッドの髪の毛は伸びる事はない為、髪形などの

個性など皆無に等しい。化粧すらしていない顔はやや幼く見えるが、ハイブリッドとして鋭く研ぎ澄まされた勿忘草色わすれなぐさの瞳はそれを十分過ぎるほど補っていた。

エリファは束ねた毛先を適当に整えてから、グラウに視線を戻した。

――まだ笑っている。

その話が面白いのかどうかはともかくとして、グラウが笑ってくれたこと自体に、充実感のようなものがある気がする。

（嬉しいの、私？）

だが、エリファはとりあえずその不可解な感情は棚上げにした。

「そんなに可笑しい？」

「ああ、ゼーンは相変わらずだけど、まさかお前がそこまで言うとはなあ」

そしてグラウはまたくつくつと笑い出す。

（……馬鹿にされてるのかしら）

と、その寸感は今度はグラウが棚上げにした。ふいと真顔になったグラウは諭すように言ってくる。

「感情的になることは今のエリファにとって必要な事だ。例えばそれが皮肉だとしてもね」

その言葉が勝手に胸奥で反芻はんすうされる。エリファは抗言したい衝動にかられたが、それを必死で押し殺して唐突な問いをぶつけた。いや、その問いも抗言と差異はない気もしたが。

「グラウは……私に何を望むの？」

唐突な問いにもかかわらず、グラウの顔色は変わらなかった。

むしろ、この問いを待っていたかのようにも見える。

「うん。その感性はいいと思うよエリファ。だけど一つ肝に銘じておくといいよ。“知る”と“理解する”とは大きく違う。知る事は割合容易にできるけど、それを理解するにはもっと利他を重んじなきゃいけない。……まだエリファには難しいかもしれないけどな」

到底それが答えには聞こえなかった。半歩グラウに詰め寄り、

エリファは視線だけで再び答えを仰いだ。

「まずは自分がどう意識するかだ。歪んだ固定観念は、心のキャパシティを乏しくさせるだけだからな。それをエゴとも言うかな」

胸が疼く。まるで膿が溜まった傷口から搾り出すように。それはできることなら触れたくない闇。忌ま忌ましい記憶と共に、心の深奥から込み上げる憤り。それに抗いもせず、エリファは情動を爆ぜた。声を振り立てる。

「今更、人を知って理解しろとでも言うの？ 私……私はグラウを信じるだけじゃ駄目なの！？」

グラウは天を仰ぎ見てから、静かに目を閉じてかぶりを振った。否定だけはされなくなかった。生きること理由付けが必要なら、今の自分にはそれしかない。

グラウは視線をそのままに、慈愛に満ちているようで、自虐的で悲愴感すら漂わせた面持ちで、囁いた。

「エリファ。……俺も、人間なんだよ」

その一言は、滑稽だと思ふ外なかった。

それから、エリファは一言も口を利かなかった。言わずもがな、話し掛けられる状態でもない。

2年前。絶望の淵に沈んでいた時と同じ色の瞳。

滞った思考の表象。波紋の囁きすら聞こえそうな水面を思わせる悄然とした瞳。それは触れてはいけない心の深奥なのかもしれない。

2年前。ある実験の最中、エリファは主観的にも客観的にも堪え難い精神の苦痛を強いられていた。

抗う術すら分からず、抗う事すらできず、抗う意志すら見出だせず。ただただ蝕まれた心は、歪曲し脆く崩れ去った。

それから半年間。エリファの口から声が出ることは一度もなかった。話し声や笑い声。嘆声や泣き声すらも。

その時の彼女の胸中は推し量ることすら困難だった。いや、もしかしたら、知る事に怖じ恐れていただけなのかもしれない。

――卑怯者。

それは、人の浅ましい怠惰。

わずか数分前、自分がエリファに投げ掛けた言葉を反芻する。

（最低だな、俺は。……結局自分の逃げ口上をエリファに押し付けただけじゃないか）

グラウは自分を罵り、嘆声を漏らした。

気付くと、いつの間にかエレベーターは総裁室前のフロアに着いていた。

総裁室に入るには、特別面倒ということではなかった。常連のエンジニアなどそう多くはない。馴染みの警備員だから顔パスでも済むが一応名目上のボディチェックは受けて、会釈のついでにIDを見せれば事足りる。

エリファ等ハイブリッドならばボディチェックすら必要ない。もとよりハイブリッドは“安全だと思われる”のだから。

（まあ、否定はしないけどな）

そう独りごちてから、グラウは総裁室の扉を押し開けた。すぐに広々とした――いつ見ても無意味に広い――総裁室が視界一杯に飛び込む。

総裁室は、扇を開いたような末広りの形をしていて、弓形になる部分は全てガラス張りになっている。今日の天候も相まって、外からは惜しみなく陽光が照り込んでいた。

総裁室のほぼ中央には肩を寄せ合うように、紫檀したんの机とソファ。その脇には何列かの書棚とこじんまりとしたバーカウンターがいつもと変わらずあった。そしていつものように、紫檀の机の向こう側にある黒い革製の椅子には、一人の男が座っている。

肩より伸ばした黄金色の髪はきれいに束ね、胸側に垂らした眉目びもくし
ゆうれい

秀麗の男。

それは間違いなく、友であり、ジオ社を治める英邁^{えいまい}な総裁。ガヴリア・フォルストだった。

「今日は、姫もご一緒かい？」

機嫌よくそう言ってきたガヴリアに、グラウは慌てて苦笑した。

「ま、まあな」

歯切れの悪い言動を疑問に思ったのか、ガヴリアは訝る視線を向けてきた。それから逃れるように、グラウはそそくさとソファに腰を落ち着かせた。視界の隅には、エリファも座るのが見えた。

グラウは人知れず、安堵の溜め息を漏らしたが、さすがに気鬱な気分までは払拭できなかった。少しでも気が紛れればと、目の前の男に投げ掛ける言葉を探し――

「さつてと、早速だけど用件を聞こうか？」

何の捻りもなく出てしまった言葉は我ながら情けない。お陰でガヴリアは戸惑いを見せたが、直ぐに表情を引き締めた。

「最近のリベラルの動向は勿論知ってるな？」

「そりゃあな」

もちろん嫌というほど知っている。本職のハイブリッドエンジニアを疎かにしてまで、そちらの対応に追われている始末だ。

リベラルはその名称こそ違えど、実態は終戦と共に解体した反連^ア合政府同盟そのものであった。悪しき元凶であり、テロリズムの温床でもある。キメラを使役し、世界を脅かす存在は決して許されるものではない。

「ならば話は早い。無理は承知のつもりだが、HCTの発足を前倒ししたい」

ある程度予想していたガヴリアの発言にグラウは頭を抱えた。

「責任感の強いお前がそう考えるのは当然だろうな。だが現段階での発足は時期尚早だ。第一俺の手に負えるレベルじゃあなくなる」

「M T S 適合者の選定はすでに終わっている。それにグラウ、これは一介のエンジニアに話すのとは訳が違うんだ」

「おだてたって豚は木に登らないよ。……なあ、HCTの目的は発足させることじゃないだろ。それに発足はリベラルへの牽制や挑発に繋がる。対抗もしくは抑止力になるだけの力を蓄えてからじゃないと、焦ったところで不安要素が増えるだけだ。お前らしくないぞ？」

論したところで、相手が考え直すはずもない事は察しが付いている。だがガヴリアの私案を簡単に飲み込むわけにはいかない。

「……らしくない、か。まさかグラウに諭されるとは」

「今度は心外な言いようだな、おい」

「私だってさっきまではグラウと同じ考えだったさ。だが、焦りたくもなる事象が発生してしまったんだ。グラウも知れば考えが変わるかもしれない」

「?……何を……言ってる」

ガヴリアの瞳が恐ろしい程の眼光を放つ。それはHCTの発足を前倒しさせるための脅しなどではないことは容易に推測できた。何かが、ガヴリアを追い詰めている。

そして、その推測は的中した。

「ついさっき、ネウロンが何者かによって占拠された」

目覚めが憂鬱だと思ったことは多々あったが、恐怖が付き纏うなど今まで一度たりともなかった。まして、傍らに銃を持った男がいて、手足を縛られた状況など経験があるはずもなく、そんな趣味の所員の知り合いも――多分いない。つまり恐らく見張りであろうその男は、所員を殺した本人か仲間ということになる。医務室のベッドの上。カスミは気付かれないように辺りを見回した。

(いつの間にここに?)

所員が殺されたのを見てしまった後の記憶がない。

(……私、気を失って)

ふと、カスミは静かに溜め息をついた。いつそ目を覚まさない方

が楽だったかもしれない。この状況で自分が助かる可能性は低いと心の隅で認めてしまい、更に恐怖が増していく。

だが――

（でも、こうして拘束してまで生かす理由が私にはまだあるの？）

施設はすでに占拠されていると考えて間違いない。何者かは分からないが、この施設を占拠する理由など、思い当たるふしは一つしかなかった。

（なら、私が生き残る方法も一つしかない）

その考えが浅はかであったとしても、僅かな希望にはなった。今は大人しく待つしかない。助けが来る事を。

自由を奪われ、痺れ始めた手足を庇いながら、カスミは改めて辺りを見回した。不審者が一人落ち着かない挙動で動き回っている事以外、室内に特に変わった様子はない。その男は、無線でひとしきり会話をした後、突然声を荒らげた。

「もうハイブリッドが！？　ちっ、ジオの警備隊か。さすがに対応が早いじゃないか」

その言葉を聞いて、自然と期待に胸が踊る。

（警備隊が来てくれた！？）

ジオ社と軌道エレベーターに常置された警備隊。それはハイブリッドのみで編成され、信頼性は極めて高かった。ハイブリッドといえば、対キメラにおいてのプロフェッショナルだが、当然ながら、あらゆる不測の事態に対応できる能力は人間より勝っている。

特に、ハイブリッドが具有する特殊能力『干渉インターフェース』は有効といえた。

干渉インターフェースとは、ハイブリッドに汎用されている脳内神経分子デバイスで、活動電位――電気信号として伝わる情報――を、独自の情報へ変換し、デバイス自体をシナプスとするマンマシンシステムで行うものである。それを駆使すれば、キメラや人間の位置を突き止めることも容易だった。

もつとも、占拠した敵対者が対抗手段を用意していたとしても不

思議はない。が、それでも、胸が膨らむのは抑えられなかった。

(きつと助かる)

まるで恋い焦がれる彼氏を待つ心地で、カスミは再び祈るように瞳を閉じた。

「ネ、ネウロンが占拠された!？」

ガヴリアの言葉に、グラウは不覚にも跳び上がってしまった。僅かに眉をひそめただけで動揺などおくびにも出していないガヴリアの前ではあまりにばつが悪い。

「まあ落ち着いてくれ」

「あ、ああ……で、状況は？」

腰を下ろしつつ、尋ねる。

「あまり芳しくないよ。宇宙ステーションへの侵入は擬装の識別コードであつさりとクリア。これはこちらの判断ミスだから仕方ない。即応して、統制本部でエームズ指揮の元、警備隊が動いてくれたが

……」

「が？」

「未確認ではあるが、キメラと思しき反応があつたらしい」

ガヴリアの眼光が再び鋭くなる。懸念されていた事態。彼を追い詰める要因。

「まさか、リベラル？」

ガヴリアが静かに頷く。

「もしキメラが関与しているのであれば恐らく間違いない」

「……なるほどな。さすがのお前でも焦るわけか」

グラウは頭を抱えた。事態の深刻さをそう簡単に受け入れられそうもない。そして、今自分に対してガヴリアが望む事はあまりに重過ぎる。

ひとまず、今は現状を知る事が先決だ。

「先行した警備隊の人数は？」

「15名。適合者のシュウとミリアにはMTSの装着命令。他のハイブリッドに関しては制限付きだがレールガンを許可した」

「内部でレールガンの使用許可とは……穏やかじゃないな」

「リベラルを見くびっていたわけではないが、今はそういう状況だ。ネウロンはなんとしても奪回しなければ」

「……俺は、何をすればいい？」

あえて問う。

「君達”の力を貸してほしい」

分かり切っていた答えでも、純粹かつ真摯^{しんし}に、ガヴリアの言葉は偽りとは無縁に聞こえる。

しかし、グラウは素直に頷けなかった。

「仮にリベラルだとして、やはり狙いはアニメー」

思わず口ごもる。グラウは咄嗟に視線をエリファに移した。勘繰り過ぎたわけではないが、不可避の胸騒ぎがそれを余儀なくした。

表情からは伺えない心の奥底。それは動揺なのだろうか。そっと握ったエリファの手は、小刻みに震えていた。

軌道エレベーター内部での戦闘。それは想定されていた非常事態の一つとはいえ、前代未聞であるという事実に変わりはなかった。故にあらゆる可能性を懸念しつつ、対処しなければいけない。統制本部はその緊迫した空気が張り詰めていた。

「宇宙ステーション第3ゲートの被害状況は!？」

「ネウロンのコントロールプログラムへのハッキング依然継続中。

26分後にはイニシアチブ完全に奪われます!」

「プロテクトをフェーズCに移行しろ!」

「第12ゲートにカメラの生体反応更に増加!」

「セクション2で警備隊の交戦を確認!」

飛び交う大声。加えて、統制本部の800インチ液晶画面には、とめどなくデータが表示されていく。それら全てを頭にいれつつ、

エームズは打開策を模索していた。

（ネウロンを奪取したところで、それだけでは意味がない。いったい何が目的なんだ？）

聞き知る情報だけでそれを察知するのは不可能に近い。最悪の事態を未然に防ぐ手立てを考えなければ。

エームズはインカムを耳に付け、無線を繋いだ。

「シュウ、そちらの状況を教えてくれ」

交戦中だと分かる確然たる音が耳に付くが、警備隊の隊長シュウからの応答は意外にも明瞭で早かった。

『現在、先陣を援護しながらセクション2のエントランスで交戦中です』

「戦況は？」

『最悪……とは言いませんが、正直言いたい気分です。誰かカメラにここが宇宙ステーションの内部だと教えてくれませんか？』

厳しい言葉とは裏腹に、シュウの口調は談笑しているようだった。ハイブリッドだからこそその余裕だと思えば理解できなくもないだろうが――

「苦戦を強いられているようだな」

『僕は手加減を余儀なくされていますからね。それに、相手には武装した人間までいます。これは情報に無かった。今の装備では殺傷能力が高過ぎる』

「対処は難しいか？」

『僕らは人殺しにはなりたくないし、するつもりもない。すでにこっちには負傷者もいます。一時撤退を考えてもらえませんか』

「……敵に猶予を与えるわけにはいかない」

が、ふと気付く。それは至極真つ当な意見のつもりだったが、見下していると思われるのも反論の余地は無い。

「いや、善処しよう。それまで、何とか一矢報いてくれ」

『期待せずに、頼ります』

「信用ないか？」

『善処とは、そんなもんだと。では、もう一頑張りします!』

通信が切られた。もしかして見下されているのは自分か? 当

てこすられて平気でいられる程プライドは失っていないつもりだが。

(いや、計算か?)

フツと漏れた笑みをそのままに、エームズは通信を総裁室へと繋いだ。

悶々とした心象。それは臃げながらも絶望そのものだった。

エリファは振り返す咳を堪えるように、左手を胸元に押さえ付けた。

――アニマ。

その名を忘れるはずがない。忘れることすらできない。永遠の木^こ霊^{だま}。必然の呪縛^{しじょう}。

(私に、人の醜怪^{しゅうかい}な潜在意識を突き付けた男。悪夢の元凶)

2年前。ネウロンで大掛かりな干渉実験を行う為に、アニマと共に居た。その実験は、ハイブリッドの干渉インターフェースを更に広域で強力な干渉波へと増幅させることを目的としたものだった。

しかし、実験は難航した。度重なる失敗により時間は無駄に過ぎ、疲弊によっていつしか生きる気力すらも失せる程になっていた。

それでも尚、実験は強行され続け――

そんなある日、アニマはおもむろに言った。

『真に憎むべきは誰か。お前にはそれが分かるはずだ』

それは、甘い誘い^{いよかい}の囁きだった。

心が揺れ動くのを確かに感じた。が、同時に言い知れぬ恐怖を感じ、抗弁もせず頑なに拒絶した。いや、正確には、それしかできなかった。

もちろん、アニマにとっては抵抗ですらなかっただろう。アニマは不敵に笑い、溜め息混じりに言ってきた。

『なら知ればいい。真に憎むべき者、忌むべき存在を。……お前が

望めば、顕現される現実がある』

もはやそれは恫喝に似た物言いだった。青藍せいらんの瞳に渦巻く心の表象。それは紛れも無く漆黒の闇だった。

何がきっかけというわけではないが、エリファは辛い記憶を思い返すのを止め、悠遠な太古から届いているようなグラウの呼び声に耳を傾けた。

「エリファ……大丈夫か？」

「……だ、大丈夫よ」

心なしか青ざめているように見えるグラウの顔が間近に見えて、エリファは慌てて顔を背けた。ふと見回すと、そこはエレベーターの中。

「戻るの？」

素朴な疑問をぶつけると、グラウは肩をすくめ、苦笑しながら、

「おいおい、どこから覚えてないんだ？」

「いつ総裁室を出たのか分からない」

エリファは小さくかぶりを振った。

鮮明に思い出せるのは今し方の記憶ではなく、むしろ昔の記憶だった。それは比重の度合いによる峻別しゅんべつなのだろうか。

だが、その自問に答えを見つけ出す前に、エリファはグラウに視線を戻した。

「ねえグラウ、一つ聞いてもいい？」

「ん、どした？」

グラウはエレベーターに備え付けのベンチに腰を下ろすと、視線はこちらに向けたまま頬杖をついた。

「さっきグラウが私に言ったこと。あれは、その……もしかしたら、今はまだ無理かもしれない。それで……もし、それが……真っ当でないなら、私は」

上手く言葉が続かず、思わず口ごもる。視線もいつの間にか自分の足元に向いていた。

「氣負い過ぎなんじゃないか？ 俺は今のエリファが真っ当じゃないなんて一言も言っていないぞ？」

「でもあれがグラウの望みなら……」

グラウは頬杖をやめてかぶりを振った。大きく、長く。

「だから、氣負い過ぎだってば。俺はエリファに抽象的な正しさを求めたわけじゃない」

その口調は、限らない寛容を思わせる程に穏やかだった。

「所詮、正しさなんて、主観的価値判断にすぎない事なんだよ。道徳、倫理、真理、正義……それら道義道理全てを得る事だって、人間にはできやしない。凡庸だからこそ、利他を重んじて生きていかなきゃいけないんだ。……まあ現実、それすらできない人間がいるから、争いが絶えないんだよな」

息が続かなくなったのか、自分を落ち着かせる為なのか、グラウは大きく深呼吸した。そして再び言い出す。

「ハイブリッドは、そんな人間が起こした戦争の残片だ。そして今でもカメラに対抗する力を求めている。だけどその一方では正反対とも言える意図の力をハイブリッドには望んでいる。特にエリファにはね。お前の力があれば人間が変われるかもしれない。……情けないよな。でも、それが人間なんだよ」

うなだれそうになったグラウに、エリファは優しく囁いた。

「グラウ“は”……違うよ」

気休めでもあり、慰めでもあり、真実でもあった。とにかく、グラウが悲しむ姿を今は見たくなかった。

「そうか？ ならお前のお陰かもしれないな」

照れ臭そうに笑ったグラウを見て安堵を覚える。それは嬉しい事なのだと、エリファはひそかに認めた。

「……嬉しいよ」

自然と出たその言葉は、はっきりと心地よかった。

覚醒

二つの予想外の事実、カスミは打ち萎^{しお}れていた。

一つは、期待していた警備隊がネウロンに辿り着けぬまま撤退をしたらしいという事。そしてもう一つは、自分の命が長くは保証されない^とと改めて実感した事だった。

ただ、徹して銃口を突き付けてくる横柄な男の前では、気丈に振る舞うしかなかった。

「警備隊を退けるなんて、ハイブリッドをコントロールでもしたのかしら？」

それは馬鹿げた与太話ではある。それでも、沈黙を紛らわすには仕方ない。

「無駄話をする暇があるなら足を動かせ。時間が無いんだ」

「どこで何をするのか私には分からないのだけど？」

「まだ空々しい態度を。自分が生かされている理由に答えはあるだろう？ ま、お前の価値はそんなもんだ」

耳障りな男の濁声が不快に響く。

施設の中枢ブロック。そこへと繋がる通路に無情に響き渡る足音は、まるで死への秒読みに聞こえてくる。男の手の内にある自分の運命を易々と甘受するつもりなど毛頭ないが……

「それだけの価値しか無いなら気が進まないのは当然でしょ!!」
「がなる。恐慌をきたすとはまさに今の状態なのだろう。そもそも今まで平静を保っていられた事自体不思議でならない。」

と、すかさず右腕を振^ねじ上げられ、カスミは呻いた。背後に回った男は耳元で、

「心配するな、俺が直々にお前をどうこうするつもりはない。それを決めるのは俺じゃないからな」

首筋に触れる生暖かい鼻息。加えて、藪から棒な男の発言に思わず我に返る。気になる言い回しだ。

「き、気休めのつもり？」

「そう聞こえるか？　なら幸せな女だ」

右腕が開放された。痛みに顔を歪めながらも、カスミは男を睨みつけた。

「例えるならこの“牢屋”に閉じ込められた哀れな男の事さ」

大仰に両手を広げて、男は言った。平静を保てなくなった脳の回路でも、その言葉の真意は理解できる。つまり、この男はネウロンの真価を知っているのだ。

「何故……いえ、どこまで知っているの？　この施設の全てを知るエンジニアすらごく僅かなのに」

「まあ“情報”とはその程度のものだ。奴にとってもな」

男の含みのある言葉に、カスミは不可解な悪寒を覚えた。いや、含みというよりは、それはまるで“代弁”のように思える。

人間でありながらハイブリッドの能力を併せ持つ、始まりの存在。ハイブリッドイニシエーター

――アニマと呼ばれる存在。

「有り得ない」

カスミは呻くように漏らした。

「有り得ない事は起こるもの。……ようは蓋然性がいぜんが高かっただけじゃないか？」

「蓋然性って」

抗弁をしても、現実に変化が起こるわけではない。認めるしかなかった。

（でも……どうして？）

積もる疑問をよそに、ネウロンの本丸、ブラックチェンバーは目と鼻の先に迫っていた。

「悪い報せしらせが2つあります」

エームズは総裁室のガヴリアへと通信を繋ぎ、重々しく口を開いた。ガヴリアとのやり取りは日頃から慣れているとはいえ、事態が

緊迫しているだけに、きりきりと胃が痛む。もともと、それを我慢する術くらいは当然知っている。

『そうか……それで、1つ目は何だ?』

ガヴリアは特に声音も変えず――要するに、いつもの事務的な口調と何等変わらなかった。それは総裁という立場であるからこそその自制でもあるのだろうか。

「はい。警備隊の一時撤退を強いられそうです。敵方の戦力に武装した人間がいたのは誤算でした。負傷者もいますし、いくら非常事態でも彼等に人殺しはさせられません」

『シュウに説得でもされたかい?』

「えっ」

『いや、それは置いておこう。それでもう1つは?』

「は、はい。現在プロテクトの切り替えで阻止はしていますが、ネウロンのコントロールが奪われるのも時間の問題かと」

『そうか』

初めてガヴリアの声が沈む。エームズも頭を抱えたい気分だったが、そこは持ち前の精神力で乗り越えるしかなかった。

『敵性分子の特定は?』

「現在、擬装コードなどから調査中です。もう少しお待ち下さい」溜め息らしき音を残し、ガヴリアから沈黙が生まれる。何かを思慮しているのだろうか、姿を見る事ができない今は判断が難しい。ややあってから――

『ネウロンのコントロールが奪われれば、アニマに関してもそう考えて間違いない』

「しかし“あれ”は……」

『もはや人の意味を捨てた存在。しかばね屍に等しい。だが、あのシステムを築き上げたのは、外でもない“その”シュロム・マウアーだ。何があっても不思議はない』

シュロム・マウアー――ハイブリッドの製出基礎を築いた、ト・コイノンのハイブリッドエンジニアであり、無類のシステムエンジ

ニアでもあった。ハイブリッドや干涉インターフェースの存在は彼無くして有り得なかった。しかし一方で、偏狭的な言動も数多く、頻繁に批難の対象とされた事実もある。

ガヴリアの言わんとしている事は少なからず理解できる。はつきりと甦るのは終戦の悪夢。もちろんそれは不安だった。

「では、エリファに」

それが、エームズにとって最善と思える策だった。
が――

『グラウに打診はした。だけど、答えを出すのは私達じゃない』

「しかし、このままでは」

『分かっている！』

ガヴリアの怒声に虚をつかれ、エームズは思わずたじろいだ。落としたそうになったインカムを手の平で慌てて押さえる。

『すぐに残りの隊員を呼集してくれ。負傷者を救助しつつ、シユウ達の援護と対処を――』

「総裁！」

負けじとエームズも声を荒らげて抗言したが、ガヴリアそれを軽くないなし、言葉を紡ぐ。

『エリファは……まだ苦しんでいる。彼女は、人間の醜い心根の全てを痛感した。それを知り抜くことは、到底我々にはできない』

確かにそれは自分にも無理だろうとエームズは心中で認めた。だが、総裁という立場で、命令に私情を交える事は本来あってはならない事だろう。

「エリファを庇^{かば}いたい気持ちは分かります。しかしその為なら他のハイブリッドは犠牲になってもいいのですか！？」

『身代わりの犠牲^{スケープゴート}など、私は望んでいない。……待つのは賭かもしれない。それでも今の彼女には時間が必要なんだよ』

それが軽はずみな発言ではないのは十分に知れる。しかしだからこそ意味が重い。エームズはかぶりを振り、
もろは

「この世界で、優しさは諸刃^{もろは}の剣なのですよ？」

『優しさの無い人間など……。私はただ、正しい弱者でありたいだけだ』

当然の如く、ガヴリアの口調に迷いは一切感じられなかった。

第一管下ラボへ戻ったグラウは息を吐く暇も無いまま、デスクへと腰を据えた。他のエンジニアも一様に忙殺されている。今の状況では、恐らく別の管下でもきりきり舞いしている事だろう。

しかし――

（俺はいいのかこれで？）

まだ、ガヴリアへの答えは出していない。作業に専念する事でうやむやな気持ちを誤魔化しているのは明らかだった。

2年。その月日で確かにエリファは変わった。しかし傷付いた彼女の心は決して癒えてはいないだろう。それは言動から分かる。

（このままでは、俺も見放されるかもしれないな）

グラウは嘆息し、キーボードを叩く指を止めた。すでにエリファとゼーンは、アセンブラー槽で局地戦闘プログラムの調整段階に入っている。

そのアセンブラー槽に視線を向けたところで、エリファが気付くはずはない。彼女から精神干渉されているならば話は別だが、調整中の今はまず有り得ない。

ふと。

（不便な生き物だよな、人間てのは）

遙か遠い過去、人間は言葉に勝る意志の疎通――つまりコミュニケーションを可能にしていたという説があるらしい。もしそれが真実であるならば、今の人間は何とお粗末な事か。

ハイブリッドが新時代を担う――それはある意味、人間の失った、もしくは成し遂げられなかったという重荷を背負わせる為の建て前なのかもしれない。

（もつとも、その建て前で、他人との関わりや干渉を上辺だけのもの

のにした人間の“本音”にどれだけの価値があるのかは微妙か)

エリファはそれすらも知っているのだろうか。人の潜在意識が渦巻く、世界の根底にあったものを。

(いや……それは、人間こそ見なければならぬ現実なのかもしれない)

心理的に扇動され、改めてキーボードの上の指を動かす。

(……どこまで矛盾しているんだか俺は)

つまるところ、自分もエリファという存在とその力に依存している証拠だ。呆気なく漏れた自嘲にグラウは認めざるを得なかった。

「こっちの調整は仕上がったわよ。MTSの組み替えとAIF(対干渉還元制御)のインストールは……グラウ？」

突然、脇からシレーヌの顔がぬつと現れた。端正な顔の中にも一際目立つ瞳を更に大きくし、不安げな表情で覗き込んでくる。

「終わった？」

「ん……あ、何が？」

「何がって——やだもう、まだ途中じゃない。……大丈夫？ 疲れてるなら代わるわよ？」

「いや、平気だよ、ちよつと考え事してただけさ。早いとこ終わらせなきゃな」

ディスプレイには、マルチトランスシステムMTSと呼ばれるハイブリッド専用の多機能戦闘用機構の組み替え状態が表示されている。

MTSは、内部に組み込まれたトランスモジュールから得る戦闘機能を——NB Mへと伝達するなど——能力として具現化させる役割をしている。

そして——

(……D)

組み替えのトランスモジュールの中にある『D』の文字。『デュナミスDu namis』を冠するそれは“力”を意味するエリファ専用のトランス。エリファが『ノエマ・デュナミス』と呼ばれる所以。

ようやく組み替え作業も終わりに差し掛かった時、後方からアオ

イのずけずけとした不謹慎な物言いが聞こえてきた。

「あゝちよっとお、まだ終わってなかったの？ 私にめんどい仕事押し付けておいて自分はサボり？」

「サボりって……作業内容はな、こっちの方が難儀だったの。そういう自分は任された仕事はしっかり全うしたのか？」

「ふふん、当たり前じゃない。はい、第3管下から貰ってきたわよ？ えっと、これはGVR-0019ベクターライフルって言うらしいよ。破壊力はレールガンには劣るけど、えゝ小型のリニアモーターパックを内蔵していて、専用のウイルス弾を使用するんだって……どうよ？ まあ私の女性の魅力にかかれればこれくらい余裕ね」

自慢げに胸を張るアオイだが、その性格とショートヘアに年中ヴィンテージジーンズというボーイッシュな風貌のどこに魅力があるのかは大分疑問が残る。

アオイが差し出したベクターライフルをグ라우は受け取りながら、

「なるほど、さすがは第3管下。で、その専用の弾丸は？ しかも1丁だけ？」

「えっとお、残念ながらもまだ試作段階だから、これしかあげられないとの事なのでこれだけなんですぅ」

「……………」

二の句が継げない。受け取ったライフルをそのままアオイに投げ返した。胸を張れる気が知れない。まあ所詮アオイの魅力とはその程度だろう。納得。

「え？ いらないの？」

不思議そうに首を傾げるアオイ。

「試作型のモニターをするつもりは無い。しかもこれだけで使えるか馬鹿野郎」

「えゝせっかく貰ってきたのに」

何やらぶつぶつと独り言を漏らすアオイだったが、いつも通り馬鹿はそのまま捨て置き、再び作業に取り掛かる。MTSの組み替え作業は大して手間取る事なく進み――

「さて、と。とりあえずMTSはこれで終わりだな。次はAIFか」
「それが本当に必要な状況になると思う？」

組み替えが終わったMTSのデータを再確認しながら、シレーヌは言った。

「ガヴリアはそうなる前にどうにかしたいんだけど、どうなるかな」

「でも、こういう事態は少なからず予測できたはずよ。認識が甘かったと責められても致し方ない状況よね」

「手厳しいお言葉だな」

「世間はもっと厳しいわよ。ジオ社の価値が下がる可能性もあるわ」

「目的は、ジオ社を貶める事ってわけじゃないだろうけど……ガヴリアは社の価値とかを優先するような利己主義じゃないからなあ」

「それこそ樂觀的過ぎる」

「そうだろうけどさ」

「ことなか事勿れ主義で生きていけるほど穏やかな世界ならば、人は争うような無益な事はしないだろう。残念ながら、今も昔もそんな生易しい世界ではない。」

「やっぱり……必要になるだろうな。これも、エリファの力も」

「2年前から続く、アニマの“仕組んだ”シナリオだとは思いたくないわね」

「勘弁してくれ。それじゃエリファがいつになっても救われないよ」
しかし――

（今のままではどのみち）

十分な手立てを講じておくに越したことはない。

AIF――『アンディインターフェイスフィードバック対干渉還元制御』は、異種の強制干渉に対処する為のデータモジュールで、アニマへの唯一の対抗手段でもあった。

「今の俺がエリファにやってあげられるのはこれくらいだ」

AIFのデータをインストールしながら、齒痒さに溜め息が漏れる。“また”自分は何も出来ないかもしれない。いや、そもそも、最悪の事態などなければそれで済むことだが……

――胸が騒ぐ。

それは勘ではなく、言い知れぬ実感だった。

「……ようやく電力が戻ったようだな」

男はそう呟くと、目の前の電子扉を開け放った。瞬間、長い間密閉されていた質の悪い空気が、頬を不快に撫でる。

カスミはうなだれていた首を起こし、暗闇へと向けた。ネウロンのブラックチェンバー（機密室）内部には、小さな光がぽつぽつと点り始めている。そして――10秒もしないうちに、ドーム型の中枢部は眩しい程に照らし出された。

天井からは無数のパイプやケーブルが血管のように壁を伝い、緩やかなスロープに囲まれた中心にある物々しい機械へと繋がっていた。更にNBMアセンブラー槽に似たシリンダーが2本、その機械を中心に並んでいる。

今、シリンダーの外壁は閉ざされていて内部は見えないが、その一方のシリンダーにアニマは“いた”。

「あれがそうなのか？」

「……ええ」

男の問い掛けに、カスミは半ば上の空で答えた。脳裏では違う思考が巡っている。それは、自分の安否。アニマの存在。アニマを欲する者の事。

男の言葉に惑わされたのかは分らないが、その答えはアニマが握っているようにも思えた。

（あれは……ただの棺ひつぎじゃない）

その心の呟きは納得して出たものではない。不安を拭えないのは確かだった。

（見れば分かることよ。この目で）

カスミは何とは無しに、ドームを見渡した。2年前と何も変わっていない。“あの日”のまま。違うのは、ここにエリファがいない

事だけ。

カスミは中心部に焦点を合わせ長嘆した。

と、丁度スロープに差し掛かったところで、男は問い掛けてきた。
「このドームの正式名称を知ってるか？」

その質問に何らかの意図があるとは到底思えず、カスミはさりげなくはぐらかした。

「さあ、知らないわ」

男はさもありなんと、得意げに言ってくる。

「だろうな。今となっては知っているのは恐らく俺だけだろうな。

いや……私か？」

不可解な言動にカスミは訝る視線を向けた。だが、男は構わず続けてくる。

「デウス・エクス・マキナ。それが名だ」

それが正式名称だというのは確かに初耳だった。しかし、その言葉は聞き覚えがある。そう、それは確か――

「……機械仕掛けの神、だったかしら？」

男が僅かに瞠目する。

その仕種を見て、正答なのだとカスミは確信した。

「見掛けによらず、なかなか博識のようだな」

「ただの生兵法よ」
なまびょうほう

「謙遜は有為な人間の証でもある」

淡々と語る男の真意は、相変わらず理解し難い。しかもそれは、このドームに来てから酷くなった気もする。

（思い過ごし……でもないわよね、明らかに変よ）

何かに誘われるかのように歩く男に急かされながら、緩やかなスロープを徐々に下っていく。もう中心部まで50メートルもない。

思った程の静寂ではないと今更ながら気付いたが、それでもやはり男の語りは否応なく聞こえてくる。

「人間という生き物は、自分達の常識より優れた能力を持つ存在を尊び、敬う。そして概念を超越した存在を崇めようとする。それは

人間の本能に紡がれた性だ^{さが}」

聞き流せばいいだけの事だが、男の高慢さがあまりにも腹立たしく、小首を傾げて抗言した。

「どうかしら？ 人間は恐怖もするはずよ」

ハイブリッドやカメラがそうであったように。それらは実際、恐怖の対象とされた。今ではハイブリッドの理解は広がってきているが、カメラが忌み嫌われている事は変わっていない。この男のそういった揺るぎない自尊心の塊であることこそ人間の性だ。そう思えてならなかった。

「なるほど。だが、それは認めざる者の戯言だとは思わないか？」

「何が言いたいのかさっぱり分からないわ」

愚痴るように言ってかぶりを振る。が、男は何も言わない。全てを察してみると言わんばかりの眼差しは、身震いしそうな悪寒となつて首筋を粟立たせた。

男が不意に足を止める。理由は一つしかない。カスミは仰ぎ見た。2本のバイオシリンドー。その狭間にそびえるメガロインターフェイスシステム。それは見方によっては、妖艶な翼を広げた悪魔のように見えなくもない。

「さあ、ようやく出番だ所長。解除コードを打ち込んでもらおうか」

「あら、情報とはその程度の物じゃなかったかしら」

「これは固有情報で識別するセキュリティだからお前にしか出来ないはずだろ」

「あら、固有情報だって立派な情報じゃない」

横目に鼻で笑ってから、カスミはコントロールパネルの前に立った。

静脈、指紋、声紋、網膜。個々の照合を済ませ、解除コードを入力していく。

「……………さあ、後はボタン1つで解除できるわ」

言いながら踵を返し、

「でも、一言言わせてもらおうけど、多分徒労に終わるわよ？」

「根拠はあるのか？」

「ええ」

カスミは断言した。

が――

「それがお前のアンチテーゼか？　どうやらお前も認めざる者のようだな、カスミ・イーリス」

男の回りくどい言い草に、業を煮やす。

「だったら見ればいいわ、その目で！　節穴じゃないんでしょっから！」

握り締めた右手を勢いよくコントロールパネルに叩き付けた。ほぼ同時に、軋るような音を響かせ、外壁シャッターが開き始める。

やがて、男は悠然と目を伏せると意味深な笑みを浮かべた。その笑みの意味など理解できるはずがない。が、言い知れぬプレッシャーは確かにあった。

それが杞憂きゆうであれと願いつつ、視線を流す。

（そうよ。この目で確かめるんでしょ？）

淡い白緑びやくろくの光を放つ2本のバイオシリンダーが視界に入る。その右側のシリンダーには、2年前、エリファの干渉がNBMの暴走を誘発した事によって“尽き果てた”アニマの遺物が浮いている。もはや人であった面影は無いに等しい。骨格らしき物が辛うじて残っている程度だろうか。

（……あの日のまま）

思わず安堵の溜め息が漏れる。

「なるほど。これがお前の自信か」

「ええそうよ。こんな物に価値なんて無いでしょ？」

「……価値、か」

笑みはそのままに男が呟く。そしてアニマのシリンダーの前へ立つと、おもむろに右手をかざした。

「アニマとはシュロム・マウアーそのものだと思われるが、少しばかり違う。分かりやすく言えば『精神情報組織』と呼ばれる1

つのハードウェアのような物だ。そう、価値とは必ずしも目に見えるものではない。……まあ、固有情報すらもアニメには単なる情報に過ぎない事は確かだが」

妙に饒舌じょうぜつになった男に訝る視線を向け、

「なら、何故私を!？」

「歴史的な立ち合い人になってもらおうかと思ってな。光栄な事だぞ？」

嘲りあざけりとは思えない男の返答は謎解きに近い。溢れ出す疑問は、意識を困惑へと突き落とした。

「何を……言ってるの？」

「“私が” 還る。ただそれだけの事だ」

と――

突如、ドームにメガロインターフェースの起動音が響き渡った。

同時にかざしていた男の右腕が共鳴するように震え出す。その状態はまるで男の“力” が作用しているようにも見える。そして、やがてはシリンダー自体も激しく揺らぎ始めた。

「確かこのバイオシリンダーにはNBMAセンブラーの機能もあったはずだな？」

その問い掛けが自分自身に向けられたものかどうか定かではなかったが、そもそも今の状況でそれはさして重要ではなく、男も答えを期待していなかったらしい。恍惚こうこうとした表情で、意志を注ぐように右手かざし続けている。

男の語る価値とは何かを考える暇も無いまま時間は過ぎ――わずか数秒だったかもしれないが――目の前で起こり始めた事象に、カスミは思わず息を呑み、我が目を疑った。

――有り得ない事は起こるもの。

男の言葉が反芻される。

目の前には、有り得ない――あってはならない事が起きている。それは、紛れも無い現実。

「そんな……嘘でしょ」

体の震えが止まらない。それは恐怖感が原因ではなく、まして寒さなどでもない。

意識が事象を拒絶している。

必死に震えを抑えようと両手を胸に抱え込むが、さほど効果は無い。視線を外そうにも、凍り付いたように瞬きすらままならない。

それでも、カスミははっきりと認めた。

(……アニマの再生)

原型を留めていなかったアニマの身体が、かつての形を取り戻そうとしている。夥しいNB^{おびただ}Mによって、骨格、神経、筋肉、皮膚が形成されていく。それは明らかに本来あるべきハイブリッドの範疇^{はんちゆう}を逸している。

「あなたは、いったい」

刹那。

メガロインターフェースのノイズが消え、男は突然膝から崩れ落ちた。まるで糸の切れた傀儡^{くぐつ}のように。

カスミは一瞬呆氣にとられたが、もはやその事由など考えるまでもなかった。

「……悪夢だわ」

舌打ちして言いやる。

が、シリンダー内で漂うアニマは高揚を隠さず、ほくそ笑んだ。

接触

朦朧^{もうろう}とした意識の中でも、“それ”を望む事は容易だった。もはや真に憎むべき、忌むべき存在は何かなど知る必要もない。男――アニマの悪意が人のまさに“それ”だった。

怒りや憎しみ、妬^{ねた}み、恨み、僻^{ひが}み。人間の様々な負の感情が流れ込んできた。

エリファはただ、言葉を連ね、詞^しを唱え、祈りを念じるように――一力を意志として世界に拡散していった。

（そんな心……なん、て……消えて、しま……え）

たちまち、けたたましい警報と目障りな警告灯の明滅に支配されていく。そして目の前に広がっていくのは地獄絵図。頭を抱え、悶え苦しむ人間達で溢れ、呻き声が響き渡った。

それと同時に、アニマの意識も遠ざかる。支配されていた感覚は次第に開放され、痛みと共に和らいでいく。エリファは元凶へも力を向けた。

（お前もここから消えろ！！）

意志の咆哮。力はアニマを貫き、NBMを暴走させる。その体は定形を保てなくなり、ふやけたパンのように膨脹していった。しかし、アニマの青藍^{せいらん}の瞳だけは依然何かを企むような、高慢な光を放っていた。微かに零^{こぼ}れる口元の笑みが、神経を逆立たせる。

だが――

それも長くはもたず、その体は泡の如く散り、力尽きていく。

忌ま忌ましい記憶だけを残して。

「……っ!？」

突然襲った、電流に触れたような衝撃。しかし、その感覚は初めではないとエリファは一瞬で悟った。思わず歯噛みしてしまう程

の不快感が、沸き上がる。それは紛れも無く、あの悪意に満ちた意識。

「……グラウ」

震える唇で何とか搾り出した言葉はあまりにか弱く、吐息のように消えていく。統制本部から送信されたメールに目を通していたグラウは名前を呼んだ事に気付いたのではなく、何か聞こえた程度の仕種で振り向いた。

「ん？ ……どうした、顔色悪いぞ？」

息が詰まり、返す為の言葉が出ない。よろめくようにグラウの肩へ掴まると、ようやく鼓動が落ち着き始める。

「嫌な……気配。あの男……まだ……」

「あの男って……まさか、アニマか!？」

驚きを隠せない表情でグラウが立ち上がる。その勢いで倒れてしまった椅子には目もくれず、グラウは統制本部とのホットラインを繋いだ。

『こちらは統制本部だ。今使用している回線は緊急用の――』

幸いと言えるだろう、回線に出たのはエームズだった。グラウが矢継ぎ早に喋り出す。

「俺だエームズ、まさにその緊急だ!」

「ん、グラウか？ 何かあったのか？」

「アニマが“起動”した」

『何だって!？ こちらではまだ何も感知できていないが』

「恐らくアニマ単体での局所干渉だろう。ネウロンが起動したわけじゃない」

『まさか、エリファが何かを感じたのか？』

「ああ。エリファの感知なら信憑性が高い。今のままでは手遅れなるぞ」

自分を、自分の力を信じてくれている言葉。まだ心地好い心の感覚は確かに残っていたが、結局自分の定めからは逃れる事はできない、また繰り返されるのかと思うと気重になる。

『しかし、何故だ……何故アニマが』

「悪いが俺には答える事はできないぞ。もちろんエリファにも」

『……分かっている。我々が期待しているのは結果だけだ』

「結果“だけ”ね……それは何とも有り難いお言葉なこと」

『あ、いや、済まない。私でよければ皮肉でも批難でも甘んじて受ける』

エームズの発言にグラウが口元を緩める。

「大丈夫、愚痴る相手はすでに決まってる」

と、その相手に心当てがあるのか、エームズの小さな笑い声が漏れた。

『では、先程のメールの通りに頼む』

「了解した」

回線を閉じたグラウは、一瞬顔をしかめたが、すぐにいつもの表情へと戻った。『大丈夫』と頷くと、グラウがそつと手を握ってくる。

メール画面を再度確認しながらグラウは説明を始めた。

「これから第一管下は本部へと向かう。一次撤退した警備隊がそこにいるから、俺達はまず彼等の処置にあたる。その後は、必要性があると判断された場合に限り、エリファやゼーンの直接的なバックアップをする予定だ」

「グラウはどうするの？」

シレーヌが問う。

「もちろん俺も行くさ。状況によってはネウロンへも行く事になるかもしれない。……今はまだエリファを1人にはできないしな」

握られた手を俯うつむいて見ていると、突然その手が離れ、今度は両手で頬を叩かれた。思わずグラウを見返す。

「い、痛っ」

「さあ、行くかエリファ。……心配するな、俺がついてるから」

グラウの大きな両手、その包み込むような温かさに促され、エリファは小さく頷いた。

統制本部に、警報音が鳴り響く。数々のプロテクトでも阻止する事が出来ず、ついに、ネウロンのコントロールは奪われた。この侵奪は散発的な事件ではなく、綿密に計画された侵入なのは間違いないだろう。

「しかし、こうもたやすく足を掬^{すく}われるとは」

エームズは無力感と悔しさに、舌打ちした。アニマが起動し、ネウロンまでもが本格稼働を始めれば、取り返しのない事態になる可能性は高い。それは終戦の悪夢――『空白の30秒』^{ナイトメア}と呼ばれる悲劇以上のものになるかもしれない。

（それだけはなんとしても阻止しなければ）

だが状況が芳しくないのは事実。新たに警備隊を呼集し、負傷したメンバーとを入れ替える事で戦力はカバーできるかもしれないが、まだ見えざる敵に動きあぐねている状態だ。

そろそろ、犯行グループの情報が出てきている頃合いだろうと思いい、エームズは尋ねた。

「擬装コードから何か分かったか？」

「はい、興味深い人物が出てきましたよ。2年前までト・コイノンで、あのシュロム・マウアーの下でエンジニアをしていた男です。名前はヴォルフ・アレンスキー、34歳。主にNBM開発を担当していたようです。で、元々のコードは、この男が所有していたプライベートシャトルの物でした」

「マウアーの下で、か。その男は、今どこで何をしているんだ？」

「……このデータが正しければ、2年前の“あの日”に死亡しています」

「死亡？ ……この男とリベラルの接点はあったのか？」

「疑わしい点は全くありませんでした。家族や親戚その他を調べても、リベラルとの関係はありません。今は当時のエンジニア関係を探ってはいませんが……」

「そうか。だが、マウアーと接点があったその男が今回出てきたというのが偶然では、話が出来過ぎている。何か新しい情報が分かったら教えてくれ」

「はい、了解しました」

期待という感情は封印して、エームズは相手に頷いた。簡単に説き明かせる事件ではないという確信と、分かったところで繰り返される歴史に辟易する。^{へきえき}

（人は過ちを犯し、後悔し、それに学ぶ。だが人はまた同じ過ちを犯す。……エリファ、君は今何を思う？）

青藍の瞳と、揺れる白銀の髪。赤子のように縮こめた体にはハイブリッド特有の光沢がある。だが、今はそんな事はどうでもいい。アニマはシリンダーから出るつもりなのだろう。シリンダー内の特殊羊水の排水が始まっている。

ようやく治まってきた震えを無視して、カスミは毒づいた。

「随分回りくどいやり方が好きみたいね。まるでエリファに阻止されるのを恐れてるみたいじゃない？」

言いながら、カスミは崩れ落ちたまま微動だにしない男へと近付いた。手首を掴み指を添えるが、脈は無い。つまり、死んでいる。

（どうゆうこと？）

あまりにも呆気なく事切れる非常識な現実は理屈に合わない。もっとも、今置かれた状況で常識と非常識の正しい区別などできる自信は無いが。

カスミは男の手に握られたままの銃を抜き取り、立ち上がりながらアニマへと銃口を向けた。

ほぼ同時に排水が終了し、シリンダーが収納されていく。アニマは平然と笑みを浮かべると、ゆっくりと足を踏み出した。

「あの娘が、自らの“意志”で私の前に来る事は無い」

「よく言うわね、エリファに拒まれた男が」

「あれは単なる一時の“感情”に過ぎない。そもそもハイブリッドは人間に従属する存在だ。意志などという無駄なものは備えていない」

「それって、屁理屈にしか聞こえないわよ？」

精一杯の嫌味を込めて言い放つが、アニマの意識は違う所へと向いた。今し方開け放ったドームの電子扉へと。銃の照準をアニマに合わせたまま、カスミは目線だけをそちらへ向けた。そこには、ライフル銃を構えた男数人がいつの間にか立っていた。

「さっきのメガロインターフェースの起動音を不審に思ってたか？ その感覚は悪くないが、あまり利口ではないな」

口の端を吊り上げながらそう言うと、アニマは右手をその男達へと向ける。それは、すでに息絶えた傍らの男がシリンダーへとつた仕草そのもの。力を示す予兆。

「何をするつもり？ 人間と機械は違うわよ」

「いくらお前でも、エリファの力を知っているなら分かるだろう？」

「自慢げに何を。エリファはあなたとは違う存在よ。だってあの子は純粹なもの」

その言葉がアニマのプライドを傷付けたかどうかは知らないが、少なくとも癪しやくには障ったらしい。そこはかとなく刺々しい声音で、

「くっくくくっ……あの娘が純粹？ そうか、そうだな。あの苦痛に悶もだえる顔は今でも覚えている。恐怖の顔を見るのは……悪くない」

そう言うと、アニマは開いていた右手をリングでも潰すかのよう握り締めた。

――刹那。

駆け出そうとしていた男達は、突然見えない糸に操られるように互いに銃口を向け、その引き金を引いた。銃声と同時に男達が倒れていく。

その光景を見せられて、カスミは言葉を失った。震えこそなかったが、血の気の引いた顔が不規則に引き攣つる。

くぐもった笑い声を漏らすアニマは、右手を下ろすと左手を向け

てきた。

「お前はいくらか賢い。余計な事は考えないことだ。長生きの秘訣だな」

「……くっ」

脅された恐怖に、カスミは思わず眉をひそめた。アニマの誇示する力の前では、銃などあまりに無力だ。

「……いったい……何が、目的なの？」

肩を竦めて笑うアニマを睨みながら、カスミは唸るように言った。「目的か。今の私ならば、世界を終わらせる事すら容易い。が、それでは醍醐味だいごみが無いというもの。とりあえず、あの目障りな娘を懲らしめるのも悪くないか」

「……見下げ果てた男ね。結局、こそこそとエリファに仕返しに來ただけとは——」

と、言い終えた瞬間、息が止まった。それは間違いなく、自分自身の“意志”ではない。次第に酸素が失われ、全身の力が抜けていく。

「口は災いの元だぞ、カスミ・イーリス」

そう言うなり、アニマは左手の人差し指だけを立て、銃を撃つようなジェスチャーを見せた。そこでようやく、新しい空気が肺の中へと流れ込む。

「は、はあっはあっ」

乱れた呼吸で、照準がぶれる。アニマの嘲笑ちやうしょうをこれ以上見るのは真っ平だったが、銃を撃てない苛立ちはそれより強かった。

近いようで遠い記憶。

浅いようで深い心像しんぞう。

時に自分の心が虚像きょざうに見える事は、生きる者の苦難なのだと、エリファは感じていた。

だが、望まれる事が生きる糧になるかもしれない——そう思念す

る事で曖昧な存在は顕在^{けんざい}する。それは容易ではないからこそ、希望になるのだろう。

(……でも)

心の一部はまだ絶望に滲^{にじ}んでいた。抜け出せない底無し沼のように、心底の闇は抗う事を許してはくれない。

馬鹿馬鹿しいほど純粋なのか、それとも度し難いほど臆病なのか。そのどちらかは自分では分からないが。

――心配するな、俺がついてるから。

グラウの言葉が脳裏を過る。

(どちらだとしても、私は答えを導き出さなきゃいけない)
もとより、自分に逃げ場は無い。

エリファは、左手首に装着したM.T.Sを見つめ、その手にそっと力を込めた。今、M.T.SにはDトランスが組み込まれている。それはもう1人の自分を具現化するための道具。深く考え、思い、念じ、願い――それは意志となって力になり、そして力は意志となる。

(アニマはいったい何が望みだったの？ この力を利用したかっただけ?)

だが、1つだけはっきりしている事があった。

それは――

(アニマは、人の悪意そのものだった。……でも、あれが人の全てじゃない……のよね、グラウ)

統制本部へ向かうエレベーターの中。壁に寄り掛かりながら、エリファはグラウの背中に問い掛けた。

と、

グラウの答えを待ち望んでいたわけではないが、不意にそれを邪魔するように投げ掛けられた言葉があった。

「なあ、エリファ。なんだったら俺がそのトランス使ってやるぞ？
まあおれはレセプター(被干渉体)タイプだから上手くは使いこ

なせないとは思うが」

すかさず、シレーヌがゼーンに失笑する。

「ちょっとゼーンじゃ厳しいわね。あなた終身雇用タイプなもの」

「んなつ、万年係長系かよっ！」

まだゼーンとシレーヌのやり取りは続きそうだったが、エリファは顔を背けて意識を別の方向へ向けた。奇しくもそれはグラウの視線とかちあった。

「……どう、したの？」

「ん、いや……なんか吹っ切れたような顔付きに思えて、な」

「それは……皮肉？」

エリファはこそばゆい心地を抑え、顔をしかめて聞いた。

「まさか、そんな事言ってもしょうがないだろ？」

しょうがないのかどうかはともかく、少なくとも本心ではないという気はした。いや、本心ではないからといって、それは偽りでもないのだろう。グラウの言葉に無意味さは感じなかった。

緩慢に過ぎる穏やかな心の時に、エリファはしばらく瞼を閉じた。ふと気が付くと、グラウが閉じようとするエレベーターのドアを手で押さえ待っていた。

「……あ、ごめん」

「いいよ。さ、行くぞ」

グラウが傾けた首に促されて、エレベーターを降りる。

総裁室、そしてジオ社の中枢である統制本部がある350階。エレベーターを降りるとそこは階層の各エリアへと通じるエントランスになっている。

見回すと、すでに第一管下のエンジニアによって、負傷したハイブリッド達への処置が行われていた。その中に紛れて、ガヴリアとエームズが何やら険しい表情で話していたが、真っ先に気付いたエームズが小走りに近付いて来る。黒のスーツに身を包んだ彼は、端から見てもハイブリッドより屈強に見えた。

「皆こちらへ来てくれ。現在の状況を話す」

エームズは努めて冷静に振る舞っているようだったが、その口調は乱れていた。それは彼が走って来たからではないのは容易に知れた。

「分かった」

グラウが頷き、エームズが歩き出す。グラウにシレーヌ、アオイ、ゼーンが続くのを見届けてから、エリファは最後尾で歩き始めた。向かう先にはどこか悲しげに立ちすくむガヴリアがいた。

エントランスは負傷したハイブリッドと、処置にあたるエンジニアとで、騒然としている。エリファは負傷したハイブリッド達を見て、やはり後ろめたさを感じずにはいられなかった。リベラルがアニマを手に入れているとして、それを“普通”のハイブリッドが対処できるかどうかは微妙である。だが、今の自分が対処できるかというのもまた、微妙だった。

（自分の事すら決められないのに）

今の自分の言い知れぬ歯痒さは、否応無く胸を締め付ける。

「あんまり気にするなよ。あいつらだって、れっきとしたハイブリッドなんだ」

思いもよらないゼーンの言葉につい啞然としてしまったが、エリファは事もなげに相槌を打った。

「万年係長タイプでも？」

「たあゝ口が悪い娘ですこと。たまに励ましてやりゃあこれだ」

「私は別に……大丈夫よ」

「あ、そ。まあ強がるのもいいが、今はハイブリッドの心配をしている場合じゃねえぞ」

「……そうだね」

「……………」

うつかり出た本音が、沈黙を生む。間が悪そうにポリポリと頬をかきながら、ゼーンは天井に視線を向けてしまった。

素直じゃない。その余裕すら、今は無い。

「ゼーン、それは君も同じ事だよ？」

と、諭すようなガヴリアの発言に緊迫した空気が張り詰める。総裁としての威厳を感じさせる雰囲気、各々の口はつぐまれていた。「状況が悪いのは変わらないんだ。今更言わなくてもゼーンだって分かっているさ。エームズ、頼む」

グラウは憂鬱に肩を竦めて横槍を入れてからエームズに言った。エームズは処置を受けているハイブリッドに目をやってから、

「見て分かる状況は説明するまでもないな。第2部隊の20名はすでにネウロンに先行したメンバーの援護に向かった。もう合流しているだろう。ネウロンのコントロールは奪われてしまったが、まだ敵に表立った動きが見られないのは救いだ」

「アニマの局地干渉もどういう事象かまだ分からないしな。動けない理由があるのかそれとも……」

「ん。それと1つ気になるのは、まだ未確認ではあるが、新種のキメラらしき反応が確認されたらしい」

「新種かよお」

ゼーンが大袈裟に溜め息を漏らす。

「敵の戦力は予想以上だったわけだ。それだけネウロンを重要視している、か。こちらの被害状況は？」

「施設の損害はまだ微々たるものだ。宇宙ステーション内部の人命救助も完了し、幸いステーションでの死傷者もいなかった」

「ネウロンの所員は？」

グラウがすかさず問う。一瞬の躊躇いの後、エームズの視線はグラウから外れたように見えたが、口調は変わらない。

「ランチの時間帯もあって、ステーションへ出ていた所員も多かったようだ。今の所、安否が不明なのは所長を含め、12名。ネウロン警備のハイブリッドが5名死亡していた」

「所員に犠牲者がいても不思議じゃない状況だな。警備隊だけでの勝算はあるのか？ 頭数だけではどうにもならないぞ？」

エリファは心中でグラウに同じた。だが、実際はその当然の事が出来ないのだろう。“並”のハイブリッドの手には負えない現状が

それを物語っている。

ハイブリッドの能力をより発揮する為のM T Sの導入は、ほとんど進んでいない。警備隊といえど、ごく一部のハイブリッドしかM T Sを使用していない。人間同様、ハイブリッドにも得手不得手、適性不適性があり、全てのハイブリッドが使いこなせるわけではなかった。となれば、適性者の力是否が応でも必要になるだろう。敵の能力が高ければ尚更、である。

「だからこそ、君達の力を貸してもらいたい」

予想通りのガヴリアの言葉にゼーンは自信満々に頷く。

「はいはい、了解です」

「頼もしい限りだな。……しかし」

エリファはガヴリアの見通すような眼差しに思わず口ごもった。

「あの……わ、私は」

「いいのか？」

グラウがガヴリアに聞いた。

何かを思い悩んでいるような表情でガヴリアは少し俯うつむいている。

エリファはふと、自分の気迷いを照らし合わせてみた。そうすれば、ガヴリアの心境が分かるような気がしたからだった。

——知って理解する。

これがそういう事なのだろうか？

だが、その答えを自分で見つけ出す前に、ガヴリアは口を開いた。「エリファ。今の君の状態を考えると、正直行かせていいものかと迷ってしまう。相手がキメラだけなら悩む事もないのだろうけど、万が一という場合もある」

万が一とはアニマの事だろう。ガヴリアは一呼吸置いてから、更に続けた。

「私にも迷いがある以上、君にはここには残ってもらわべきかもしれない。ゼーンならば技量は上だろう。安心して対処できると思うが……」

それは恩情なのか、それとも、遠回しに必要無いと言っているの

か。エリファは喉元まで出かかった疑問を吐き出そうとした。

だが、グラウが先んじて口を開いた。

「俺はゼーンの能力は誰よりもよく知っているつもりだ。だからこそ言わせてもらうが、ガヴリア、お前が危惧している方が一の場合、正直ゼーンには力不足だ」

「ではどうすればいい？」

「どうするか……それを決められるのは俺達じゃないんじゃないかな」

かぶりを振ったグラウは、最後に^{あお}煽るような眼差しを向けてきた。皆の視線を感じて、高揚する気持ちを理性の^{へり}縁で抑えながら、エリファは思考を紡いだ。

だが、胸奥にたゆたう答えは、まだ完璧なもの——つまりは自分の言葉と感情で表す事のできるものではなかった。まるで、波紋で揺れる水面から見る水底のように、それは至極曖昧に見えていた。

「少しだけ時間を下さい」

無意味に深遠な思いを巡らせるのは感情を揺さぶるだけだと分かっ
てはいたが、そこにこそ答えはあるような気がして、エリファは
きつく瞼を閉じた。

キメラ。

その存在は、第三次世界大戦が開戦した2078年より^{さかのぼ}遡る事3
年。2075年8月、テロや紛争が相次いで勃発していた中東で初
めて確認された。

確認された当初は、環境汚染による突然変異であろうという説が
一般的だった。しかし、翌9月。AMBO（アジア変質生物学研究
機構）は、その説を完全否定。採取に成功したその生物の肉片を解
析した結果、人為的な遺伝子操作によって生み出されたものと判明
したと発表。そして、多種の細胞が混在していることから『キメラ』
と呼ばれるようになった。

世界はこの事件に敏感に反応した。

それまでに、クローンや遺伝情報操作などは倫理問題として幾度となく議論の対象とされてきた。

故に、この事件は『許されざる領域』に、人間が足を踏み入れたことを裏付ける事実であったからだだった。この件に関して、一部では中東紛争の首謀組織であるアウガル（反連合政府同盟）によるものではないかとの憶測が為された。更にその後も中東でカメラの姿は幾度となく確認され、日増しに頻度は高まり、増殖している可能性も懸念され始めた。

しかし、それは懸念では終わらなかった。相次ぐ紛争の裏側で確実に増殖していたカメラは、ついに死傷者を出す事件を引き起こす。同時期に、アウガルがカメラを生成していた事も明白になり、治安改善に努めていた米軍はカメラの掃討作戦を即座に決行。事態は、鎮静化するかに思われた。

しかし――

米軍に油断があったわけでもなく、怠慢な作戦だったわけでもない、全ては万全かつ完璧であったはずだった。しかし、誤算は生まれた。通常の銃弾では致命傷すら与えられない強靱な体と、常識を超えた身体能力を持つカメラを前に、人間はあまりにも無力だった。為す術無く劣勢となった人間とは対照的に、カメラは増殖を続け、2076年2月には全世界で約500体が確認され、被害は拡大していった。

被害拡大の要因の一つとしては、カメラの増殖だけではなく分化も大きな問題だった。

始祖種と呼ばれる最初に確認されたカメラ以外にも、種が誕生。AMBOは始祖種『ケルベロス』以外に確認された2種に、『オーガ』そして『ガーゴイル』と名付けた。

驚異的とも言える速度で増殖を続けるカメラは2076年7月には1000体を超え、第三次世界大戦中には更なる新種『ワイバーン』の誕生もあり、最も増加した時期には優に5000体を超えて

いたとも言われている。

戦後。そのキメラも絶滅の噂が流れるほど数は極端に減少したが、結局絶滅までには至らなかった。それはなぜか、A M B Oは独自の調査でその原因を導き出した。

――キメラの進化。

2080年8月。A M B Oは、環境への適応や人為的な一定の進化が確認されたとの結果を公表した。その信憑性を疑う声は少なくなかったが、反連合政府同盟の残党、リベラルの出現がそれを決定的にした。

減少したキメラを強化改良し、世界に跳梁ちようりょうさせる一方で、リベラルは再びキメラの生成に手を付け始めていた。

それに対し、ト・コイノンはリベラルの鎮圧に踏み切るが、リベラルとキメラはその武力行使をかい潜るように勢力を拡大。世界の抑止力が暴走を食い止められなかった事に伴い、ジオ社はキメラの根絶に乗り出した。

2081年。大戦は終わったが、世界は新たな脅威しんかんに震撼しんかんしていた。

全16ゲート、4つのセクションからなる宇宙ステーション内部での戦闘は依然続いていった。本部の期待とは裏腹に、残念ながら足止めを食わされた状況から全く好転していない。むしろ相手に猶予を与えているとも言えた。

（この時の為に、リベラルが新種のキメラを生み出しているとは思議はないか）

干渉インターフェースによって感じる不気味な気配に、警備隊長のシュウは溜め息を吐いた。有り触れたキメラの反応に紛れて、馴染まないいくつかの反応が存在している。それが新種であるという確証は無いが、そうである可能性は極めて高い。

（っ！ 来たっ！）

セクシヨン2、第6ゲートロビーの柱に身を潜めていたシュウは咄嗟にその場から飛びのいた。それとほぼ同時に、けたたましい破

壊音が轟く。煙塵えんじんの中、朧おどろげながらもキメラの姿が見えた。

「ガーゴイルか!？」

ガーゴイル。オーガに似た体型だが、大きく違うのは背中に生えた翼と、発達した鉤爪かぎづめだった。怪力の特徴とするオーガに対して、ガーゴイルは俊敏な動きで相手を翻弄ほんろうする戦法に長けていた。とはいえ――

(力はある)

今まで身を潜めていた柱の根本はクレーターのように穿たれている。その中から煙を切り払い、ガーゴイルが飛び出した。

シュウは着地しながらレールガンを構えたが、予想通り狙い撃てる相手ではない。むしろ戦いの障害になるレールガンを放り投げ、右手から剣のイメージを具現化した。NB Mが流動し、長剣が形作られる。それを握りしめ、シュウはガーゴイルを迎え撃った。

振り下ろされた鉤爪を長剣で受け流し、体を捻りながら左足でガーゴイルを蹴り飛ばす。翼での空中制御も叶わず、ガーゴイルは待合に並ぶベンチを薙ぎ倒していく。逆に追撃する立場となったシュウはすかさず駆け出した。

『STインストール。NB MスタビライズLV2にシフト』

フラフラと起きながら翼を広げるガーゴイル目掛け、長剣を斬り付けた。だが、見極めたかのような動きでガーゴイルは半身でそれを躲かわす。確信していた手応えが無い事に驚いたが、冷静に剣を右へと薙ないだ。浅いながらも、切っ先がキメラの肉を切り裂く。

(……何だ?)

募る疑問。今まで数多くのキメラと戦い、体に染み付いた感覚が、違和感を訴えている。

浅い傷ではキメラの動きが衰える事は無い。たとえば肉体の一部が失われようとも、その“本能”はキメラを動かす。あっさりと本来の動きに戻ったガーゴイルに対応する為に、シュウはスピードを上げた。

『LV3にシフト』

浮上したガーゴイルに合わせて跳び上がり、剣を振るった。新たに切っ先が足の肉を捉える。しかし、それもまた予測していたダメージを与えられていない。

（拙攻を強いられているのか？）

結果的に詰めの甘い攻撃は反撃の余裕を生んだ。ガーゴイルは翼を広げて急停止すると、鉤爪を振り下ろした。

「ちっ！」

まんまとガーゴイルの術中にはまった。翼を持たない体での空中戦闘は分が悪い。加えて攻撃後の体勢では、攻撃を防ぐ手立ては一左腕を出すしかなかった。

鋭い鉤爪が前腕をえぐる。

「うぐっ！」

苦痛に顔を歪めながらも、シュウはその左腕で急降下を始めたガーゴイルの翼を掴んだ。喚き暴れ狂うガーゴイルと共に落下していく。揉み合いながらも体勢を優位に変え、地面に衝突する瞬間キメラを先に叩き付けた。それを下敷きにしてシュウは着地し、悲鳴のような奇声を発するガーゴイルの頭部にすかさず、剣を突き立てる。
だが。

体を痙攣^{けいれん}させながらも、ガーゴイルは驚くべき力で立ち上がる。背中から振り落とされた形となったシュウは思わず剣を手放した。

おぼつかない足取りで向きを変えるガーゴイル。後頭部に剣を刺した状態で立つキメラの姿は異様だった。

「そうか……なるほど」

ふと思いつ出した、キメラへの疑問を解決する糸口。普段、あまり物事に動じない質^{たち}だったが、さすがに身震いが体を支配する。

（これがOBISか）

声には出さずに呟いて、シュウは眉をひそめた。立っではいるものの、ガーゴイルは体のコントロールをほとんど失っている。攻撃体勢へと入ったガーゴイルを見据え、シュウはタイミングを計った。最大の武器である鉤爪を振り下ろそうと両腕を上げた瞬間、シュ

ウはガーゴイルの頭上を飛び越えた。背後を取るよう体を回転させ、後頭部に刺さったままの自分の長剣を視界に入れた。

『TTインストール』

稲妻が発生した両手で剣を掴み、一気に斬り下ろす。激しい爆発と同時に閃光に包まれたガーゴイルは吹き飛んだ。

「……ふう」

息を整えながら立ち上がり、ようやく倒したキメラを見遣った。予想外の苦戦を強いられた事にまた溜め息が漏れる。しかし、それも当然の相手ではあったが。

(OBI S…:そして狙われたネウロン。そういう事か)

長剣を右手に戻し、負傷した左腕に視線を落とす。NBMの自己修復機能が作用している為、傷口からの出血は止まっている。数分もすれば傷は消えるが、まだ戦闘が続けば、処置は必要になるだろう。

「上がってきたか」

負傷した隊員と入れ替わる為の警備隊の反応に気付き、シュウは放り投げたレールガンを拾い、合流する為に宇宙ステーションのエレベーターシャフトへと向かった。

はたして、どれだけの時間が経過したのか。すでに呼吸は落ち着き、銃の照準は確実にアニマに狙いを定めている。右手で銃を握り、左手でそれを押さえて、後は右手の人差し指でトリガーを引けばいい。2メートル程の距離は外す要素を持たないだろう。

「いい加減、銃を下ろしたらどうだ？」

「冗談じゃないわ。そんな事できるわけないでしょ」

銃を下ろしたら負ける。そんな強迫観念が体を強張らせる。しかし、このまま待てばどうにかなるのか、その疑問に答えてくれる者もない。孤独感は更に不安を募らせる。

「孤独と死への恐怖感。心が怯えているのがよく分かるぞ」

「ぐっ」

「私が憎いか？　だが気に病むな。怯えた人間が敵愾心てきがいしんを抱く事は不思議ではない。それこそ人間の本質だよ」

「仕向けた張本人せいじやくが何を！」

「そんな脆弱ぜいじやくで枷かせに縛られた人間の心を、私が開放しようと言うのだ」

「よまい言を！　あなただって人間じゃない、エリファに否定されたのがいい証拠よ！」

アニマの顔が僅かに歪む。それは人間の本質を語るアニマが人間である証明に外ならない。エリファという存在を、恐怖としている情動。

思わず、カスミは口元を緩めた。それが、アニマにとって決定的な侮蔑ぶべつになったのだろう。あからさまな殺意が、瞳に宿った。時を移さずアニマの腕が動く。

「っ！」

死への恐怖に直面した強張った体が、本能に動かされる。躊躇ためらいなど微塵も無く、右手の人差し指が引き金を力強く引いた。

1発2発3発――続けざまに、骨をも軋きしませる反動が腕を伝ってくる。我知らず叫んでいたが、耳をつんざく銃声は他の全ての音を霧散させた。爆ぜる火花は視界に焼き付いて、アニマの姿すら朧おぼろげにさせる。

立ち込める煙にむせながら、震える腕を下ろして火花の残像に埋もれたアニマを捜した。

（……いない！？）

しかし、そこにアニマの姿は見えなかった。視界のどこにも。徐々に残像が消え去っても、それは同じだった。

と。

視覚ではない別の感覚が、何かを感じ取った。

「私はここだ」

耳元で囁きが聞こえ、右肩に何かが触れた。訳が分からず、振り向き後ずさる。そこで、視界に入ったのはアニマだった。動揺はしたが、構わず銃口を向ける。

「いったい、何をしたの？」

アニマはこちらが慌てているのを興じているようにしか見えなかった。今にも腹を抱えて笑い出しそうな雰囲気漂わせている。

「なに、意識を一瞬麻痺させたようなものだ」

その麻痺した後遺症かどうかは分からないが、痺れた舌をやんわり噛んでから、カスミはアニマを睨み据えた。

「どうした、もう終わりか？」

「意地でも当てるわ」

そう呟くが早いか、カスミは再び引き金を引いた。さすがに慣れない射撃を続けたせいで両腕には痛みが走る。だが、当てる。その意地と共に、激しい閃光は幻想的な光芒こうぼうとなって、視界を埋め尽くした。

ジオ本社である軌道エレベーター。

その最下層部には、世界有数の航空会社が合併してできた巨大なエアポートが複数あり、それらターミナルから軌道エレベーターは直結できるようになっている。主に旅客の移動手段や物資運搬から衛星の搬送などにも利用されているが、それとはまた別の、エリア直通式リニアエレベーターに、ゼーンはいた。

「……後15分か」

エレベーターの現在位置などを示すパネルに表示された宇宙ターミナル到着までの残り時間を見て、ゼーンはもどかしい思いで呟いた。

軌道エレベーターはいくつかのエリアに区部できる。まず最下層から――旅客エリア、商業エリア、社員居住エリア、ラボエリア、工業エリア、統制本部、そしてこれから向かう宇宙ターミナルエリアとなる。

『第2部隊が今から10分程前に合流したわ。ひとまず任せるしかないわね』

インカムデバイスのバイザー状ディスプレイにはシレーヌが映っている。彼女は今情報サポートの為にアオイと統制本部にいた。

「戦況は相変わらずですか？」

『防戦一方ってところかしらね』

「やれやれ。あ、例の新種らしきカメラの情報は？」

『アオイが精査してくれてるんだけど――データは送信できる？』

シレーヌが左を向いた。ディスプレイには映っていないが、恐らくアオイは隣にいるのだろう。数秒後にアオイの声だけが聞こえてきた。

『全部じゃないけど、とりあえず送信するよゼーン』
「了解」

ディスプレイが縦2分割になり右側にカメラの精査情報が表示されていく。シレーヌがその情報に合わせて説明を始めた。

『感知できたカメラの数は16体。ケルベロスとガーゴイルとワイバーンね。で、その新種らしきカメラの事だけど、一応現存のキメ

ラと反応は似てるんだけど固有パルスが微妙に異なるみたい。まるでノイズが混じってるというか』

キメラは生体とはいえ、全て本能で活動しているわけではなかった。独立型のOSによって、ある程度人為的なコントロールが施されている。キメラを感じずるとは、そのOSの神経回路情報を感じ取るということである。つまり。

「反応が一致しないって事は、そのOSの構造や型式が違うか、もしくは外的な作用。じゃなけりゃ、変異種^{ミューテーション}？」

『さあ、まだそこまでは分からないわね。ただ、さっき隊長からの通信があつたんだけど、現存するキメラより強いみたいよ』

「キメラより強い？　ちなみに16体のうち該当するキメラは何体いるんですか？」

『まだ正確な数は特定できてないわ。ネウロン内部からのインターフェースジャマーで精査が難しい状況なのよ。ごめんなさいね』

「いやあ大丈夫ですよ。どのみち最終的には自分の感覚が頼りですからねえ。……あ、そいや、エリファはどうです？」

少しだけ時間を下さいと呟いた時のエリファの顔を思い出す。

『まだグラウというわ。連絡が無いところをみると……まだみたいね。今はホントにゼーンだけが頼りだわ』

「あ、そんなあ嬉しいなあ、見返り期待しちゃいますよ？」

顔の筋肉が緩み、ついにやける。何を期待しようかと妄想を始めようと思った瞬間、シレーヌは眉根を寄せた。

『すぐ調子に乗るのは悪い癖ね』

「……す、すみません」

『はあ……エリファに少し分けてあげたいわね、その性格』

「は、ははは」

『今のままで、エリファは大丈夫なのかな。ねえ、ゼーンはどう思う？』

知り合いのおばさん——いやもとい、お母さんが——娘とお見合いでもしてみない？　と、お見合い写真でも見せるかのようない——

のかどうかは経験した事が無いから定かではないが、そんな感じであろうシレーヌの問い掛けに、ゼーンは当惑した。

「ええっと……ごめんなさいお母さん、俺にはすでに心に決めた人が」

『……はい?』

すでに不機嫌なシレーヌの表情が更に険しくなる。やはり、返答を間違えた。

『しまいには張り倒すわよ。私が聞いているのはエリファの心情よ』

「ああ!」

『ああ!　じゃないわよ、まったく』

溜め息と共にうなだれるシレーヌに、とりあえずご機嫌取りで愛想笑いを見せながら、ゼーンは思いに沈んだ。

「んゝ心情かあ。そりゃ精神干渉すれば済む事だけど……俺はエリファの心の中を干渉した事はないし、これから干渉するつもりはないですよ。いくら心中が分かったからって、それで簡単に答えに結び付くとは思えないし。グラウの言う通り周りが答えを押し付けるべきじゃないんだろうけど、エリファが周りに答えを求めているなら、もちろん力にはなるつもりですけどね。でも、同じハイブリッドだからって分かん事は分かんですよ」

『そうよね。……それは私も同じ。知りたくても理解できない事だっっていくらでもあるし、自分の心すら知り抜く事のできない人間なら尚更。はあ、だからってゼーン達ハイブリッドに人知を越えた見解を望むのは……不躰^{ぶしつ}なエゴだったかもしれないわね』

「そうなのかな?　まあとにかくエリファが心から笑えるようになれば、答えが分かるんじゃないですか?」

『だ、か、ら!　そうなるにはどうすればいいかで悩んでるんですよ?』

「ああ!」

『……お気楽ね』

薄目で睨むシレーヌへの対処に悩んでいると、居心地の悪い空気が

を払拭してくれるアナウンスがエレベーター内に響いた。到着まで残り5分と表示されている。ゼーンは携行したレールガンとMTSマルチトランスシステムの作動チェックを済ませた。そして、宇宙ターミナルのカメラへの干渉に集中する為にバイザーを上げようと手を出した時、シレーヌの脇にエームズが慌てた表情で姿を現した。

『ゼーン、たった今シユウから通信が入った。突然何体かのカメラが暴走を始めたらしい。カメラは敵味方なく襲っているそうだ。それと、君に伝えてくれと言われたのだが……』

「？」

エームズが悩まし気な表情で、手元の小さなメモらしき物に視線を落とした。

『アルファベットで、O、B、I、S。……ゼーンなら分かってシユウは言っていたが、いったい何の事だ？』

「O、B、I S!？」

その言葉を口にした途端、ゼーンは身震いした。記憶の片隅から思い起こされた確かな恐怖感は背筋を冷たく支配していく。

「オヴィス」

不快感をあらわに口を開く。

『オヴィス？ いや、待て。それは聞いた事があるぞ。確か――』

「あれは反連合政府同盟の狂気。リベラルも正気じゃない」
アウガル

エレベーターが速度を落とし始めた。表示は残り1分で点滅している。

『ご利用ありがとうございます。間もなく、宇宙ステーションセクション1の中央ロビーへと到着いたします』

機械的な女性の声が、丁寧に告げた。

（さあて“今の”俺にできるか？）

沸々と湧き上がる怒りと同時に、ごまかしのような不安がこれから始まる戦闘への集中を妨げる。しかし、ここまで来たら形振りなりふ構わずやるしかない。

『ゼーン、シユウ達と何とか止めてくれ』

「……了解」

音も無く、エレベーターが停止した。ゆっくりと開くドアの先に渦巻く空気は、紛れも無い戦争の過ちを孕^{はら}んでいた。

それはほんの一瞬だった。あるいは一瞬ですらなかったかもしれないが、過ぎてしまえばそれを考えるのは全く無意味だった。

ただ轟くのは銃声だけ。喘ぎ声や呻き声、ましてや悲鳴も聞こえてはこない。苦痛に顔を歪める事や、死の恐怖を味わう暇すら与えなかった。

一瞬で相手の眉間に突き刺した、長剣へと定形を変えている右手から伝わる相手の死の感触に、アニマはほくそ笑んだ。

「殺すには惜しい。……だが、お前の相手をするのは少々飽きた」

言い放つと同時に右手を引き抜く。そのまま倒れる死体を避ける意味もあって、アニマは踵^{かかと}を返した。

ふと、血濡れた右手の長剣を見やる。

「当座^{とうざ}凌^{しの}ぎの身体とはいえ、これはこれで、悪くないな」

予想以上のNB^{ナノバイオマテリアル}Mの流動——組織変成の滑らかさには満足した。

しかし、それだけではまだ十分ではない。

長剣から滴る血をそのままに、アニマは歩を進めた。再び収納されたバイオシリンドーへと赴く。その底には、取り残されたように、プロトタイプのMT^{マルチトランスシステム}Sが落ちていた。それは、ハイブリッドとしての過去を記す物。

（薮蛇^{やぶへび}だともいうか？ これは……）

拾い上げ、左手へと装着する。

過去に執着心が無いといえは嘘になるだろう。生きる存在として、まだ肉体に未練がましくしがみついているのではないかと思い、理性では抑えられない憤懣^{ふんまん}が湧き上がった。が。ふと思ひ直す。

「いや、違うな。むしろ感謝しなければな。お前のお陰でこの身体を手に入れる事ができたのだ。なあ、エリファ」

霧散していく憤懣と入れ替わりに、心に満たされる恍惚。

「これは決別だ。無様な人間とのな」

それは誰に向けたものでもない。虚空に消えていく言葉に、深い意味は無いに等しかった。むしろ、これから発する言葉に優位性があつた。声高に言い放つ。

「顕在する事象は、私の力の意志。さあ、どうする？ 同士よ」

その声に共鳴するように、メガロインターフェースシステムの唸るような稼動音が響き渡った。

「オヴィスは私の意志と共にある力を具現化する。姿はカメラとはいえ、そう容易くはないぞ？」

システムを通して、意識がオヴィスへと拡散し、紡がれていく。
遍く意志は力となり、躍動する力は意志となる。

――＜思想・観念の力＞（ノエマ・デユナミス）

エリファも持つその名は、究極の力を冠する者の証明。摂理を越えた最強の存在。万象を掌握する精神の根底。

「だが、お前と私では決定的に違うものがある。それは意志の有り様だ。……それでも、私に抗うのだろうか」

漲る自信は力の現れ。

言い表せないほどの優越感にアニマは惜しみ無く哄笑した。

辺りに立ち込めるのは、肉の焦げたような臭いと、それを更に引き立てる生臭い血の臭い。そして否応なく目に付くのは、息絶えたいくつものカメラとハイブリッドの残骸。誇張するまでもなく、その光景は戦場そのものだった。

「……ちっ」

焦燥感と虚しさが胸裏に淀み、ゼーンは舌打ちした。

「警備隊の反応が分散してるうえに、数が足りない。シュウとミリアは何してんだよ」

加えて、カメラの反応も足りなかった。アオイからの精査情報で

は16体いるはずのキメラが、9体しか感知できない。だが、その理由は簡単だった。

(……OBISが残ったわけだ)

とはいえ、ケルベロスとガーゴイルは苦戦を強いられるような相手ではないだろう。問題があるとすればワイバーン。力、速さ、耐久性全てにおいて、他のキメラとは一線を画している。現時点での最強と言っても過言ではなく、1番の巨体を誇るキメラでもあった。MTSを持たないハイブリッドにとっての主力武器レールガンは、有効なダメージを与えられるが、ステーション内部への被害を抑える為の制限がある以上、頼みの綱とはなりにくい。そうになると、MTSの適合者の負担は自ずと大きくなる。

(体力的にシュウとミリアには荷が重い。俺が何とか――っ！第4ゲートのハイブリッドの反応が消えた)

ゼーンはすかさず駆け出した。

中央ロビーと第4ゲートを繋ぐ通路は直進で約400メートル。通常であれば、いわゆる『動く廊下』を歩くのだが、今はそんな悠長な事はしていられない。

「これ以上やらせるか」

たぎる怒りと高揚する感情は重苦しい気分をいくらか拭い去ってくれる。ゼーンはMTSを起動させた。

『STインスツール。NBMSタビライズLV2にシフト』
スピードトランス

瞬間、びりびりとした感覚が肢体のNBMSの躍動を促す。まるで体の細胞1つ1つに自我でもあるかのような感覚はいつになっても好きになれなかった。しかし、いつもの如く嫌悪感を抱きながらも弾みのついた体で滑走する。

(見えた！)

第4ゲート前のロビーに、キメラが3体とハイブリッドが1人。様子からハイブリッドはすでに負傷しているらしい。このまま防戦一方では、殺されるのも時間の問題だろう。

「やめろお！」

キメラに言葉など通じるはずはない。しかし、威圧にはなるだろう。

右手の定形を長剣へ変え、手負いのハイブリッドの前に回り込みながら、眼前のキメラーガーゴイルへ牽制した。直ぐに右手の定形を戻し、そのハイブリッドを抱えて後退する。

視界に3体のキメラーガーゴイル2体とワイバーン1体ーを捉え、今の立ち位置との距離を目測してから、抱えているハイブリッドに聞いた。

「おい、大丈夫か？」

「あ、ああ、なんとか」

弱々しい声だったが、返事があった事にひとまず胸を撫で下ろす。「まだ動けるな？　今すぐ本部まで処置しに戻れ。後は俺が何とかする」

「1人で？　無茶だ！」

「俺の事より、負傷してる自分の心配をしろってえの。さあ早く行け！」

腕にしがみついて抗言してくるハイブリッドを、ゼーンは突き放す心地で後方へ押しやった。

「……すまない」

振り向きざまにそう言い、痛めたらしい左腕を押さえながらハイブリッドは走り出す。それを見届けてから、ゼーンは再びキメラに相対した。臨戦態勢のキメラに攻め入るタイミングを計るほどの余裕はない。即座に構え、右手の定形を変えつつ飛び掛かった。

まずは牽制したガーゴイルに肉薄。

今度は牽制ではない一撃を放つ。

しかし、突き出した長剣が届かない。

と、その隙を待っていたかのように、もう1体のガーゴイルが視界の左隅で動くのが見えた。秀でたその俊敏な動きで、瞬く間に鋭利な鉤爪が迫る。速度を上げれば避けられるタイミングだが、今は無駄に体力を消耗するべきではない。素早く左手のレールガンを振り

上げ、ガーゴイルの鉤爪を弾き返した。甲高い音と火花がその衝撃を物語る。

その時にはすでに、追い撃ちとばかりにワイバーンは跳躍していた。漆黒の硬い鱗を纏う、10メートル以上ある巨体が、回転しながら太く長い尾を鞭のように振り下ろしてくる。

そのワイバーンの行動は予測していたものだったが、ほんの僅かに対応が遅れていた。しかしまだ直撃を避けるだけの余裕はある。鉤爪を弾かれ体勢を立て直そうとしていたガーゴイルを蹴り返し、ゼーンはその場から退いた。

2秒後。鞭のようにしなったワイバーンの尾が、鞭とは比べ物にならない驚異的な破壊力をもって床を砕く。飛び散る碎片と地響きの中、蹴り返したガーゴイルが身代わりとなって、その反応を消した。

「一丁上がり」

労せずキメラを始末できた事で意気も揚がる。ひとまず、厄介なワイバーンは後回しにし、残ったガーゴイルに照準を定めた。

それを察知したのか、巨体を犬のように震わせながら起き上がるワイバーンを飛び越え、ガーゴイルが飛来した。着地と同時に左右のうねる腕が容赦無い一撃一撃を繰り出す。さすがに小手先だけでは苦しくなり、ゼーンは右手の長剣を“分離”させ、握りしめた。

分離させる事によってより機動的な対応を可能にする反面、分離時はNBMの機能低下、又は消耗著しい状態になる。その為、長期戦を見据えた状況ならば控える手段ではあったが。

(間違いなくOBIS特有の感覚だ。だけど、強い。より戦い方に意志がある)

キメラの様子を見ながら、意識を研ぎ澄ませていく。その“先”に潜む意志を探るように。

と。一向に衰えないガーゴイルの猛攻が一瞬止まった。間髪いれず、ガーゴイルが真上に飛ぶ。

「っ!？」

陽動とも思える行動の後、入れ違いにワイバーンが近接。

噛み殺さんと大口を開け、咆哮ほうこうを放つ。単純に考えても、ワイバーンの攻撃は全て、喰らって無事でいられるようなものではない。直撃は即、死を意味する。直ぐさま回避行動に移り、ワイバーンの歯し牙から逃れた。接近戦で巨体の拳動を隈なく見張る事は難しく、更に集中力を高めなければならない。

(来るか!?)

ゼーンは躊躇ためらわず後ろへ跳んだ。身をよじり、ワイバーンの尾が再び唸りをあげる。ロビーのカウンターを根こそぎ破壊しても勢いは変わらず、目の前を尾がかすめていく。

一方、姿を消したガーゴイルの反応は右手にある柱を迂回うかいし、後方へと回り込んでいた。

(挟み撃ちかよ)

尾の遠心力を上手く使い、ワイバーンはすでに反転している為、振り返ってガーゴイルを迎え撃つ暇はない。着地と同時にゼーンは後ろ向きに宙返りし、空中で逆さの状態のままガーゴイルを目視した。

体勢で不利な以上、避ける選択肢は存在しない。直後、剣と鉤爪の衝突が一度。更に擦れ違いざま剣を薙ぎ払い、それはガーゴイルの片翼を斬り落とした。空中でのコントロールを失ったガーゴイルが錐揉きりもみしながら墜ちていく。

ゼーンは体より先に視線を戻し、着地前にワイバーンとの距離を測った。翼を広げ、追撃を開始するワイバーン。その瞳は無慈悲に見返してくる。そして、まるで仲間を傷付けられた事への怒りを表すように放った咆哮は鼓膜を揺るがした。

ワイバーンを倒す方法は少ない。唯一あるとされる弱点は口だが、屈強な五体に加え、硬い鱗と皮膚は剣の侵入を阻む。シュナーベルのビーム刃ならば皮膚を貫けるが、鱗は簡単ではなく、どのみち致命傷を与えられる部位に接近しなければならぬデメリットは変わらない。やはり手っ取り早い方法はレールガンに行き着く。しかし、

この場所では使用に制限があるが――

(要は使い方ってね)

多少のダメージは覚悟して、ゼーンはワイバーンを限界まで引き付けた。並の人間ならば一口で飲み込める程に大きい口ヘレールガンを突き出す。鼻がひん曲がる程の吐息に吐き気を催しながらも、引き金を引いた。

「あばよ」

鋭い稼働音と共に、アルミ製金属弾が磁力誘導によって超高速で射ち出され、ワイバーンの体内を喰らう。衝撃を受け止め“くの字”に曲がった巨体が、軽々と吹き飛んでいく。

身を護る為の頑丈な鱗は、外部からだけでなく内部からも同じようにその機能を発揮する。背骨をへし折り、背鰭やその周辺を破裂させただけで、ステーションへの損害は無かった。

「さて、残るは」

視線を移す。片方の翼を失ったガーゴイルは、絶命したワイバーンの下敷きとなり、自由な上半身だけでもがいていた。最低限の警戒はしつつ、ガーゴイルに近付き、見下ろす。それに気付き、もがく事をやめたガーゴイルは眼光鋭く、唸る。

「キメラに感情か。頼むから、俺を怨んでくれるなよ？」

無抵抗のキメラを殺す事に躊躇いが無いはずがない。しかし、不安材料の多いOBISオヴィスという危険な存在を放置するわけにもいかず、ゼーンは込み上げる空しさの中、右手の長剣を逆さに持ち替えガーゴイルの頭部に突き刺した。

反応が消えたのを確認し、力無く倒れ伏したガーゴイルの頭部から剣を引き抜き、それを右手に戻す。

ひとまず。次にするべき行動を孝量しながらキメラの反応を捜している――

『ゼーンお疲れえ』

まだ幼さの残る声がインカムデバイスから聞こえた。ワイバーンの咆哮で耳が不調をきたしていなければ、その相手は警備隊の跳ね

っ返り、ミリアで間違いない。

「あ？ ミリアか？」

警備隊最年少ながらも、数少ないMTS適合者の1人だったが、どうにも頼りなさそうなのは最年少故に致し方ないところか。

『反応が一気に消えたと思ったらやっぱりゼーンだったんだ。さすがやるねえ』

「感心してる暇があるなら、お前も頑張れよ」

『だって、何か今日のキメラ強いんだもん。私まだMTSも上手に使えないしさ』

自分のもどかしさに呻くように呟くミリアが、今日ばかりは可哀相でならない。

「ああ、お前はOBIS知らないか」

『何か言った？ よく聞こえないんだけど……ま、いいや。そっちにワイバーンが3体行つたみたいだから、ゼーンお願いね』

「簡単に言ってくれるよなまつたく」

言いながら、ゼーンはミリアの言うワイバーンの反応を確かめた。
「こっちに3体って、1体しかー」

ふと抱えた一抹の不安^{いちまつ}。ゼーンは恐る恐る、だが迅速に干渉域を広げた。大抵^{たいてい}、悪い予感というのは憎たらしい中する。第六感というものが危機を感じかせる為にあるというならば、それは領けなくはないが、嬉しい気はしない。そして、予感は当たる。

「くそっ、やっぱり！ 反応が2つエレベーターシャフト内部を下層へ移動してやがる」

自信が瞬く間に崩れ、湿っぽい怒りが舌打ちとなって出る。焦る気持ちを抑えられずゼーンは踵を返した。

と、まるでその行動を見ていたかのように、最初の1歩を抑止する通信が入る。

シレーヌだった。

『ちよっとゼーン、たった今エリア外を移動するワイバーンの反応を確認したわよ！？』

音割れしそうなシレーヌの声が頭の中で反響する。思わずインカムデバイスを耳から遠ざけ、

「わ、分かってますよ。だから今から――」

『馬鹿ね、もう無理よ。どうやっても追いつける距離と速度じゃないわ。……まだ負傷したハイブリッドの処置も終わってないし。こうなったらエリファになんとか』

「だけどエリファは」

『あの子だってハイブリッドよ。こんな状況だもの、何とか踏ん張ってもらわないと。ゼーンはゼーンで、できる事を全うしてちょうだい』

「……了解」

返答短く、ゼーンは通信を切った。不甲斐ない自分を思えば、反論する余地などなかった。

「ミリア。こっちのワイバーンをさっさと片付けたらすぐに行くから、それまではシュウと持ちこたえてくれよ」

『う、うん。分かった。ゼーンも気をつけてね』

「お前もな」

言いながら、ゼーンは体を反転させた。ワイバーンの反応が近い。ゲートとゲートを仕切るガラス製の自動扉。その扉が開くのも待たず――待つわけもなく、ワイバーンは扉や中仕切りの壁を吹き飛ばして、第4ゲートへ突っ込んできた。

『NB MスタビライズLV3にシフト』

痛む胸の感情は重苦しいが、体だけは緑風のように軽くなる。

（一気に片を付ける！）

悔しさに奥歯を噛み締めながら、躍動する全身の細胞に任せてゼーンは更に速度を上げた。

意思惟

「……参ったわね」

ゼーンには反射的に答えたものの、いざ冷静になったシレーヌは頭を抱えた。いや、ここは開き直って冷酷になるくらいはしようがないのかもしれないが。

「ワイバーンはシャフト内部の13、14隔壁も突破！」

本部員の非情な声が響き渡る。シレーヌはさすがのような思いでエームズに問い掛けた。

「ハイブリッドの処置は？」

「まだ6、7割だ。闘えない事もないが、相手が相手だからな」

「ワイバーン2体。エリファの能力なら問題ないはずだけど」

「気休めというわけじゃないが、恐らく本命は1体だろう」

モニターに映る、シャフト内部のワイバーンの反応を示す光点。

上下2つのうち、上の反応のみを指差してエームズは言った。

「何故です？」

オウイス

「OBISとは元々、ギリシャ語で『砲弾』という意味だ。奴らはカメラを凌ぐ戦闘能力を有し、その命が尽きるまでただ闘い続ける。

アウガル

オウイス

反連合政府同盟は大戦中、OBISの体内に爆弾を埋め込み、戦場で爆発までさせた逸話もある」

「……酷い」

「先行するワイバーンはここまでの進路を確保する為だけの存在だと私は思うが」

確かに、それを裏付けるように、先行するワイバーンの生体反応が弱まっている。いくら強固な鱗に覆われていても、数十の頑丈な隔壁を突破すれば無事では済むまい。

「私の推測はどうあれ、OBISが活動を始めたという事は、奴らがアニメを使い熟して……いや、その逆も有り得るか。とにかく我々に猶予はない」

「……はい」

それは、素直に認めるしかなかった。もう彼女に、エリファに頼るしか方法はない。しかしそうは分かっている、気迷いが行動に出てしまっていたらしい。手を伸ばし、掴もうとしたインカムはあっさりとエームズに奪い取られる。

「グラウには、私が話そう」

掴み損ねた手をそつと握り締め、シレーヌは小さく頷いた。

「各エリアのシェルターから報告がありまして、無事避難を終了したそうです」

「そうか、分かった」

「総裁もそろそろ」

「……ん」

どこか事務的なガヴリアとハイブリッドの会話を、グラウは半ば上の空で聞いていた。左手首の時計を見ては視線を戻し、再び時間を確かめてからエリファを見る。さっきからその繰り返しだった。

（俺が焦ってもしょうがないだろが）

分かっている。

人知れず溜め息を漏らし、エリファの陰鬱な横顔を見つめる。

ゼーンが宇宙ステーションへ向かってからすでに30分が経過しているが、エリファは微動だにしない。閉じかけた瞼の間に僅かに見える双眸は、いったいどこを見据えているのかすら定かではない。まるで眠っているように安らかで、死んでいるのかと思えるほど虚ろに見える。

「グラウ？」

ガヴリアの呼び掛けに、グラウは行き詰まった視線をようやく流した。

「何だ？」

「このままエリファを見守るか？」

「見守る、か」

それが今すべき事なのだろうか。できる事なのだろうか。正しい選択肢なのだろうか。

「いや、私が見守りたいのはエリファだけではないな。……情けないがお前に期待しているのかもしれない。あの日と同じように、再びエリファを救う事を」

淀みないガヴリアの言葉は、あまりに無責任で、そして美化し過ぎて聞こえた。

「エリファを救った？ ……あれは、違う。あの時、エリファに触れたあの時。エリファの心はそこには無かった。虚構の心を抱き締めても、それは救ったとはいえない」

抱き締めるように寄せた両腕の間からは、不鮮明な感触が虚しく虚空へと散っていく。目に見えない感情を掴もうとするかの如く。そして不確かな心地は、不安と期待をうやむやにする。

――2年前のあの日もそうだったように。

「エリファの心は、今そこにあるんだろうか？」

「彼女は望まれている。それは揺るぎない現実だ。ならば見えているはずだ。……彼女自身の希望というものが」

「そう、なのか？」

――グラウ“は” ……違うよ。

（エリファはそう言った。エリファの心のどこかでは、まだ人間に絶望しているんだろうか。もし、そうだとしたら）

胸が冷たく締め付けられ、鳥肌が立つ。思考は高揚しても、それが感情に繋がらない。

（俺は知るのが怖い）

独り言のように出た言葉は、恐らくガヴリアには聞こえなかっただろう。その声よりも、同時に鳴り響いたインカムの呼び出し音の方が大きかった。

「シレーヌか？」

『シレーヌじゃなくてすまないな』

「エームズ？」

『立て続けにすまないが、悪い報告だ』

「んゝ今日は悪運の当選確率が高い事」

『私には皮肉を言う余裕はないよ。ワイバーンが2体、こっちに向かってる。おまけにあのOBISだ』

「っ!？」

その一瞬でできたのは、更に悪くなっていく状況を認識する事と、エリファに視線を向ける事だった。

一拍。

落ち着かせる為に一息を吐いてから、グラウは問い掛けた。

「後どのくらいで？」

『10分無いと思ってくれ。エリファにもそれを伝えてほしいんだが、大丈夫そうか？』

鼓動が警笛けいてきのようにどよめく。気詰まりな雰囲気の不気味に広がっていくのがはっきりと分かった。

空気が、重い。

「なんとも言えない」

『グラウ、それでは困るんだ』

エームズの抗言も、もっともである。どうすればいいのかを熟考する前に、体は自然とエリファに向かっていった。

近づく生体反応。

それはワイバーンのものだろうと感知できた。だが何かが違う。キメラから悪意や殺気のようなものを感じる事など今までなかった。まるでそれはアニマの意志そのもののようにも錯覚できた。

(この感覚……まさか、OBISなの？)

だからなのだろうか。

体は無意識に拘束されて、震える。そして意識は更に深遠へと滲んでいく。エリファは不愉快に背筋を這いずり回る悪寒に齒噛みした。

たとえば足掻いたとしても変わらないもの。それは過去。絶対的に過ぎた時間で狂ってしまった心の奥にある全ての断片を手繰り寄せ、それを丁寧^{ていねい}に紡いでいく。

仄めく答え。

だが、所々が抜け落ちた未完成のパズルのように、まだ何か足りない。何かが……

「大丈夫か？」

不意の言葉。いつの間にかグラウが目の前に立っていた。咄嗟^{とつさ}に取り繕うようにして口元を緩めていた事を滑稽^{こっけい}に思いながらも、エリファは頷いて見せた。

「……うん、大丈夫。知ってるよ。キメラの反応が近い」

重い。何もかもが。

動かす唇も。発する声も。呼吸も。瞼も。踏み出そうとする足も。当然の事だが、ここにも避難命令が出たらしい。エンジニア達も、作業半ばに避難を始めている。負傷したハイブリッドの処置もまだ万全ではなく、たとえ万全だとしてもOBI Sらしきワイバーンが相手では彼等に勝ち目は無いに等しい。

「……恐いか？」

「分からない」

首を振る。差し出されたグラウの手を避けるようにエリファはおもむろに歩き出した。グラウの手はそれ以上伸びてはこなかった。そのまま戸惑いと不安を振り切る心地で足を踏み出す。

と、その時。

天井からくぐもった爆発音が聞こえた。やがて天井全体に広がり、激しく振れ動く。

「来た。みんな早く逃げて！」

更に続く轟音。それはゆっくりと地響きへ変化していく。ワイバ

ーンはこの真上にいる。天井が崩れ落ちるかもしれない。
すかさず辺りを見回した。ハイブリッドやエンジニア達はまだ避難し終えていない。

「何してるの？ グラウも早く逃げて」

今できる精一杯の険悪な気配を言葉に含めたつもりだったが、グラウに気後れした雰囲気はなかった。それどころか、微笑を浮かべて言ってくる。

「今のお前を1人にできるわけないだろ？」

グラウの何気ない気遣いが胸の奥底にある傷口に染み入る。だが、それは同時に今すべき決意を揺るがす起因にも思えた。

それは自らの甘さか？

単なる動揺か？

逃避なのか？

それとも――私が卑^{いや}しいだけ？

「情けない」

そう呟き、エリファは俯^{うつむ}くようにグラウから顔を背けた。

結局、巡り巡った思考はただ曖^{あいまい}昧になっていく。そうなる事は分かっていたはずだった。

「エリファ。お前は何を願う？」

「私の、願い？」

「願望は生きる意思――意志――になる。願いは叶うものじゃなくて、叶えるものなんだよ。お前ならそれができる」

吸い寄せられるように、顔がグラウへと向く。彼は再び笑みをこぼしていた。

過去に答えがあるという確証はどこにもない。しかし、グラウの残した数々の言葉が鮮明に蘇ってくる。優しさに満ちた温かな思い。アニマとは似ても似付かない。

（……私は）

一つ確かな願望がある。それは今、誰も傷付かない事。
耳鳴りに似た振動が増し、エレベーター付近の天井の一部が絹を

裂くような爆音を響かせて瞬く間に崩壊した。それと同時に、口にハイブリッド――すでに生命反応は無い――をくわえたワイバーンが姿を現した。

「っ！」

エリファはグラウに叫ぼうとしたが、それは声にはならず消え失せた。

シャフト内部の隔壁を突破して来たワイバーンは、瀕死ひんしとしか思えない傷を負っているにもかかわらず立っている。生命の生きようとする本能ではない異質の輝きを宿す瞳に、エリファは言い知れぬ恐怖を感じた。思い起こされるのは、悪意の表象ひょうしょうが渦巻く青藍せいらんの瞳ふと見えたのは、間違はなくアニマだった。禍まが禍まがしくもあるその視線に、為す術無く竦すくみ上がる。

動けない。以前感じた寒気ではない震えだけが体の芯に付き纏う。それを見透かしたのか、ワイバーンはくわえていたハイブリッドを戯たわむれていた遊具のように放り投げた。

（来る！）

ハイブリッドとしての本能が疼うずいた。ワイバーンの最初の挙動は何か、攻撃の手段は何か、どう対処すべきか。戦闘でのあらゆる可能性が瞬時に考察される。しかし、やはり体は動いてくれない。

グラウが目の前にいるというのに。

「グラウ、逃げて！」

「言ったら、1人にはできないって」

どんなに格好が付く言い回しができたとしても、生身の人間であるグラウにどうにかできる相手ではない。ハイブリッドでなければキメラは倒せない。自分に言い聞かせるまでもなくそんな事は分かっていた。ならば、今何をすべきかひとりでに具現するはずである（そう。私には闘わなきゃならない理由があるのに）

刹那――

グラウの肩越しにワイバーンが動くのが見えた。中程から千切れ役目を果たさなくなった翼を律動させ、飛び掛かって来る。

エリファは伸ばした手でグラウの肩をなんとか掴み、そのまま倒れるように引き寄せた。間一髪のところワイバーンの巨体が掠めていく。

直ぐにグラウを庇いながら素早く起き上がる。それくらいなら何とかなった。視線を移すと、ワイバーンは身を翻し次の挙動体勢に入っていた。その射るような眼差しに、死の予感が過る。このままでは殺される。必死で恐怖に勝る何かを探す、今の状況ではそれも覚束ない。

床を蹴る鈍い音と共に、殺気が迫った。体に動けと念じる。

と、どうにか体が微動した。グラウよりも無力だと痛感できる程に歯痒く。

今度のワイバーンの攻撃は避けられそうにもなかった。しかし、そんな状態でも現実を見続ける事を諦めないのは不思議でしかない。見える。弱っていても力強いワイバーンの足の動きが。脈動する筋肉が。荒い息遣いが。そして、浮き上がる自分の体も。

「えっ？」

気付くと、グラウに抱き抱えられていた。

まさかこのまま逃げ切るつもりなのだろうか。

だとすれば、あまりに考えが浅はか過ぎる。

案の定、ワイバーンのスピードとリーチの前では無駄なあがきだった。グラウが数歩下がったところで、ワイバーンの尾が大理石の床を叩いた。その衝撃は触れているグラウからも伝わってくる。圧倒的な破壊力は弱々しい見た目からは信じがたいが、直前で碎け散った大理石は違う脅威となって襲い掛かってきた。風圧も加わり、2人分の体重が軽々と吹き飛ぶ。

「うぐっ！」

大小いくつもの破片が飛散するなか、そのうちの1つがグラウの頭部へ直撃した。血飛沫が飛び、視界が赤く滲む。呻き倒れるグラウの腕から落ちたエリファは、自分の受け身は構わず、尻餅をつきながら逆にグラウを抱き留めた。

「グラウ！」

「……う……う」

「何でこんな無茶を！」

「いったいグラウが何故そこまでするのか。いったい何がグラウにそこまでさせるのか。」

「答えを教えてください。」

「導いてほしい。」

意識が薄れているのか、力の抜けたグラウを、エリファは脆いガラス細工を扱うように抱き寄せた。

「生きるとは、意志を示す事だ。躊躇うな、お前の意志を」

「……」

「それとも、信じられない者の為に闘うのは、馬鹿馬鹿しいか？」
蚊の鳴くようなグラウの悲痛な問い掛けが、心に突き刺さる。エリファは躊躇わず、首を振った。

「違う。違うよ、グラウ。私は、信じ“たい” んだと思う」

その時、心のどこかで何かが弾けた。強く引き付けるように。曖昧だった思考が、その何かを見出そうとする。足りない何かを。意味ある意志を。

「そうか……よかった」

流れ落ちる涙と、静かな囁き。そして訪れる沈黙。エリファは、気を失ったグラウを横たわらせた。

「ごめん。私、グラウみたいに意志は強くないから。……でも」

気付くと、自分の頬も涙で濡れていた。それはかつて苦しみで流したものと違う、温かい雫。心の奥底から湧き出た感情。赤く滲んでいた視界が洗われていく。

エリファは涙を拭い、ワイバーンを睨んだ。

少なからず怪我の影響はあるらしい。攻撃でバランスを失っていたらしいワイバーンが体勢を立て直しながら、唸る。しかし、その唸り声は突然別の音に消された。崩壊した天井の奥に広がる闇から轟く、より力強い咆哮によって。

目の前のワイバーンは驚いたように首をよじり、今度はその天井へと唸り声を上げた。それは恐怖しているようにも見える。

刹那。重苦しい羽音を引き連れたもう1体のワイバーンは、闇から舞い降りるや否や、傷付いた仲間へ容赦なく襲い掛かった。

同種族とはいえ、傷付いたワイバーンの抵抗など無意味に等しい。恐らく本命であろう無傷のワイバーンに首筋を噛まれ、勝敗は決した。乾いた小枝のようにあっさりと首の骨が折れる。唸り声は断末魔となって掠れていった。

しかし、それはワイバーンにとって――アニマにとっても――単なる座興でしかなく、ましてひ弱な相手を仕留めただけで満たされる事は無いだろう。新たな獲物を追い詰める工程を興ずるように、ワイバーンは悠然と近づいて来る。嘗められているのか、あるいは試されているのか。そのどちらにせよ、湧き上がる苛立ちだけは、はつきりとあった。

（そうやって、全てを見下して！）

心中でアニマに毒づく。

苛立ちは怒りとなって、能動感に拍車を掛けた。左手が自然と動く。直線上にいるワイバーンへ向けて。

『DTインストール。IDコンタクト』
デユナミストランス インターフェイスドライフ

思惟の先には、顕現される現実がある。だが、OBISから伝わるアニマの意識が集中力を奪っていく。それでも、後は念じ、望み、願わなければいけない。それは意志となって力となる。今は、その力が必要だ。

ただ一言。エリファは振り払うように言い放った。

「邪魔よ！」

言葉がほとばしり、情動が放たれる。疎ましいアニマの気配は去り、同時に、轟々（ごうごう）たる唸り声を上げてワイバーンがゆっくりと倒れ伏した。敏感になっている感覚器官が、ワイバーンの死を知覚させる。背筋には不気味な圧覚が纏わり付いたが、気にしてはいられない。

直ぐさまエリファはグラウの怪我を確かめた。

「グラウ！」

この数分の間にその名を口したのは何度目だろうか。そんな事が脳裏に過る。^{よぎ}

と。本部へ避難しかけていたガヴリアが慌てて駆け付け、グラウの傍らへとしゃがみ込んだ。

「グラウ!？」

初めて見る、総裁の狼狽^{うろた}える姿。しかし、それも当然といえば当然だろう。ワイバーンの攻撃に巻き込まれたうえ、頭部からは出血し意識が無い姿を見れば、死を予感させても不思議はない。

「大丈夫、生きてますよ。今は気を失っているだけです」

「そ、そうか。ならよかった。エームズ、救護班を頼む！」

どうやらエームズも近くにきていたらしい。だが、その姿を確かめるよりも、エリファはグラウの頭部へ意識を注いだ。

（出血が止まらない?）

流れ出す血が一向に衰えない。傷は決して浅くはないだろうが、致命傷でもないはずだ。とはいえ、このまま出血が続けば同じ事だ。治療が始まるにはまだいくらか時間が掛かるだろう。それまで待つべきではない。エリファは意を決してまだ違和感の残る左手をグラウの頭部に添えた。

「エリファ、何を？」

ガヴリアの問い掛けは聞き流し、エリファは意識を研ぎ澄ませた。まだ触れた傷口も、溢れる血も温かい。

（今度は私が助ける）

思いは、願いはただ1つだけ。

――力は意志となる。

焼けるような感覚の手の平が激しく脈打つ。^{ナノバイオマテリアル}NBMが意志に連動を始め、手の定形が徐々に曖昧になっていく。

（行ける。NBMは私の思いを顕現してくれる）

手の平の細胞素子が、グラウの傷口へと流動していく。それは傷

の最奥まで達し、失われた細胞を補う。

「出血が、止まった？」

ガヴリアが状況を代弁してくれる。完璧な治療ではないかもしれないが、ひとまず大事には至らないだろう。ほっと、胸を撫で下ろす。

グラウの頭部に添えた手をそっと頬まで撫でながら、エリファは名残惜しい思いを抱き、立ち上がった。

「後はお願ひします。……私、行きます」

まだうつすらと濡れていた頬を右手で拭い、エリファは呟くように言った。

「そうか」

ガヴリアは不意に悲しげな表情を見せた。自嘲じちようのようにも見えたが、俯うついてしまったために、確かめる事はできない。

「もう、目を背けてもいられない。自分自身でけりをつけてきます。今ならそれができるかもしれないから」

自ずと口調が強くなる。それは物憂い気分を払拭ふっしょくするには十分なものに思えた。ただ、絶対的な自信とまではいかないが。

言い終わると同時に、ガヴリアが顔を上げた。その表情はさっきの悲しげな表情とは打って変わって穏やかだった。更に顔を綻ほころばせて言ってくる。

「それが自身で選んだ道ならば……。容易ならざる現実が待っているかもしれないが、自分の意志を忘れてはならない。アニマに惑わされるな」

できればその言葉はグラウの口から聞きたかったが、今それを望むことはできるはずもない。

(……叶わない願いもある)

故に、それは単なる自己満足のようなものだと自覚しつつも、エリファは自責の思いに唇を噛んだまま、グラウに向かって頷いた。「グラウの為にも……もうこれ以上辛い思いをさせたくはないから」

言いながら、踵かかとを返す。

と、ガヴリアは突然声を張り上げた。その口調は、隠そうとして隠せなかったという程度に慌てていた。振り向かず、耳を傾ける。

「エリファ！ 自分を責めたりはしないでほしい。言い訳がましく聞こえるかもしれないが、“我々”が先非を悔いればいいのだから」
物悲しい語尾は愁い^{うれ}に沈む。それは、苦し紛れの物言いではないと証明しているのだろう。ふと、グラウの言葉を思い出す。

「グラウもそう思っているんでしょうね。だけど、責めても悔いても、過去は変わらない。……ただ今は、未来を信じてみたいんです」
沸々（ふつふつ）と滾る^{たぎ}気持ちに後押しされ、喉から滲み出た言葉に偽りはなかった。つまりそれは、風の終わりを告げるように、心にふっと過った自問を説き伏せるための強弁でもなかった。例えば風が止まらずとも、その気持ちが揺るぐ事はない。そう思えた。

ただ疑念はあった。

それは自らの意志への懷疑^{かいぎ}。

（私の怒りは正しいの？）

再びの自問。止まない風が、心をざわつかせる。

だが――

（私はアニマとは違う。ここで迷ったら“また”アニマに勝てない！ 自分自身も信じないと）

心中で喚く^{わめ}。

そして、エリファは強引に“風を切るように”駆け出した。

2体目のワイバーンも手早く倒し、シュウやミリアが残りのOBISと戦闘を続けているセクション4へと向かおうとしたが、激化した戦闘の影響で安全装置が働き、ターミナル内部のエレベーターは全て停止していた。やむを得ず、セクション4へ疾走しながら、ゼーンは下層へと逃がしてしまったワイバーンの反応が消えたのを確認した。

「2つ目の反応も消えた！ ……やっぱり、お前は強いんだよエリ

ファ」

苦悩していた姿を見ている分、感慨深く言葉が漏れる。

そして、ようやく腐りかけていた心が開放されていく。自分の失態であった事に間違いはないが、結果的にはこれでよかったのかもしれない。グラウの言う通り、最悪の事態が起これば自分の力など無いに等しいのだ。故に、キメラを役とする傍観者の心理的な強迫観念が別の苦しみを生み出す以上、心が休まる事は無い。

「それに比べ、胸糞悪い奴。いちいちやる事が意地汚いんだよ」

苦し紛れに毒づき、セクシヨン4へ通じる最後の非常階段を、ゼーンは駆け上がった。

激闘

静かなエレベーター内部は長時間乗っていても不自由無く、快適に過ごせるよう作られている。ちよつとした休憩スペースのようなものだろうか。ソファや鏡、小さな観葉植物、テレビやオーディオ、飲料販売機まで備え付けられている。そんな至れり尽くせりの空間も逆に居心地が悪く、エリファはソファの隅っこに座っていた。

エレベーターに乗り込んでから10分少々経過しただろうか。インカムデバイスに本部からの通信が入った。静けさに慣れていた分、突然入った通信にエリファは竦み上がった。

『ハロー、エリファ。待ってましたよ大本命！ やつと覚悟が決まっていたね』

聞こえてきたのは、陽気なアオイの声だった。

「い、いざそう言われると……困るんだけど。……うん。でも、大丈夫だと思う」

『そう。こっちも大丈夫よ。グラウなら今ちゃんと治療してるから安心して。あの男ちよつと張り切り過ぎたわね』

バイザー状ディスプレイには、アオイのほくそ笑む姿が映る。

『もちろん、エリファを信じているからこそその行動だろうけど』

「そう、なのかな？」

『そうよ。……あれ、エリファは違うの？』

「そんな事ないよ。信じたから、ここにいるんだもの」

『まあいいお話ね。羨ましいくらいだわ。あんた達の関係って理想よね。そうやって信じ合う事ができれば、人間、争いなんてしないわよ』

「……それが、グラウの願い」

『そうなんですよ』

世界を変えるのは、信じ合う事なのだろうか。しかし、現実ほ程

遠い。求められる力を持つ故の定めが、重くのしかかる。

「アオイは、信じてる？」

『え、私？ それを私に聞くだけ野暮ってもんよ。基本的に男は信用してないからね。エリファも一応覚えておきなさい。お姉さんからの忠告よ。昨日のも最悪だったわ。あまりにムカついたからやけ酒したのよ』

「……。ああ、アオイがよくやってる、犬も食わないお見合いの事？」

『どんな解釈よ！ 合コンよ合コン！ まったくもう、グラウの入れ知恵ね？ ……まあ、それはそれとして。信用したのに裏切られたら、私に言いなさい。力になってあげるから。あ、なんだったら、私の武勇伝でも聞く？』

「えっと……やめとこう、かな？」

『あらそう。残念』

滔々（とうとう）と続いていたアオイの言葉がようやく途切れる。再び矢継ぎ早に始まらない事を願いつつ、

「アオイって、いつも元気だよね」

『エリファが悩み過ぎなだけよ。私には『明日はきつと明るい日』って座右の銘があるからね』

「明日はきつと、明るい日？」

『そうそう。明日は明るい日。そういえば、それは誰にも平等に訪れるんじゃないかってね。もちろん、エリファにとっても』

まるで耳元に吹き掛けられた吐息のように、アオイの語り口は優しかった。

『後悔はせずに、明るい明日にひたすら向かってみることもたまには必要よ？』

「……うん」

『まあ、これも信じる信じないは自由だけだね。……あつと、いけない。上の状況を説明しないと』

「あ、うん。お願い」

直ぐさま、バイザー状ディスプレイにはステーション内部の状況が表示されていく。戦闘データ、カメラの数と種類、施設の状態、被害のレベル、ネウロンからの干渉数値など。それらを1つ1つ、確認していく。

『じゃ、まずゼーンや警備隊だけどー』

明日は、明るい日。

エリファは様々な思いを胸に、その言葉を反芻^{はんすう}した。

信じる者は救われる。もちろん、そんな空虚^{くうきょ}の言葉に縊^{すが}ろうと思っただけではない。

そうではなく。

（明日に向かおうとする、意志）

独りごちて、左手をひしと握り締めた。風が、追い風になっていく。

たどり着いたセクション4の中央フロア。予想以上の状況に、ゼーンは思わず眉をひそめた。戦闘により至る所が破壊され、照明は非常灯だけが何とか点灯していて薄暗い。残り3体となっていたO^オUIS^{ヴィス}の反応は2体になっていたが、その代償は小さくない。

「これじゃ、レールガンの制限意味無いんじゃないか？」

そんなツツコミも、場の空気を和ませる役には立たない。OBI^{オビ}Sの反応が減る毎に、凝縮し濃密になっていくその気配はより明確になり、この一帯の雰囲気^{ぎふき}を重苦しくさせている。

そして、それに比例しているかのように、戦闘は激化していた。ゲート側から響き渡る戦闘の轟音はワイバーンの咆哮と共鳴し、やまびこのように中央フロアを駆け抜けていく。

（来るか）

耳を塞ぎたくなるような轟音と咆哮の源が近づくにつれ、ようやくその姿が確認できるようになった。その距離、約200メートル。戦っているのはミリアだった。彼女は足りないリーチと非力さを

補う為に、身の丈よりも長い槍状の武器を使う。それは別の欠点となる可能性すらあるが、小柄な体はまるで槍を中心に舞っているように、むしろ動きは機敏だ。

だが、さすがに相手がOBI Sではその動きにも鈍さが目立つ。まだ戸惑いがあるのかもしれないが――いや、違う。明らかにワイバーンの動きが変わってきている。

（ワイバーンのスピードが上がってるんだ！）

確信するが早いか、ゼーンは渦中へと飛び込んだ。

スピードトランス
『STインストール。NBM――超微人工細胞素子――スタビライズLV4にシフト』

軽くなった体が、ワイバーンに吸い寄せられるように動く。拙攻を続けているミリアに、ゼーンは叫んだ。

「ミリア、下がれ！」

「ゼーン！？」

OBI Sを超えているであろう速度で、ミリアとの間へと割り込む。そのまま身を屈め、一気にワイバーンの懐へと潜り込んだ。

パワートランス
『PTインストール。NBMスタビライズLV3にシフト』

速度に力を上乘せし、ゼーンはワイバーンの真下から黄土色の腹部へ右の拳を振り上げた。鱗程ではないものの、柔らかくはない皮膚が僅かに歪む。ゼーンは浮き上がった巨体にレールガンに向けた。

「このおっ！」

引き金を“長く”引く。

モードが切り替わり、セミオートで3発のアルミ製金属弾が連続発射された。至近距離の為、発射と着弾はほぼ同時だった。その威力は更にワイバーンの巨体を浮上させたが、ようやく腹部に小さな穴を開けたに過ぎない。だが弾は確実に体内へと達していて、内臓へのダメージは尋常ではないだろう。ワイバーンから呻き声が上がる。

サンダートランス
『TTインストール。NBM／組織変成制限（TML）解除』

時間が経てば回復するような傷ではないだろうが、戦闘が長引けばそれだけ反撃の隙を与えるだけだ。ゼーンはワイバーンの動きに

警戒しながら、畳み掛けた。

ワイバーンを追って跳躍^{ちようやく}し、定形を変えながら稲妻を帯びる右手をレールガンによってできた傷口目掛けて突き上げる。突き刺さった長剣から放たれる電撃が体内を焦がしていく。そして、苦痛に暴れ狂うワイバーンの呻き声が金切り声に変わった。

「くっ、くおのお！」

しぶとくもがくワイバーン。しかしその生命反応はすでに消えかかっている。巨体に押し潰される前に、ゼーンは床にワイバーンを叩き付けた。それでも、仰向けの状態からまだ起き上がろうとする力は残っているらしい。不気味な程の生命力に身震いが襲う。

「いいから眠ってろ！」

仰向けのワイバーンの上に着地すると同時に、再び右手を腹部へと突き刺す。一瞬の閃光。その後、燻^{くすぶ}る臭いが漂うなか、ようやくワイバーンは絶命した。

「……はあ、はあ」

剣を引き抜いてから定形を戻し、ゼーンは黒い煙の立ち込めるワイバーンから飛び降りた。と、

「あ、あれ？」

着地に耐え切れず、足が力無く折れる。どうやら戦闘時間や内容から把握できるもの以上に疲労があるらしい。ちょうど正座のような恰好のまま、ミリアを迎える事となった。

「だ、大丈夫？」

「まあな」

差し出されたミリアの手を掴み、ゼーンは立ち上がった。

「このキメラ、いったい何なの？ 普通じゃないよ」

「だからあ、OBISだって言っただろ？」

酸素が不足しているせいか、声を上げるだけでも目眩^{めまい}がする。人間の運動量の30倍にも耐え得るよう機能するはずの体でも、その運動量が尋常でなければつまるどころ結果は同じなのだ。そして原因はそれだけではないだろう。残り1体となったOBISの不条理

な反応が気分を滅入らせる。

「言ったつけ、そんな事」

「言ったよ」

目頭を押さえ、呼吸を整えながらゼーンは言った。だが、落ち着けない。同じセクシオンでのOBISとシュウの戦いは、予想通り激化している。恐らく、警備隊隊長のシュウであっても、もう余裕は無いだろう。

「さて、シュウの援護に行くか」

「話をはぐらかすなあ！ 教えてよ、その『おびす』とかつてのを」
お菓子をねだる子供のようにじだんだを踏むミリア。溜め息も程々にゼーンは渋々頷いた。しかし、のんびり説明する時間などない。手招きしながら、シュウの反応を追うようにゼーンは駆け出した。

「O、B、I、Sで、オヴィス。あれは……」

有機増幅干涉同調体——略称OBIS^{オヴィス}。より高精度の制御と戦闘

を可能とする為に強化されたカメラがそれである。第三次世界大戦末期、反連合政府同盟がハイブリッドの干涉インターフェースを応用しハイブリッドとの決戦に投入した。だが、期待とは裏腹にその戦果は芳しくなかった。記憶を辿り、アニメは語り始めた。

「その事由は明確だ。コントロールする者が無能ならば、役^{えき}される物も陳腐^{ちんぷ}な道化でしかない。……無論、そんな人間が人間を御する事など叶うはずもないのだ。今更、有象無象^{うざうむざう}に説き伏せたところでどうという事もあるまいがな」

支配の恍惚感^{こうこつ}に浸っていたアニメは、淡々と語りながら、口元の笑みを更に大きくした。

「エリファ、今一度よく考える事だ。真に忌むべき、憎むべき存在を。……大戦では多くのハイブリッドが死んでいった。さて、それは必要悪だとも言うか？ いや違う。あれは人間の単なる怠慢に過ぎない。そうは思わないか？」

かぶりを振り、アニマは返ってくるはずのない答えを待たず、嘆息して続けた。

「エリファ、まさかお前は……いや、そうでなければ来るはずはないか。面白い。ならば思い出させてやろう。私やお前が何の為に存在するのかをな」

皮肉に顔を歪めて、アニマはあまね遍く意志を1つに紡いだ。
意志は、力となる。

戦闘によって濁にごった空気。

もしかしたら換気機能が停止しているのかもしれない。

ただ、戦う為に生み出され、戦う事を理由に生きるハイブリッドにとってそれはごく当たり前の環境でしかない。特に失望する事もないだろう。だが、記憶の中には忘れようのない絶望とも思える戦いが1つだけあった。自分自身を失ってしまいそうな程の苦痛だけはある思い出さないように、ゼーンは併走するミリアに言葉を選んでいった。

「あれは……終戦の数日前。終戦の糸口が見えない事に業を煮やしたト・コイノン国際連環機関は、統合制御戦闘体系（UCFS）の敢行かんこうを決めた。それまでは、アニマの干渉インターフェースによってハイブリッドはその能力を発揮していたけど、UCFSはより強力なものだったからな。そして、その“核”として選ばれたのがエリファさ。で、それを知ったアウガルが対抗策として戦線に投入したのがOBISってわけ。ようはカメラ版統合制御だな。システムとしてはハイブリッドのそれに近いけど、まだ完成にまでは至っていなかったらしい。だからOBISの制御は不十分なものだった。何より、耐えられなかったんだよ。制御する人間がさ」

「へえ……でも、それはこっちも同じだったんでしょ？」

「ああ。UCFSはまだ試験運用の段階だったらしい。だけどお偉方が決めちゃったから仕方ないんだろ。なかなかシンクロしないア

ニマとエリファの干渉波長を強引に合わせ、それは実行された。だ
けど……」

「ナイトメア——空白の30秒——だね？」

「ああ。アニマを通して、エリファは人の悪意に触れたんだ。もち
ろん戦場は混乱して目茶苦茶だったけど、それでも俺達は戦うしか
なかった」

一瞬、その時の感覚を思い出しそうになり、ゼーンは慌ててかぶ
りを振った。今は目の前の戦いに集中しなければいけない。

シュウと最後のOBI Sが戦っているのは13ゲート付近だった。
破壊、衝撃、爆発と、その規模と頻度は確実に増してきている。ス
テーションへの被害を最小限に抑えようなどと考えてもいられない
だろう。更に、僅かだがシュウの生命反応が小さくなってきている。
NBMの活動限界が近いのかもしれない。

「まずいな。俺がワイバーンを引き付けるから、ミリアはシュウを
助ける！」

「オッケー、任せて」

過去が繰り返されるような状況にだけは絶対にさせてはならない。
疲労感を封印し、ゼーンはワイバーンへ切り込んでいった。

グラウの意識が回復するのが予想以上に早い事に、ガヴリアは驚
いた。それだけ、エリファの処置が適切だったのだろうか。駆け付
けた救護班も、驚きを隠せない様子で処置にあたっていた。

「NBMは元々医療用として開発された細胞素子でしたから、こう
いった活用法も実際にあります。しかし、ハイブリッドが自身のN
BMで人体の修復を行うなんて聞いた事ありません。信じられま
せんね。拒絶反応ありませんし、完璧です」

驚きが彼を饒舌にしたのだろう。上擦った声で医師は語った。

「信じられないのは、我々も同じだ。なあ？」

そう言って、ガヴリアはグラウに笑い掛けた。が、グラウは笑わ

ない。出血のせいか、虚ろな瞳を僅かに動かす。そして傷の痛みではなく、心の痛みに堪えるような表情で言ってきた。

「エリファは、どうしたんだ？」

「エリファは自分の意志で行く事を選んだ。グラウの思いは届いたのかもしれないな」

それでグラウの心に安心感を宿す事ができるかどうかは分からなかった。だが、そんな胸中はおくびにも出さず、ガヴリアはグラウの肩を優しく叩いた。グラウはようやく固くなっていた頬を緩める。

「……そうか」

「エリファはお前を信じると言った。ならば、彼女を信じなければ」
「ああ、もちろんだ」

どこか遠くを見つめ、グラウが感慨深げに呟く。

「しかし無茶をしたものだ。自分の力量をわきまえないと命がいくつあっても足りないぞ」

「……他に、いい方法が思い付かなかった」

「相変わらず不器用な男だ。もっとも、だからこそエリファは答えたのかもしれないが」

「あまり嬉しくない褒め言葉だな」

「素直に受け取ってくれ。……さあ、ベットでもう少し休んでこい」
「すまん」

再び瞳を閉じたグラウを乗せ、担架はゆっくりと進み出した。

シュウのNBMの有効稼働率はすでに10%を割っていた。普通であればカメラと戦う事さえ難しい状態であるにもかかわらず、OBISと戦っていたシュウの実力は改めて認めざるを得ない。彼は直ぐさまミリアと共に撤退し、別動隊へ合流しに向かった。

今、OBISと相對せるのは自分しかない。

しかし、それは何等特別な事ではなく、カメラと戦う為に必要とされているのだから拒む理由も無い。むしろそれこそが己の生きる証

であるとも言えるだろう。だが生まれて初めて、ゼーンは自分の境遇を呪った。それは、カメラがカメラを越えた瞬間。OBISと呼ばれる存在が生み出す未知の領域に、意識が飲み込まれていく恐怖感からだった。

ワイバーンはその翼を目一杯広げれば、ゲートフロアを覆い尽くす程だが、それをものともせず――邪魔な物は破壊しながら――飛び回る。STによって得られる最高速をもってもワイバーンの速度を上回れず、一瞬の油断が命取りになる状況だった。

「ちいっ！」

鎌のように振り下ろされたワイバーンの尾を擦れ擦れで躲しながらゼーンは舌打ちした。縦横無尽に動くワイバーンに隙は見当たらない。着地で粉々になったロビーのベンチを前足で吹き飛ばし、すぐに次の攻撃に流れていく。純粹に力と力の勝負ならば逃げる必要はない。だが、ワイバーンと力で対等に戦うのは不可能に近い。

ゼーンは飛び掛かって来るワイバーンにレールガンに向けた。狙いも半ばに引き金を引く。だが――弾は、片翼で強引に軌道を変えたワイバーンの脇を無情にも掠めていった。予想外の行動を目の当たりにし、体が一瞬硬直する。油断ではないが、それは間違いない。ワイバーンには隙に見えただろう。更に速度を上げ、突進して来る。ワイバーンが吠えた。すでに避けるタイミングは奪われているだろう。絶望的な展開に、体の底から締め付けられるような恐怖が襲う。無駄な抵抗だと理解しつつも、まだ生きていたレールガンを撃った反動を何とか利用し、ゼーンは致命傷を避けるだけの距離を確保した。

刹那――大きく開いたワイバーンの口は、岩を砕くような音を響かせレールガンの大半を食いちぎった。破壊されたレールガンからは火花が散り、小さな爆発が起きる。

それは、唯一見付けた好機。

つまりは反撃の狼煙。

ゼーンは爆発と閃光に一瞬怯んだワイバーンの下顎を蹴り上げてか

ら、右手の長剣を元に戻し、シュナーベルを引き抜いた。

すぐさまビーム刃の出力を最大まで上げ、喉元へ斬り付ける。

硬い皮膚に残ったのは浅い裂傷だったが、ワイバーンは仰け反るように立ち上がった。透かさず間合いを詰め、三度^{みたび}喉元目掛けて飛び蹴りを見舞う。後ろ脚と尾で踏ん張っていたワイバーンも耐え切れず仰向けに倒れ込む。さすがのOBISでも、その状態からすぐに反撃へ転じる事は容易ではないだろう。ゼーンは間髪入れず追撃を続けた。

しかし、考えは甘かった。

もはやこのOBISは“普通ではない”のだ。こちらの位置を目視できる状態ではないにもかかわらず、尾が精確に弧を描いて迫ってくる。追撃を断ち切られ、ゼーンはやむなく飛び退いた。それでも執拗に狙って来る尾は、それ自体に別の意志があるかのように動く。結局間合いを詰められず、その間にワイバーンは起き上がっていた。「くそっ」

一度は有利になりかけた状況も再び振り出しに戻された。いや、今のままでは不利になる可能性の方が高いだろう。そうならない為には、まだ背後を見せているワイバーンに攻撃を続けるしかない。

身震いを抑え、ゼーンは切り込んだ。迷いは許されない。限界まで達した速度は爽快感とは程遠く、体がバラバラに四散しそうな程に強引に動く。そして思考速度を上回る体に命令を出すには、常に先読みをしなければならぬ。それは勘に近いかもしれない。

変わらず精確に狙ってくる尾は、精確だからこそむしろ距離を読みやすい。

頑丈な鱗に覆われていても、末端の尾などにもなればその鱗の厚みも薄くなる。無数に重なり合う鱗の間を見極め、ゼーンは迫る尾にシュナーベルを振るった。重い手応えの後に、切断された尾が回転して落ちていく。そして、それは怒りか苦痛か、ワイバーンは立ち上がり、耳を突き破るような咆哮を発した。

立ち上がりほぼ垂直に近くなったワイバーンの背中を駆け上がる。

斬り付けてもまず致命傷は与えられない背中は無視し、翼の付け根へとシュナーベルを振り上げた。深手ではないものの、血が糸を引き、翼の動きが鈍くなる。

が――

それでも、巨大な翼は動くだけでハイブリッド1人を吹き飛ばすには十分過ぎる威力を保っていた。両翼が生み出すつむじ風に、揉まれる花びらのように体が宙を舞う。

「くっ！」

ワイバーンが反転し、攻撃態勢を取る。またもや、最悪のタイミング。そして今回はレールガンの恩恵は無い。

鋭く光るワイバーンの瞳が、体の自由を更に奪っていく。未来は1つではないが、限られた選択肢の中から必ず選ばれる結果がある。今はそれを待たざるをえないが、秒単位で奪われていくNBMの有効稼働率は30%を切っていた。時間的な余裕すら残されていない。ワイバーンの体が僅かに沈む。

(来る！)

次の瞬間。ワイバーンとの間合いは無いに等しくなった。

突っ込んで来るワイバーンの鼻面^{はなづら}目掛け、薪^{まき}を叩き割るようにシュナーベルを振り下ろす。ビーム刃が徐々に食い込んでいくが、それでも勢いが止まらない。逆に軽く首を上げただけで、シュナーベルはあっさり弾き返され、乗じて歯牙を剥^むき出してくる。ゼーンは透かさずシュナーベルを引き戻した。対峙するだけの間も無く、機を奪い合うだけの一瞬が過ぎる。互いの反応は同時。

「はああああっ！」

襲い掛かる歯牙を迎え撃つべく、シュナーベルを振るう。

斬り下ろし、突き刺し、斬り上げ、薙^なぎ――続けざまに斬り散らす。歯牙が数本折れ、鱗はひび割れ、皮膚は裂け、血が滲み、ワイバーンの顔はボロボロになっていく。増えていくワイバーンのダメージの量に反比例してシュナーベルの出力は少しずつ低下していたが、それでも手を止めるわけにはいかない。腕に負っていく傷も増えて

いくが、攻撃を止めれば、そこには死が待ち構えている。

思考にまともな労力を使えるような状態ではない以上、浅はかな知恵しか搾り出せないだろうが、それでも何か策があるはずだ。このワイバーンを倒す方法が。そして、いくつか導き出された方法から選別していく。

（一撃で仕留めるには、あれしかないか）

選り抜かれた策がはたして最善の策かどうか――そこまでは分からない。ただはつきりしているのは、しくじればワイバーンの腹を満たすという事だけ。

ビーム刃が生み出す残像の軌道から、タイミングを計る。途切れない残像が止まる時、それは紙一重で生死を分かつ。

その時は来た。

斬り下ろしたシュナーベルを左手に持ち替え、

『PTインストール。NBMスタビライズLV5にシフト』

トランスを変えた事により、速度は一気に落ちた。行動はよりの確に迅速に。慣性も利用し、握り締めた右手をワイバーンの下顎へ叩き付ける。鈍い音が聞こえ、下顎が――恐らく外れたのではなく折れただろう――だらし無くぶら下がる。しかし同時に、上顎の犬歯はプロテクターごと右肩の肉をえぐっていった。

「ぐうっ！　このお野郎！」

激痛に惑わされず、左手は動いた。上顎にシュナーベルを下から突き刺し、体を口腔こうくうに割り込ませる。痛みに感覚を奪われた右手を何とか突き出し、ゼーンは右手に意識を集中した。

『サントランス
TTインストール。NBM／組織変成制限（TML）解除。スタビライズLV5にシフト』

稲妻を纏い、長剣へ変わっていく定形。現時点で可能な限りの力を注ぎ込んでいく。

渾身こんしんの剣はワイバーンの体内を刺し通した。一気にケリをつけるべく、その長剣を四方八方に展開。内部から稲妻と共に串刺しにする。

奥底から沸き上がるような掠れた咆哮が、断末魔^{だんまつま}となって響き渡る。のた打ち、顔を振り回して壁に打ち付けたワイバーンだったが、抵抗もそこまでだった。吐き出されていく息に生氣は無く、ただ流れるだけの血生臭い空気ではなかった。力無く、巨体がくずおれていく。

ゼーンは慌てて右手から長剣を分離させ、ワイバーンから飛び退いた。しかし、それ以上動く体力すら残っていなかった体は、為す術無く落ちていく。受け身も取れず床に激突。どこまでも転がっていくのではないかと思える程転がり続け、やがて、小さな観葉植物の植木鉢に顔からぶつかり、天地が逆転した状態でようやく体は止まった。

「……いや、息苦しいんだけど」

思わずぼやく。何とか重心をずらし、首が折れそうな体勢から体を倒す。運よく仰向けになり、ゼーンは口元を緩めた。

「はは、は。よく頑張ったなあ……俺」

疲労感にどっぷり浸かった意識は溺れるように沈んでいく。ゼーンは重たくなった瞼を素直に閉じた。

決別の再会（前書き）

何とか9月11日に間に合いました。世界が平和でありますように
（^人^）

決別の再会

「聞こえる……アニマの声が」

宇宙ステーション、セクション1へ着いたエレベーターから降りたエリファは、中央ロビーを歩きながらおもむろに口を開いた。

どこからともなく聞こえるそれは、かつて耳にした囁きそのものだった。間違いなく幻聴ではない。耳鳴りのように、たとえ耳を塞いだとしても囁きは呪いのように脳裏で高鳴る。だが、1つだけ決定的な違いがあった。

「苦痛は……感じない？ 対干渉還元制御（AIF）が機能しているから？」

確かに、冷静に聞けている自分に驚きはしたが、それが不快であることは変わりなかった。逃れる事もできはしない。

「まだ私を誘っているとでもいうの？」

栗立あわだつような感覚が走った両腕を抱え込み、エリファは独りごちた。

『たまには誘われてみたら？』

アオイが投げやりに言ってくる。

「冷かさないで下さい」

『茶化してるのよ』

「意味変わらないじゃないですか」

『もう。このアオイ姉さんの心遣いが分からないかなあ。エリファ自分で気付いてないみたいだけど、声震えてるんだもの』

「……………」

思わず口ごもる。正直声が震えている自覚はなかったが、体が震えているのだけは認めていた。抱え込んだ両腕を更に強く抱え、エリファは蹲つまずくまった。痛みがどうにか震えを抑えてくれる。思考を切り替え、エリファは今すべき事を思い出した。

「……早くゼーンを助けにいかないと。反応が小さい。セクション

4 みただけど確かよね?」

なるべく声が震えないように、エリファは慎重に言葉を紡いだ。

『そうね。こっちでも確認したけど生命維持ぎりぎりかもしれないけど、そっちは心配しないで。シレーヌが警備隊に連絡したから。彼等にはNA剤（NB緊急補充用薬剤）を所持してもらってるし、ちゃんと対処してくれるよ。それよりも、今警備隊はミリアが指揮してるからそっちに行ってあげてくれる?』

「ミリアが?」

『シュウもゼーン同様、もうあまり無理はできないのよ。だからミリアが代役してるんだけど……正直彼女じゃ頼りないからさあ。だからって、エリファにお願いするのも悪いんだけど』

「心配しないで、私はもう平気だから」

『そう? ま、エリファがそう言うならいいけど。……あ、でもね、センチメンタルな女は得するから覚えておいた方がいいわよ』

どこか愉快そうに話の内容を変えたアオイに、思わず訝しげに問い掛ける。

「……何の話?」

『恋愛の指南よ』

溜め息を吐き出す一瞬の沈黙を経て、エリファは震えの止まった体から腕を解いた。

「またそんな話?」

『あら、お気に召さない? 同じ乙女同士、他愛ない話もいいじゃないのお』

「別に今じゃなくてもいいと思うだけです」

言いながら、エリファはセクション4へ向かう正面のエレベーターへと歩を進めた。

『つまんないなあ、ゼーンは今話せる状態じゃないしさ。キメラもいなくなったら、暇してるわけなのよ』

さも当然のようにそんな不謹慎な悩みを打ち明けられても、どうにかできるわけがないのだが。返答に迷いつつ、エリファはエレベ

ーターのボタンを押した。

――が。

「あれ？」

本来押せば点灯するはずのボタンが点灯しない。

『あ、ごめんごめん！ キメラとの戦闘で安全装置が働いてターミナル内のエレベーターは全部停止してるんだった』

「……………」

つい、うっかり割ってしまったエレベーターのボタンから指を離し、エリファは無言で別の移動手段を探した。

擬似重力を生み出す為に軸を中心として回転を続けるネウロンのリングは5層構造になっており、その5層目が最奥部と呼ばれている。そのネウロンは今、第1層を地上へ向け、軌道エレベーターの柱頭部と軸を直線にして連結されていた。

ステーションからネウロンへ行く為のエレベーターは、予想通り安全装置が働き停止していたが、1台だけは何とか起動させる事に成功した。

セクション5。軌道エレベーターの先端部、連結ブロックへ到着したエレベーターから、ミリアは無重力空間へ体を滑らせた。ブロックの中心には円柱型のエレベーターがあり、それがネウロンの軸へ直結している。

「……静か過ぎる」

森閑しんかんとした空間はかえって不気味さを引き立てている。募る不安に思わずミリアは呟いた。

「頼みのキメラが全滅したから、士気が低下したんじゃないのか？」
後から続いた警備隊の1人が言ってきた。

「まさか逃げたの？」

「それはないだろ。奴らの船はまだステーションに停泊しているし」
「やっぱり、突入するなら今かな？」

「ああ。キメラには遅れを取ったからな。俺達には汚名返上のいい機会だ」

「へへ〜今度は頼むよ？ ……あれ？」

「どうかしたのか？」

ふと気になった耳鳴りに、ミリアは違和感を覚えた。それはインターフェースジャマーによる影響であろう事は予想できたが、

「何かイライラするなあこの耳鳴り。頭痛もしてきた」

「急ごう。OBIS^{オヴィス}への干渉波も影響してるのかもしれない」

「そうだね。抵抗無いなら無いうちに」

加えて、もし抵抗があったとしても、相手が人間であれば対処は容易い。が、強腰な言動の反面、心中では半ば取り乱している自分もいた。

（ん〜隊長、私大丈夫かなあ）

依然続く耳鳴り――いや、それは徐々に痛みに変わりつつあった。

「お粗末だなあ」

ほんのりと冷たい床に仰向けのまま、薄暗いロビーの天井を眺めながら、ゼーンはぼやいた。

「なかなか引き際は難しいものだよ」

脇でNA剤の準備をしながらシュウが苦笑する。

「ま、相手があれじゃあな。ホントにOBIS^{オヴィス}かあれ？」

「だと思ふよ。でも、僕がもう少し頑張れば問題はなかったんだろうけど」

「そりゃお互い様さ」

想定外のキメラに苦戦した事よりも、それだけのキメラが生み出された事実の方がより重い。

「これが僕等の宿命なんだろうけどね」

「クサイ台詞だな隊長」

「そうかい？」

シュウは携帯ケースからNA剤の容器を取り出し、使用量の目盛りを合わせていた。

NA剤とは、ハイブリッド専用のNBМ緊急補充用薬剤の事で、NBМの有効稼働率を補助的に回復する為に使用される。その容器は直径約2センチ、長さは10センチ程の注射器のような形をしているがそれに特有の針は無い。代わりにハイブリッドの固有分子情報を読み取る小さなプラグが付いており、それによってある程度適合させながらNA剤を注入させる仕組みとなっている。

「よし、準備完了」

その必要は無いのだが、シュウは容器を軽く指で弾き、注射器を使用する際にはよくやる気泡を抜く仕種を見せた。

「頼むよ」

言いながら、ゼーンはわずかに動く左腕をシュウに差し出した。

プラグが腕に差し込まれると同時に、バイザー状ディスプレイが自動的に下がり、現在のNBМ有効稼働率やNA剤との適合レベルなどが表示されていく。

「有効稼働率5%未満かよ……俺も落ちぶれたもんだな」

「そう言うな。戦争の道具だったあの頃と今は違うよ」

「……俺達は」な

注入が終わると徐々に全身に感覚が戻り、右肩の傷の修復が始まる。しかしそれでもまだ、血流が滞って痺れた後のような体を動かすのは難儀だった。

「NA剤が馴染むまでは無理に動かない方がいいよ。とはいえ、ある程度回復してもさすがに戦闘は無理だろうけど」

と。言い終えたシュウはNA剤の容器を携帯ケースに入れようとしていた手を止め、突然上を向いた。

「どうかしたのか？」

「……何か声が。いや、耳鳴りかな？」

シュウのその言葉に、ふと不安が過る。ゼーンはバイザー状ディスプレイの表示を切り替えた。

「……この、干渉波は」

「ゼーンまだ」

シュウの制止を無視して軋む体を起こし、ゆっくりと立ち上がる。目眩に似たふらつきはまだNA剤が馴染んでいないからだろう。走る事も辛いかもしれない。だが。

「まだ後少し、無理しなきゃまずいかな」

バイザーを上げながら頭上を見上げ、ゼーンは舌打ちした。

ある1つの事を除けば静寂であろうネウロン。そのある1つの事である耳鳴りに悩まされながらも、ミリア達は第3層まで到達していた。

そこまでの搜索は難無く終えたものの、救助すべき所員の生存者はゼロ。状況を考えれば予想はできたが、それは所員に限られた事ではなかった。腑に落ちない思いを胸に、ミリアは何度目かの言葉を吐き出した。

「いったい何があったの？」

目の前には、ライフル銃を握りしめた犯行メンバーの1人である男が死んで倒れている。男の頭部には明らかに銃で撃った痕があった。

「自殺、なのか？」

「こんなあっさりと？ 何か不自然じゃ……うっ！」

「どうかし——っ!？」

痛みが広がる。

それはまるで、後頭部を鈍器で殴られたような衝撃にも似ていた。続けざまにこめかみの辺りが締め付けられ、目の前が霞み、意識が一瞬遠退く。平衡感覚を回復させる事もできず、なんとか壁にもたれ掛かり、倒れるのだけは凌いだ。

（立ちくらみ……なんかじゃ、ない？）

味わった事のない体の異変に、ミリアは平静を失いつつあった。

だが、それを自覚していても手の施しようが無い。

「うう……いったい、なんなの……これ」

壁に肩を擦るように歩きながら、ミリアは呻いた。^{うめ}ふと後方を見遣ると、他の隊員は皆床に倒れ伏している。

（私はまだ、マシみたい……ね）

だが、意識と感覚が徐々に削がれていくような状態では自分も近いうちに倒れるのは間違いない。抗おうにも、体の自由すら無くなってきた。それは恐怖としか例えようがない。訳も分からずミリアは唇を噛み締めた。

と、その時――

朧^{おぼろ}げに映る視界の中央で、銀色の何かが揺らいだ。まるで陽炎^{かげろう}に潜む火柱のように。陽炎なら幻と大差ない気もしたが、“それ”は確かに存在している。朦朧^{もうろう}とした意識の中でもそれだけは感知できた。

いや、否応なしに感じさせられた。

（……背筋が、凍る）

寒さを感じる炎など馬鹿げた妄想でしかない。ならば“それ”は何なのか。確かめようと手を伸ばすが、触れる事ができない。

もはや立っているのは限界だった。手を差し出したまま、前に倒れる。受け身も無残に失敗し、冷たい床が容赦なく頬を叩いた。皮肉にも、その痛みと冷たさが意識を僅かに覚醒させる。そして、“それ”の気配が、硬質の床を伝ってくるのが分かった。

数秒の間。唐突に聞こえてきたのは、寒気を含んだ男の囁きだった。

「苦しいか?……何故苦しい。いや、何故苦しむ必要がある?」

嘲^{あざわら}るような口調。見下されている心地に反感を覚えたが、抗言する余裕はとっくに無かった。

「やはり、あくまで静観を貫くつもりなのでしょうね」

統制本部宛に届いたメールの無機質な文字の羅列を見て、エームズは込み上げる怒りを抑えながらガヴリアに報告した。

「国際連環機関か？」

「はい。こちらの救援要請は却下されました。しかも返答がメールとは。リベラルが関与しているならば動いてしかるべき事態のはず……」

「それが“彼等”だ。そんな対応しかできないから、リベラルに弄もてあそばれてしまう。これは一種の歴史に宿る必然の呪縛とでもいうのかな？」

それは比喩ひゆのつもりなのだろうか？

納得しようとするよりも、考え込む事が先立つ。予期せぬガヴリアの言葉にエームズは戸惑いを隠せなかった。

「おっしゃりたい事がいまいち分からないのですが」

「そんなはずはない。エームズにも分かっているはずだ」

そう言うと、ガヴリアがふっと口元を緩める。そして立ち上がると双眸そうぼうをどこか遠くを見るように漂わせた。沈黙が数秒続き――

「6年前。世界情勢の悪化に伴い、国連は苦肉の策として、安保理決議の採択により国際連環機関を発足させた。平和維持、テロや紛争の抑圧の為の軍事力行使。世界規模での調和を促す事を主立った活動として。だが……それはまったくの逆効果となった。国際連環機関の発足に端を発し、反連合政府同盟アウガルは世界にその名を現す事になった」

ガヴリアの口から語られたのは歴史の断片、かの大戦の発端に纏わる部分だった。確かにそれならば分かる。エームズも自分の記憶を辿り、言い添えた。

「理想主義の仮面をかぶった軍事的独善などとも揶揄やゆされていましたね。強硬姿勢過ぎたのがあだになっていたのでしょうか」

「そうだね。……だが皮肉にも、ジオ社はその国際連環機関ト・コイノンの後ろ盾によってここまで発展した。いわゆるハイブリッド技術提供による見返りだな。戦争への協力……いや荷担、かな」

途端、ガヴリアの顔にははつきりと険しい陰が見えた。それは人が何かを忌み嫌う時に見せる表情。

「荷担ですか。……前総裁である父上の功労もあつたと私は思いますが」

視線を合わせる事ができないまま、怖ず怖ずとエームズは言った。「父の全てを否定するつもりはないよ。功労もあつたのは認める。」

……しかし、大戦への功労者として国際連環機関ト・コイノンに表彰されたのだけは私には到底理解できない。戦争への功労など喜ぶべきじゃない」

ガヴリアが父親を憎んでいる事は社内でもよく知られている。それは前総裁である父親が死に、ガヴリアに引き継がれてから、それまで密接だった国際連環機関との間に大きく距離を取るなど、社の方針に顕著に現れていた。とはいえ、その心裏しんりをここまであからさまにするのは記憶に無い。繕う言葉も見つからず、エームズは口をつぐんだ。

ガヴリアは険しい表情のまま続ける。

「父は死んだが……どうやら私は父の呪縛からは逃れられないようだな」

かぶりを振るガヴリアの顔には苦笑が浮かぶ。

「それが……必然の呪縛ですか？」

「過ちは繰り返されるといふ教訓だよ。いや、そう仕組まれていたと言うべきなのかな」

「……？」

「人は何故争うのか。それは、人には未来永劫説き明かす事のできない命題かもしれない。そう。だからこそ、国際連環機関は存在しているのだ」

矛盾の二文字が脳裏に過つたが、口にはせずガヴリアの次の言葉を待った。

ト・コイノン「国際連環機関の思想がそれを証明している」

「……思想、ですか？」

「機関の代表ヴィンセント・ブリストーは言った。世界の本体は精

神的であると。ただ精神のみが真の存在でありそれを重視すると」

「唯心論、ですか」

ようやく穏やかになりつつあったガヴリアの表情に安堵しながら、エームズは言った。

「この事態は、私の恐怖心が招いた結果だ。……アニマは、国際連環機関^{イン}の精神そのものだからこそ、否定しきれなかった私の責任だ」
エームズはガヴリアの言動に言い知れぬ不安を感じ、咄嗟に口を挟んだ。

「ちょ、ちょっと待ってください！ その言い回しはまるで」

「その声を荒らげるな。エームズが気にかかる必要はないよ。推測の域とは得てしていい加減なものだからね」

そう言って、ガヴリアは事もなげに意味深な笑みを零^{こぼ}した。

突然消え失せた耳鳴りの後に訪れたのは何の変哲もない沈黙だった。自分の呼吸と足音が無ければ、ネウロンの分厚い壁の外と何等変わらないだろう。ふと、そんな事を思いながら、エリファは第3層へ着いたエレベーターから降りた。

(感じる)

安否が不明な所員12名や警備隊の反応が確認できない状況なのはインターフェースジャマーの影響だろう。それでも目を閉じれば今でも不敵な笑みが甦^{うず}る。この気配だけは忘れるはずがない。忌まじましい記憶が疼^{うず}き、気分を逆撫でする。我知らず止めていた息をゆっくりと吐き出し、エリファ廊下を走り出した。

擬似重力は回転するリングの内側に発生している。廊下はまるで坂を上るようだった。その廊下を200メートルほど走っただろうか。徐々に見えてくる状況に、足が自然と動かなくなる。

倒れ伏した20名前後のハイブリッド。微かな呻き声が聞こえてくるがそのほとんどが気絶しているようだった。

(……やっぱり)

手前から今一度見回し、視線を奥へと移していく。やがて、たった1人悠然と立ちはだかる男の姿が視界に入った。青藍の瞳は変わらず、^{まがまが}禍々しい氣を孕^{はら}んでいた。

男は口元だけで笑い、言ってくる。

「来たか。久しいな、エリファ」

「……アニマ。二度とこの目で見る事は無いと思っていたけど」臆する事なくアニマを睨み据え、エリファは言葉を喉から搾り出した。言いたい事は山ほどあったが、今は沸き返る感情を抑えるので精一杯だった。それでもこれは言わなければならない。

「でも、私がここにいるのは他律的じゃないわ!」

抑え切れなかった感情が上乘せされ、口調は自ずと強くなった。

アニマは口の端を吊り上げながら言ってくる。

「なまじ一部の人間に感化されて、それが自分の意志だとしても勘違いしたか?」

「……否定はしないわ」

アニマの表情が一瞬にして険しくなり、^{いぶか}訝るような眼差しで唸り声をあげた。

「なんだと?」

「私にとって自分の意志で踏み出したこの一步はまだ始まりでしかない。……だから大切にしたい。絶望を知っているからこそ感じられる人の優しさを」

一言一言を噛み締めるようにエリファは言った。今はもう惑う事はしない。信じられる揺るぎない意志があるからこそ、過去を振り返らずに済むかもしれない。

「後悔はしないとでも言いたげだな」

「後悔ならもう十分してきたわ。……これ以上後悔しない為に、誰にもさせない為に、私はここにいる!」

青藍の瞳が全てを見透かすかのように、妖しい光を放つ。動揺を誘う目を細めて、アニマはくぐもった笑い声を漏らした。

「お前は自分が正しいと、正義だと、そう言いたいのか? くつく

つつ、健気だな、何も知らないというのは。またお前に問わねばならないか。真に憎むべき、忌むべき存在は何か、を」

その答えにはもう迷わない。答えはすでに決まっている。ここへ来たのは、それを告げる為でもある。躊躇わず、素直に――

「これが答えよ」

同時に、エリファは抜いたシュナーベルの切っ先をアニマへと向けた。

「多くの犠牲を顧みず自分の生だけに固執するお前の方が正しいのか？ 人間を否定しても、所詮お前だって人間の端くれなのは変わらないんだ！」

「利用されている者が何を言うか。……ハイブリッドの真意すら知らないお前が」

罵りを吐き捨て、アニマが踵を返す。

追い掛けようと駆け出すが、次の瞬間アニマの後ろ姿が見えなくなる。それはアニマの存在自体が消えたのではない。突然遮られた視界。エリファは我が目を疑った。

「……そ、そんな、まさか？」

目に映ったのは、今まで倒れ伏していたハイブリッド達が、行く手を阻むようにゆらゆらと立ち上がっていく光景だった。

耳鳴りが、再び始まる。

発露

警告を知らせる音と共に、モニターに表示されるネウロン内部の異常な数値を示す干渉波のグラフ。インターフェースジャマーによって内部の詳しい状況を知る事はできないが、それは普通では考えられないレベルに達していた。

「局地的なものみたいだけど、いったいこれは」

干渉波が何に対して影響しているのか調べながら、シレーヌは目を見開いた。数値から予測するに、生身の人間では意識を保つ事は不可能かもしれない。

アオイがたまらず言うてくる。

「まさかナイトメア？」

「冗談はよしてよ。……でも、ネウロンの内部はもしかしたら」

シレーヌは続くべき言葉を右手で塞ぎ、封印した。そして左手は最後のキーを押す。

ゴーストのように照らし合わされた別の干渉波のグラフと数値。

「……やっぱり」

尋常ではない干渉波は、紛れもなくアニマのものだった。慌てた様子でエームズがモニターを覗き込んで来る。

「間違いないか？」

「ええ、このパターンは統合制御戦闘体系（UCFS）、アニマのハイブリッドに対する干渉制御に酷似しているわ。アンチインターフェースフィードバック AIFが無いと、レセプタータイプのハイブリッドには為す術が……」

「まずいな。いったい何が起きているんだ？」

エームズが唸る。この状況では、知る術は無いに等しい。一度は静まった統制本部も、再び混乱していた。ネウロン内部に突入した警備隊と通信が繋がればいいが、状況からして期待はできそうもない。

「あ、先輩、ゼーンから通信です！」

「ゼーンから!？」

期待していた相手とは違ったが、アオイは心なしか嬉しそうな表情をしている。

「ゼーンよかった、無事なのね？」

『もちろん、もう大丈夫ですよ。今、シュウとネウロンへ向かっています』

いつもの脳天気さは影を潜め、その声はやや緊張している。だが、気にすべきはそこではない。

「ちょっと、馬鹿を言わないで! 2人共今の状態じゃまともな戦闘なんてできないわよ？」

『そんな事言ってられる状況じゃないっすよ?』

「……知ってるのね？」

『一応“経験者”なんで』

含みのある言葉にシレーヌは一瞬鳥肌が立った。その言葉はアオイの冗談より肝を冷やす。いや、つまりはもう冗談ではない。

「わ、分かったわ。でも、無茶はさせないわよ？」

『いやあ、正直もう無茶はしたくないかな』

いくらかいつもの口調に戻ったゼーンの様子に安堵しつつ、シレーヌは言葉を返した。

「まったく。無駄口をたたく余裕があるなら、早く本題に入りなさい」

『お、さすがシレーヌさん。話が早い』

「それが無駄口」

『へい。実は頼み事なんです、シュウにもAIFをインストールできますかね?』

「可能よ。ただ、少し時間ちょうだい。ネウロンに到着するまでには必ず用意するから」

『お願いします』

通信が切れると同時に汗ばんだ両手をハンカチで拭き取り、シレーヌは急いでAIFのインストール作業に集中した。

立ち上がったハイブリッド達に動き出す気配はなかった。吹き渡る風に揺れる草原の千草のように、彼等は立っている。

(コントロールされているの?)

一度に20名近いハイブリッドをやり過ごすというのはさすがに厳しい。アニマがこの場を去る為の時間稼ぎだとすればどうということはないが。ひとまずハイブリッド達から殺気が感じられないのを確かめてから、エリファは胸を撫で下ろした。

「アニマ、何故逃げるの!」

どこからともなく感じる別の気配に向かって、叫ぶ。そしてアニマの声もまたどこからともなく、耳の奥――脳裏に響く。

『私は逃げはしない。お前が自分の存在が何なのかを知るまで、待つだけだ』

震えは無いが、気分がざわつく。あまりの不快さにかぶりを振り、エリファは反駁した。はんぱく

「この期に及んでまだそんな事を!」

だがアニマの言葉は返ってこなかった。自分の発した声の余韻よゐんだけが静寂を散らす。

そして、その刹那。

居並ぶハイブリッドの中から殺気を感じ、エリファは直ぐさま飛び退いて、右手でシュナーベルを構えた。

(来る!)

見定めた方向。ハイブリッド達を薙ぎ倒し、その殺気が剥き出しになる。

「ミリア!」

右手で振り下ろされた鈍い光を放つミリアの長剣をシュナーベルの峰で受け流しつつ、エリファは叫んだ。だがミリアは無反応のまま、間髪を入れず次の挙動に移ろうとする。

(早い!)

右に流れた剣が滑らかに反転し、小振りに始動。

その動きに無駄はない。

知る限り、幼いミリアにそんな器用さはなかった。

だがアニメのコントロールによるもの――本来ミリアは長剣を使用しない事から予想できる――だとすれば得心が行く。救いは相手がハイブリッドの中では非力なミリアだということぐらいだろうか。更に速さを重視している分、必殺の一撃にはならない。とはいえ、冷静に対応できる距離でもなく、ミリアに振り切られる前に、エリファは彼女の長剣を左手で捕らえた。

「ミリア、止めて！」

再び呼び掛けるが、ミリアに期待した反応は見られない。むしろ彼女の長剣には力が入る。咄嗟にその力を抑制しようと掴んでいた手に負けじと力を込めたが剣は手から擦り抜けていく。指先には長剣の表面から剥がれたNB^{ナノバイオマテリアル}Mのざらりとした触感だけが残った。

（次は、突き？）

上半身を捻り、右腕を引いた体勢を見てエリファは予測した。と、ほぼ同時にミリアの突きが放たれる。

肩の位置と腕の角度で軌道を読んでエリファは寸前で屈んだ。ミリアの放った突きがイメージ通りの軌道で顔の真横を掠め、プロテクターの肩口を僅かにえぐった。そこで動きが止まる。

透かさずシュナーベルで肩口の長剣を跳ね上げ、がら空きになったミリアの腹部――プロテクターに守られていない脇腹――に拳を叩き込む。手応えはあった。普通に動くことすらままならないはずである。が、ミリアからは呻きの一つも漏れなかった。聞こえたのは、雄叫びだけ。

「あああつ！！」

再びミリアの右手が振り下ろされる。もちろんそれに対応するだけの余裕はあった。だが予想以上に――初めの一撃よりも――その一撃は重みがあった。長剣との衝突で甲高い金属音を響かせ、シュナーベルが弾き飛ばされる。ミリアの長剣の切っ先は、そのまま空

気を裂いて目の前を過って行く。

「くっ！」

ミリアから漂う剥き出しの殺気に、胸の奥が疼き、その奥から吹き上がる風に全身の神経が逆立つ。その風を吹かせるのは、アニマの息吹。

だがミリアは関係ない。傷付ける事などできるはずがない。アニマの思惑が予想通りなのだとすれば、なおさら。

（でも、どうすれば！？）

考えあぐねている最中も、ミリアの力攻めが続く。なんとかその全てを紙一重で躲すが、そう長く続けられそうもない。エリファは止むを得ず左手を長剣へと変えた。数回の打ち合いでミリアの長剣を強く弾き返すが、勢いを止めるまでには至らない。

後方を見る余裕すらないまま後ずさる。

俄然ミリアの攻めは激しさを増した。小刻みに切っ先の軌道を変化させ、突きと薙ぎ、上下の切り込みを織り交ぜての猛攻。抜け出る事ができない。

と、不意に硬い物が背中を叩いた。

「——っ！」

思わず視線を流す。

（壁際にっ！）

視線を流したのは一瞬とはいえ、それはあまりに迂闊だった。急いで視線を戻すも、ミリアの長剣は雄叫びと共にすでに眼前にある。——間に合わない。

その確信と諦めが心中に沸き上がった瞬間、視界は一面闇に閉ざされた。

終わった。呆気なく自分は死んだ——そう思ったが、冷静に判断してみれば違った。まだ意識はある。シュナーベルを握っていた右手の痺れを感じられる。ふと、顔に付いた温かい液体のような物も感じた。その臭いまでも。

（血？）

痛みだけは感じていないはずだった。未だにミリアに斬られた実感はない。そもそも、本当に斬られたのだろうか？

と、不意に震え始めた目の周囲の筋肉が、我知らず目をきつく閉じていた事を教えてくれた。瞼まぶたを開けば、何が起こったのか、全てが分かる。

エリファはゆっくり瞼を開いた。

「……？」

そこにはミリアがいた。が、すぐに違和感に気付く。あるべきはずのもの――彼女の長剣が無かった。いや、正確にはミリアの右腕そのものが無くなっていた。まるで吹き飛んだかのような腕の付け根からは、鮮血が噴き出している。

顔の血の気が失せていく。エリファははつきりと戦慄を覚えた。

目の前の状況にではなく、自分の犯してしまった過ちに。

(……そんな)

たとえ無意識であっても、力の使い道を誤れば咎められる罪である。後悔するような事があってはならない。したくはない。してはいけなかった。

事切れたように崩れ落ちるミリアをエリファは直ぐ抱き留めた。まだ息はある。そのまま左手を彼女の患部に宛がう。腕を再生させる事はできないが、傷を塞ぐ程度ならなんとかなる。

『突発的な事象への対応では完全ではないが……ひとまず戻ってきたようだな。ノエマ・デユナミス』

唐突に聞こえたアニマの声。それだけでも腹立たしさが増すというのに、最後に呼ばれた異称が、更に気持ちさじなを苛む。

「黙れ」

怒りを押し殺した声が、噛み締めた歯の隙間から抜けていく。ここまで蓄積されてきた怒りを制するのはもはや限界だったが、今とはにかく自分の左手に集中したかった。グラウの時の感覚はまだ覚えている。同じように、左手に意識を集中すればいい。エリファは燦くすぶる怒りと葛藤しながら、左手に意志を注いだ。脈打つ手の表面

から患部に、NBMが流動していく。

『……なるほど。ちっぽけな独りよがりの正義感で、頑なに自分を否定するつもりか？』

「高慢な男。どこまで自惚れれば気が済むの？」

止血を終えたミリアをよこたわらせたエリファは、顔の血を拭いながら毒づいた。

『それがハイブリッドやお前にとっての運命だと何故気付かない？』

「運命ですって？　こんな……酷い事を強いられるのが！？」　　いたい何を根拠に言っているの！」

高圧的な気配に向かって、エリファは思わず声を荒らげた。

『根拠？　人間という1つの存在に限界を感じた者達が、人を越えた存在であるハイブリッドに新たな時代を託そうとした。それが真実だ。自然淘汰と同じだよ。……逃れられぬ運命を疎外し、訪れた偶然を受け入れる事は真意であって過ちではなく、純粹であるが真つ当ではない。お前はそんな人間に与し続ける事を選ぶつもりなのか？』

「たとえそれが真実でも、私の意志を非難される謂れはない！　人間でもハイブリッドでも、守らなければならないものは同じなはずよ」

右腕を大きく振り払って、エリファはがなった。それでも、アニマの口調は淡々と、こちらの心理を嘲笑うかのように言ってくる。

『それは“心”の事を言ってるのか？　くだらない。お前はまだ分からないようだな。……ネウロンにいた人間達の末路を見ただろうか？』

アニマの口から平然と漏れた言葉に息が詰まる。それに同調して速まる鼓動も、抑える事ができない。

「ま、まさか」

『言わずとも分かるだろう？　そう、これが新たなる摂理そのものなのだよ』

その強い抑揚が合図かのように、ミリア以外のハイブリッド達が

再び立ち上がる。それを視線だけで見回したエリファは、シュナーベルを拾い上げた。

「お前のエゴで仕組まれた摂理や運命なんて馬鹿げてる」

『これは私一人の意志ではない。それとも、私が見せた人の潜在意識がでっちあげだと思っっているのか？』

今更それも、馬鹿げた蛇足でしかない。エリファはかぶりを振り、「もうそんなのはどうでもいい事よ。私は素直に、人の未来を見てみたいと思えただけ。あれが全てじゃないと、教えてくれた人達がいるから」

エリファは強い信念を口にして、シュナーベルを握る右手を胸に添えた。

『全てではないとはつまり、根底は変わりはない。だからこそ、魂を躍動させる者——アニマシオン——である私が必要なのだ！』

痺れを切らしたらしく、突然語気が強まった。結局はそれがアニマの本心なのだろう。言い知れぬ野心が、その口調には満ちていた。「それがエゴだって言っているのよ！」

『ならばお前が人間を導くか？』

今やアニマの感情を顕現する使者となったハイブリッド達が、アニマの言葉に呼応して動き出す気配を見せた。

「そんな事をしなくても、人は歩んで行けるはずよ。お前のような存在がいなくなればなおさら！」

エリファは反駁しながら、自分の行く手を阻むハイブリッドの動きを窺った。^{うかが}

（無意識に力を発動してしまうくらいなら、自分で制御するしかない）

強引にでも切り抜ける方法もあるが、そのタイミングがなかなか見つからない。

ハイブリッド達がじりじりと間合いを詰めてくる。

「決別すると言ったけれど……私も殺すつもり？」

^{はや}逸る心中を隠し、エリファは平静を装って問い掛けた。動き出す

タイミングを逃さないように、瞬きすらせず神経を研ぎ澄ます。

『できればそうしたいが、お前はまだ死ねないようだ。……ただ、苦渋を与える事はできるがな』

同時に、シュナーベルを振り上げたハイブリッド1人が迫る。

(どうするの、エリファ?)

自問し、そして答えられないまま、エリファはシュナーベルの峰を相手に向けて構えた。そのハイブリッドもミリア同様、完全にコントロールされているのか、躊躇う仕種など微塵も見せずシュナーベルを振り下ろしてくる。

(何とかしないと)

半ば観念して右手を振り出す。

そして。シュナーベルの刃と峰が弾き合う――その寸前。突然ハイブリッドの殺気が消え失せ、気抜けたように床に倒れた。空を斬る右腕をそのままに、エリファはそれを呆然と見つめた。

「よっ！ 待たせたな、エリファ」

聞こえたのは、聞き慣れた緊張感の無い声。ふと視線を上げると、
「……ゼーン！」

驚きと安堵で思わず声が上擦る。ゼーンは不格好なウインクをしてから、何やら自慢げに口元を綻ばせた。

「いやあやっぱ主役キャラはこうゆう登場の仕方じゃなきゃな」

どうやら自己満足に浸っているようだったが、それを尊重する気にもなれず、エリファは視線を移した。

「シュウ」

「エリファ、遅れてすまなかったね」

「謝らなければならないのは私の方。……私は」

面伏せな気持ちから、エリファは視線を落とした。夥しい血溜まりの上で、ミリアの胸が弱々しく上下動を繰り返している。

「……行くんだエリファ」

「シュウ」

許しを請おうなどとは思っていない。少なからず非難の言葉は覚

悟してただけに、その言葉は予想外ではあった。拍子抜けして、それ以上返す言葉が見つからずにいると、シュウは繰り返してきた。「行くんだよエリファ。君は君にしかできない事を成すんだ」シュウが大きく頷く。

「ここは、俺達の汚名“挽回”の為に任せてくれればいいんだよ」

「いや、ゼーン？ 汚名を“挽回”したら駄目じゃないか」

シュウに透かさず突っ込まれ、ゼーンは首を傾げる。^{かし}

「あ、あれ、そうだったけ？」

それは無視して――

「分かりました。ここはお願いします」

「気をつけて。ミリアのMTSとシュナーベルが無くなっているから。こっちは“名誉返上”しないように頑張ってみるよ」

そう言っ、シュウは微笑みを浮かべた。

「行きます」

エリファはそこでようやく力強く頷き、MTSを起動させた。

躍動する細胞で得た推力で床を蹴る。行く手を阻むハイブリッドも同時に動き出したが、標的が増えた事で散漫になった攻撃をかい潜るのは容易だった。そのまま脇目も振らず、直走^{ひたはし}る。

信念を胸に。

明るい明日を求めて。

下瞼一杯に溜^{したまふた}まった涙が、瞬^{まばた}きをする度に一粒二粒と、頬を伝って流れていく。

紅涙に沈む瞳の少女が見せた表情は、はっきりと苦痛に歪んでいた。その少女の咆哮と呼び声は今でも覚えている。決して忘れる事はできない記憶。そして今もまた、脳裏には時間を超越した呼び声が響いていた。

「……エリファ!!」

グラウは自分の叫び声で目を覚ました。いや、目を覚ましてから叫んだのかもしれないが、そんな事はたいした問題ではない。

見慣れたはずの夢。だがいつもとは違う感慨かんがいを抱いている自分に、気鬱にならざるを得なかった。

と――ふと人の気配に気付き、顔を向ける。

「お目覚め？　気分はどう？」

「アオイ？　お前、ここでいったい何を？」

言いながら、事態を把握しようとする周囲を見回し、グラウは初めて自分がベットの上にいる事に気付いた。

「見ての通り、病室よ。失礼しちゃうわね、せっかく看病してあげようと思ってるのに」

「……そう、なのか？……そうか。すまない」

アオイに対して素直に謝っている自分はあまりにも奇妙だったが、アオイはそれ以上に驚きを隠せないでいる。

「ちょ、ちよっと！　グラウ正気？　意識ある？　頭痛くない？」

吐き気しない？　この指何本に見える？　自分が誰だか分かる？　あーええっとお」

いくらなんでも、寝起きにこれだけまくし立てられれば、誰だろうと不快になる。グラウは耳を塞いで声を荒らげた。

「喧やかましい奴だな！　俺は別に問題ない」

「え？　あ、そう？」

心なしか安堵の表情を浮かべたアオイはベットの脇に置かれた椅子に腰掛けた。

「でも、寝言聞く限りでは、問題ありって感じるんだけど？」

静かに語り始めたかと思いきや、その内容は意外に鋭い。自分の寝言を知る由も無いが、たった今見た夢からすれば何となく想像はつく。

「本当にこれでよかったのかって……色々後悔してるのさ」

堪らず呟たまいて、それは唐突だったと実感して、グラウはかぶりを振った。改めて口を開く。

「上の状況は？」

「あ、えっと……ネウロン内部の状況はまだ詳しく分からないわね。シュウとゼーンのお陰でキメラは掃討できたけど、さっき統合制御戦闘体系（UCFS）らしき干渉波が確認されたの。シュウにもAIFをインストールして、ゼーンと2人ネウロンに行ったわ。もうエリファとも合流できてると思うけど……場合によってはネウロンを強制的に切り離して、爆破する計画もあるみたい」

「……そうか。むしろ状況は悪化しているとも言えるか」

言いながら、グラウは頭部に巻かれた包帯に触れた。その奥には自分の肌とは違う感触が確かにある。だが不快ではない。まるでそこにエリファの手があるかのような不思議な感覚に、心が和らぐ。もう痛みはない。

安心させようと、愛想笑いを見せたが、どうやらアオイにはそう見えなかったらしい。哀れむような眼差しを向けてきた。

「エリファの事、心配？」

「……まあ、な」

顔はそのまま答える。アオイもまた、眼差しを変えない。

「でも、全てが終わればきっと笑顔で帰って来るんじゃない？」

「期待は俺にだってあるさ」

内心、願いに近い思いを呟いたグラウは、溜め息の後、ふと天を仰いだ。

望む未来

ハイブリッドとの戦闘。もちろんそれはゼーンとシュウにとって初めての経験だった。躊躇^{ためら}う部分はあったが、基本的な戦闘スタイルはそのまま、変える必要はなかった。MTSがある分、有利に事は運ぶ――はずだった。

「……まいったなあ。ハイブリッドってこんなに強かったっけ？」

戦闘開始5分で気絶させたハイブリッドは7人。残りは――

「11、12人。……でも、正直もうキツイね。やはり無理はするものじゃないか」

「いまさら、そりゃないぜ？」

キメラより苦戦をしているというわけではないのだが、“殺さない”という大前提があるだけに、行動が制限されているのは確かである。

ゼーンは体の脱力感に不安を覚えた。

「あまり長引くと、俺達の方が不利だよなこれ」

「なら、エリファを追うかい？」

「いや、それは素直に却下」

「じゃあ頑張るしかないね」

珍しく投げやりなシュウの言葉に苦笑しながら、ゼーンは再び問い掛けた。

「あと何分行ける？」

「本気で2分。省エネでは、5分かな？」

「俺も似たようなもんだ。やっぱりヒーローなら本気で2分だよな」
「僕は脇役で十分」

「へいへい。なら俺が7人やるぜ！」

反射的にハイブリッド達が動き出す。迫る波状攻撃の真っ只中に、ゼーンは全速力で飛び込んでいった。

ネウロンの中枢である第5層。その更に中枢となるブロックへと通じるエレベーターへと乗り込んだエリファは、操作パネルのスイッチを押した。動き出すと同時に、反対側へと歩を移す。

約2分後。

前方の視界が開け、ドーム状のフロアが見下ろせるようになった。中央部分で異様に^{たたく}設備も、はっきりと見る事ができる。

正直。できるならこの場所には二度と来たくはなかった。

(まさか、こんな形で来る事になるなんて)

ドームを俯瞰^{ふかん}したまま、ふと独りごちてエリファは唇を噛み締めた。

因縁。

(……そうね。生きていくなら、どのみち避けては通れない道だったはずよ)

自分で切り開かねばならない未来は、今この場所にある。同時にそれは、ハイブリッドの未来でもあるのかもしれない。

(私が望めば、顕現^{けんげん}される現実があるなら……あるのなら、私は)

エレベーターが徐々に速度を落とすと、程なく縦揺れを残して停止した。扉が開く。

エリファはその扉が完全に開くのを待ってから、足を踏み出した。リベラルの者かと思しき^{おほ}数人の死体の脇を通り過ぎ、長いスロープへと差し掛かる。

と、中央付近に見覚えのある人物が倒れているのに気付き、エリファはつと足を止めた。

(そんな……あれはカスミ所長?)

インターフェースジャマーで正確な生死の判断はできないが、出血具合を見ると恐らくは……

思わず声をのんでいると。

「今更、そう驚く事もあるまい?」

倒れたカスミを一瞥^{いちべつ}したアニマは、平然とした物言いを吐いた。

二の句を継げない。エリファはただ慔然^{くぜん}とアニマを睨み付けた。ハイブリッド用の黒いボディスーツだけを身につけた姿は“あの日”と変わらない。

「もはや言葉は必要ない、か？ それとも、今の今になって臆^{おそ}したかエリファ？」

かぶりを振る。

「残念ね。どちらもハズレよ。……どうしようもなく、お前が惨め^{みじ}に見えただけ。……ああ、そうね。そういう意味ではもう言葉は必要ないのかもしれないわね」

当て付けてから、それに対して案の定笑みを漏らすアニマへと歩き出す。このドームの中心へと。

自分の過去と今を縛る全てがそこには詰まっているような気がしてエリファは眉をひそめた。感傷的になどなれるはずもない。自分がある日、もし拒む事をしなかったら今という時をどのように過ごしていたのかなど、考えたくもない。

「もう終わりよ」

スロープの中段まで来たエリファは、短く告げて再び足を止めた。アニマとの距離は20メートルもない。

「終わり？ いったい何が終わると言うんだ？」

アニマはおどけた口調で両手を軽く上げてみせた。嗤笑^{ししょう}がドーム全体に響き渡る。それは、脳裏で高鳴るあの耳鳴りのように不快でしかない。

エリファは挑む^{いど}ような心地で言い放った。

「お前のエゴで仕組まれた、摂理と運命。それだけよ」

一拍あってから、アニマが切り返してくる。

「……まだ分からないか。残念だエリファ」

その蔑む^{さげす}ような物言い。そして込み上げるのは怒り。いや、もはやその一言では言い表せない感情が滾^{たぎ}る。胸の奥に轟く情動の咆哮に呼応して、エリファは言葉を吐き出した。

「……お前を、カメラと同じく、第一種指定危険生体分子として、
ヘテロドックス

排除する」

そして、静かに、黒光りするシュナーベルを抜いた。

「リベラルの艦が捕捉された？」

統制本部に駆け付けたガヴリアは、エームズに問い掛けた。同時に前面の800インチ液晶画面に視線を巡らせる。

「はい。ネウロンから約500キロの宙域を航行中だったリベラルの高速小型艦が先程、国連軌道警備艦に捕捉されました。現在別の警備艦数隻がもう一隻の艦を追跡しています」

そこで言葉を区切ったエームズは、正面に座る本部スタッフの肩を叩いた。

「頼む」

頷いた本部スタッフが手早くキーボードを操作すると、液晶画面に警備艦とリベラル艦の位置や予想進路などの情報が映し出されていく。

「このタイミング。無関係とは思えないけど……エームズはどう思う？」

「逃走を助ける為の艦を用意していても不思議はないと思いますが、不可解なのは警備艦より機動性の高いリベラルの高速小型艦がこうも簡単に捕捉された事です。ト・コイノンや国連は事前に情報を入力していた可能性も考えられないでしょうか？ もっとも、したたかなりベラルです。陽動の可能性もあります」

「どちらも正答だろうね。そしてどちらにせよ、警備艦は間違った判断はしていない。知らされた情報を元に最善を尽くしているはずだ」

「最善を、ですか。しかし、それは真実に基づいた情報ではないわけです。これでは、何の為の警備か」

エームズの表情は毅然^{きぜん}としているが、口調には不安と戸惑いが混じっている。ガヴリアは苦笑を浮かべつつ、冷静に言葉を紡いだ。

「……“偏執な人間が集まれば単なる傍観者”でしかない。答えの是非に関係なく、全てを見届けるつもりなのだろう。もっとも……その是非をたった1人の少女に委ねなければならぬ私も十分、不甲斐ないだろうけどね」

苦笑はいつしか、自嘲じちように変わっていた。

流れようとしない時間。沈むように滞とどった空気。そして、永遠にすら思える沈黙。胸の鼓動だけが、いたずらに回数を刻んでいく。ここにはまだ、自分が望む未来は顕在けんざいしていない。アニマが存在する限り、叶う事はない。

「お前は……私が望む未来には存在しない」
時を動かす意志の叫び。鼓動が速まる。

「口にするだけなら容易だ。まさか、私の存在が何を意味するかを忘れてはいまいな？」

「それは脅しのつもり？ ハイブリッドとしての能力は私の方が上よ」

「小娘が……減らず口を」

恫喝どうかつに似た声が響く。あの日と変わらない。何も変わっていない。変えなければいけない。

アニマは低い声音で更に続けた。

「MTSくらいで有利などとは思わない事だ」

その手に握られているのは恐らくミリアの物だろう。すでに装着している左手首のプロトタイプMTSを外すと、アニマはミリアのMTSを装着した。

「強がり。それはミリア用に調整されたMTSよ。使いこなせるわけないじゃない」

「ならば調整し直せばいいだけの事だ。お前こそ、考え直すなら今のうちだぞ？ まだ間に合う」

ハイブリッド自らMTSを調整するなど、聞いた事はない。だが、

アニマなら、やりかねないだろう。執念深いアニマが言い終えるよりも早く、エリファはかぶりを振って抗拒こうきよした。

「……もう、お前の戯ざれ事はたくさん」

言い放つと同時に、多機能戦闘用機構（MTS）に意識を集中させる。

（MTSマルチタスク発動。NBミッター解除）

マルチタスク発動により、同時に複数のトランスがインストールナノバイオマテリアルされる。NBが極限稼働を始め、力の奔流ほんりゅうが全身を駆け巡った。

擬似重力に縛られていても、自分の体は綿のように軽く感じる。エリファはアニマの挙動に警戒しながら、半身に構えた。

「そうか。もはや問答は不要だったな」

短く漏れる嘆息たんそく。アニマはそこで初めて動いた。音も無く。それは一歩ではなく、一瞬で間合いを詰める飛動だった。

「っ！」

咄嗟とつさに踵かかとで床を弾き、後ずさる。次の瞬間、今立っていた空間をアニマのシュナーベルが孤を描いた。

（遅い）

透かさず、エリファもシュナーベルにビーム刃を発生させて突きを繰り出した。ビーム刃の尖端がアニマの胸元を浅く切り裂くが、裂けたボディスーツから見える皮膚から出血は無く、手応えもない。それを裏付けるように、アニマは上半身を捻る恰好で突きを流しつつ、踏み込んで来る。エリファは再び後退し、低い位置から突き上げられた左の拳を紙一重で回避した。

まだミリアのMTSを調整できないのか、アニマが舌打ちする。もつとも、前例のない事だけに可能であるかどうかは疑わしい。確実なのはMTSによる身体能力の変化は明らかに上回っている事。ただ、それはあくまで現状であって、万が一を考えれば能力差は致命的なレベルにできていないだろう。

（余裕があるわけじゃない）

心中で自分に言い聞かせるように呟いたエリファは、シュナーベ

ルを握る右手に意志の力を込めた。手の表面が脈打つ感覚は、グラウやミリアの時と変わらない。異なるのは、力の意味合い。

右足を引いて構えたエリファは、その右腕を横に振り出して、シュナーベルを投げ付けた。爆発のような力の作用と同時に、手の平から火を噴くように空気を切り裂いて一直線に飛んでいく。

体勢を立て直していなかったアニマは、必死にのけ反ってそれを躲す^{かわ}。だが、元々の狙いはアニマ自身ではない。投げ付けたシュナーベルは狙い通り、アニマの右手に握られたシュナーベルに命中した。小さな閃光が起こり、刀身が砕け飛ぶ。

「うぐっ！」

衝撃に呻いて、アニマは床に倒れた。

『NBMスタビライズLV4にシフト。NBM/TML（組織変成制限）解除』

追い討ちをかけるべく、エリファは右手から剣のイメージを具現化した。間髪^{かんはつ}を容れず攻め寄る。アニマは受け身の際についた左手で身を翻^{ひるがえ}そうとしたらしいが、それもやはり遅い。エリファは長剣を振り下ろした。

重く鈍い音を立てて、アニマの右上腕に長剣が食い込む。勢いは骨に当たっても衰える事はなかった。そのまま刃は床まで達する。

が――

その刹那^{せつな}。漠然^{ぼくぜん}とした違和感に、エリファは思わず追撃を止めた。アニマは半ば蹲^{うずくま}った恰好で数メートル転がり、よろめきながらも立ち上がる。そこで浮かべた表情は苦痛に歪^{ゆが}んでいるわけでもなく、はたまた激昂^{げきこう}しているのとも違う。しいて言えばそれは、冷血な笑みだった。

「……やってくれる。だが、この程度ならばたいした事ではない」
アニマが事もなげに口にする。全く痛みを感じていないのではな
いかとすら思える口調で。それとも、本当に痛みを感じていないの
だろうか。

問答は無駄ではあったが、エリファは渋々問い詰めた。

「この程度？ やせ我慢できるほどの傷ではないと思うけど？」

「お前にはそう見えるだろうな」

アニマは言いながら肩を竦める。その時一瞬見えた腕の切断面は、無機質な物質にしか見えなかった。人間でもなく、ハイブリッドでもない。つまりそれは、生命ではない。

漠然と感じた違和感は、それだと気付く。腕を切断されたにもかかわらず、出血が全く見られない。

「何故平気なのか知リたそうな表情だな、エリファ」

「……………」

それは当然だった。

とはいえ、頷くのだけは厭わしく、エリファは代わりに眼差しを強くしてみた。だが、肝心のアニマの視線はドームの中央で異様に佇む物体に向けられている。

「この力が指し示すものは何だ？ 破壊か変革か支配か進化か……いや、それだけではない。それはお前も経験しているだろう？」

ようやく視線を戻したアニマが、冷血な微笑みを更に際立たせる。同時に、アニマの右腕の切断面が激しく波打つ始めた。NBMの躍動。しかしその度合いは尋常ではない。

「……まさか、再生？」

エリファは思わず驚きを漏らした。

俄には信じ難かったが、目の前ではその言葉通りの現象が起こる。定形を変えるかのように、容易に腕が構築されていく。

「お前はいったい……いったい何なの？」

吐き捨てるように問い掛け、エリファは長剣を突き出した。その切っ先の向こうで、アニマの首が左右に気怠げに動く。

「ノエマ・デユナミス。その名は究極の力を冠する者の証明。摂理を越えた最強の存在。万象を掌握する精神の根底。……そして私は、魂を躍動させる者——アニマシオン——」

聞きたい事はそんな事ではなかった。いや、求めていた答えを聞いたところで、返す言葉は同じだったかもしれないが。

「馬鹿げてる」

「同類であるお前がその言い草はないだろう？」

「勝手に同類にしないで！ 私は違う！」

怒号を上げて、エリファは攻め寄った。

長剣を袈裟掛けに振り下ろすが、アニマは今再生したばかりの右手から長剣を具現化し、それを受け止めた。鏢競り合いで、力が拮抗する。

「違うだど？ それはお前が拒もうとも、変えられない事だ！」

「なら変えてみせる！」

深い意識の中から叫ぶ。そして、研ぎ澄まされた感情と、揺るぎない意志によって湧き出た力が体中に漲る。

たちまち拮抗する力が増し、見えない衝撃波の渦が辺りを包んだ。

エリファは衝撃波の渦を生かして剣を押し込む――と見せ掛けて、逆に剣を素早く引いた。虚をつかれて前のめりになるアニマの鳩尾目掛けて右膝を突き上げる。

「うっ！」

アニマが呻きを漏らす。

だが苦痛に顔を歪めながらも、長剣を押し付けてきた。それは、プロテクター越しにもかかわらず鋭利な感覚が衝撃となって胸部に響く。そのまま床に叩き付けられ息が詰まったが、その苦しさを見捨てず、エリファは直ぐさま跳び起きた。それでも思わず出そうになった呻きを堪えて、勢いよく長剣を振り上げる。

その切っ先がアニマの頬を浅く切り裂いたが、相手の動きは止まらない。

「完了だ」

突然の明言は恐らく、ミリアのMTSを調整し終えた通告だろう。逆に死角から振り上げられたアニマの長剣が、右腕をえぐっていく。傷は浅い感じではなかったが、MTSの恩恵を得たアニマを前にして気にかける暇はない。

（出まかせじゃない）

右手を引き戻しながら息を吸い込みアニマを押し返し、再び剣を交える。拮抗する力での打ち合いは爆音を轟かせながら徐々に速度を増していった。何度も繰り返す攻撃は、互いに致命傷に至らない傷を体のあちこちに刻んでいく。

「このままで終わりか、エリファ？」

高揚と恍惚に溺れた表情のアニマは、黒い意志が乗り移った長剣を振り続けながら声を上げた。

だが、エリファは抗言しなかった。決してできなかったわけではない。その瞬間、それまでの流れとは違うアニマの挙動を見たからだった。

大きく間合いを詰め、長剣を振りかぶるアニマ。

――来た。

体が直感に促される。

『サントランス
TT始動』

瞬時に電撃を纏う長剣。それを、アニマとの間に割り込ませる。

刀身から溢れ出る青白い稲妻は、天翔る龍の如く猛り狂う。その稲妻に飲み込まれるようにして、アニマの動きは遅くなった。その表情は一転して、恐怖に滲む。

エリファは限界まで引き付けたアニマの長剣を弾き返すと、重心を落として衝撃波の渦に乗って回転した。その間に、次の一撃を放つ力を溜めるべく、両手で長剣を右脇に抱えるように戻す。

再びアニマを正面に捉えた時には、攻撃の準備はできていた。

この一撃で終わる。

その確信を胸に、エリファは渾身の力を両手に込めて長剣を撃ち出した。光が束となってアニマの胸に突き刺さる。

長剣を通して伝わってくるのは、生命の鼓動ではなく、冷たいNBMの躍動。

「……くっ！ まだ！」

光の中で抗うアニマの姿は、もはや虚勢にしか見えない。
「侮らないで！」

集束していた光が、一気に解き放たれる。その、力に呼応する稲妻は無尽蔵に膨れ上がり、アニマに襲い掛かった。

「な、何っ!？」

顕現される意志と力。

意志を顕現させる力。

(私が望めば、顕現される現実があるなら……あるのなら、私は) 光が更に広がっていく。

「……私は!」

「や、やめろ! 私…… “私の中” に入って来るなっ!」

突き刺した長剣から溢れ出る青白い稲妻。その一閃一閃が、アニマの体を喰らうように霧散させていく。

「あああああっ!」

アニマが叫ぶ。

轟音の中ですら耳をつんざく絶叫。

青と白に変貌する世界に、アニマの悪意が、消え失せていく。

「な、何だあ!？」

雷鳴のような轟音。加えてネウロンが崩壊するのではないかと思えるほどの強震。突然起きた不可測の事態に、ゼーンは喚声を上げた。

同時に耳鳴りも止んでいた。揺れと共に残っていたハイブリッド3人が倒れていく。

「ぬおっ!」

体力の限界というのものもあるが、収まらない揺れにゼーンも耐え切れず膝をついた。シュウも壁に寄り掛かり、なんとか倒れるのは凌いでいるようだった。

(こ、これはTTか? このままじゃまずいぞ)

案の定、ついに警報が鳴り響き、警告灯が目障りな光彩を放ち始めた。

意志に満たされた光。

その中で、不意にグラウの言葉が過った。

『お前の力があれば人間が変われるかもしれない』

望まれた力。グラウが求めた正しい力。

『所詮、正しさなんて、主観的価値判断にすぎない事なんだよ。道徳、倫理、真理、正義……それら道義道理全てを得る事だって、人間にはできやしない。凡庸だからこそ、利他を重んじて生きていかなきゃいけないんだ』

正しさは、深い優しさを裏付ける。それこそが“知って”“理解”する事。

「お前には、人の優しさを思念する事ができないから！」

「わ、笑わせる。それこそナンセンスだ！」

光の隙間に僅かに見えたアニマの顔。すでに半分以上が崩れたその顔を歪めた。笑ったのだろう。

それを見て、エリファは長剣をアニマの体から引き抜いた。光が消え、轟音が鳴り止む。

ほとんど原形を留めていないアニマの体が床に崩れ落ちる。表情を読み取りにくい顔とはいっても、狼狽しているのだけははっきりと分かった。アニマはかすれた声で言ってくる。

「何の……真似だ」

エリファは無言でかぶりを振った。アニマには、それは滑稽な仕種に見えたのかもしれない。かすれた声を荒らげる。それでもまだ、弱々しさは否めないが。

「まさか情けのつもりか！？ この私に」

「そうじゃないわ。……ただお前の意識を多くの人間が持っているのだとしたら、お前の存在が消えたところで、何が変わるのか……そう思っただけ」

「卑少な人間と一緒にされたのは心外だが……随分と、物分かりが

いいじゃないか」

「勘違いしないで。だからといって、お前の意志を尊重するつもりはないわ。別の方法を探すだけよ」

アニマの表情は変わらない。変えられないのかもしれないが、そんな事はどうでもいい。

「まだ再生できるわね？ 後は好きにして。……もう、これ以上は無意味よ」

言い捨てて、エリファは踵を返した。

「だから、甘いのだよお前は。……人間の醜い心を“見た”お前は、その心の破滅を望んだ。……だが、どうだ？ 世界は、人間は変わったか？」

居直ったような物言いが、背後から聞こえてきた。だが、エリファは振り向かなかった。そのまま言い返す。

「まだ、私が未熟だっただけよ」

「……そう、だな」

と。次の瞬間。消え失せたはずのアニマの悪意が蘇った。忌ま忌ましい気配が迫る。

(どこまでも！)

エリファは舌打ちして透かさず身を翻し、アニマの姿を捉えた。全身の再生は半ば、完全に再生した右手だけを長剣に変え、アニマは飛び掛かるように振り下ろしてくる。

エリファはそれを左手で掴んだ。手の平に刃が食い込み、激痛が走る。

「アニマあつー！！」

再び迸る稲妻。まばゆい閃光。意志に導かれ青白い龍が猛る長剣を、エリファは突き上げた。寸分の誤差も無く、剣はアニマの胸の傷に刺さる。

その一閃はアニマの体を貫き、瞬く間に光が飲み込んでいく。声にならない咆哮——断末魔を上げるアニマの体に満ちた稲妻は、轟音を鳴り響かせて、爆ぜた。

爆発の衝撃で左手が震える。確か過ぎる程確かな手応えを残して。

「これ以上は無意味だって……言っただじゃない」

爆発の余韻よゐんが残るドームに降り注ぐ雪のようなNBMの燃えかすを見つめて、エリファは哀れむように呟いた。

視界を遮かきっていた黒煙もやがて沈み、静寂せいじやくが

戻る。エリファは静かに右手の長剣を戻し、嘆息した。

「結局……私にはアニマすら、変えられなかった」

胸の内にあるのは達成感ではなく、重苦しい虚脱感きょだつかんだった。

明日はきっと……

「アニメの反応が消えた？ システムもダウンしたのか？」

ネウロン内部の状況が好転した事で歓喜の声が沸き起こった統制本部。そのどよめきに負けないよう、ガヴリアは語気を強めた。

「インターフェースジャマー消失と同時に、干渉濃度も安全値まで低下」

「ネウロンのコントロールイニシアチブも戻りました」

本部スタッフの慌ただしい報告にガヴリアは頷いた。

「よし。すぐに生存者を確認。被害状況と、警備隊への連絡も忘れないでくれ」

言い終わるが早いのか、ガヴリアは踵を返して、統制本部の出入り口へと歩き出す。が――

「どちらへ行くおつもりですか？」

行く手をエームズが阻む。どうやら思惑は見抜いているらしい。特別不思議な事ではなかったが。

「もちろんネウロンへだ。何か問題はあるかい？」

「あります。まだ警戒態勢は解除されていません。安全を確保できるまで総裁を行かせるわけにはいきません。今はまだ自重して下さい」

怒りとは違うが、明らかな強い感情を隠さず、エームズは言ってきた。その言い分はエームズの立場からすればもつともであるが、今はその主張に頷くつもりはなかった。

「……エリファを送り出したのは、ほかでもないこの私だ。義務がある。行かなければならないだろう？」

「お気持ちは分かります。しかし、すでにもう、向かっている者がおりますので」

どういう心境の変化か、エームズが突然微笑を浮かべる。

「たった今、アオイ・タチバナから連絡がありまして、グラウが一

人でネウロンへ向かったそうです」

ガヴリアはエームズの微笑の理由に納得し、かぶりを振った。

「やれやれ」

「ご理解いただけましたか？」

「もちろん。グラウの邪魔をするつもりはないよ。……しかし、あの男も何を考えているのか」

「連れ戻せ……とは、おっしゃらないのですか？」

「聞くような男ではないからね。好きにさせてやってくれ」

微笑のまま静かに頷くエームズの肩を叩き、ガヴリアは首から垂^たらしていたインカムを耳にはめてシュウへ繋いだ。

揺れが止まってから約3分後、ようやく警報が止み、警告灯の明滅が消えた。

「終わった……のか？」

ゼーンは平衡感覚^{へんこうかく}を確かめるようにゆっくりと立ち上がり、呟いた。見回すと、ハイブリッド達は倒れたまま、ぴくりとも動かない。インカムデバイスのバイザー状ディスプレイを下ろし、現状を確認していく。

「アニマの強制干渉もインターフェースジャマーも消えたか。少なくとも、この警備隊の生体反応は大丈夫みたいだな」

「そのようだね」

壁に寄り掛かっていたシュウはそう言うと、膝から崩れるように座り込んだ。

「だ、大丈夫か？」

「いや、さすがにもう動けないな。ゼーンこそ大丈夫かい？」

「へへ、俺も無理」

シュウに言われたからではないが、安堵から結局、尻餅^{しりもち}をつき、ゼーンはそのまま寝そべった。

「でも、俺達いい名脇役になれたんじゃないかな？」

「そうだね。そして、主役の彼女は期待通りの活躍、か……でも」
森閑しんかんとしたネウロンに、数秒の沈黙が重なる。『でも』の後に言葉が続かない。躊躇ためらっているのか、それともこっちの言葉を“待つ” いるのか。

「でも」

シュウの言葉が続く――かと思ったが、それは再び打ち切られた。どうやらシュウに通信が入ったらしい。

「はいシュウです。……はい。いえ、とりあえず僕とゼーンは無事です。……はい、分かりました。……え？ ああ、なるほど。……はい、了解しました。はい」

約1分強続いていた通信が終わった。後半部分は何故か顔を綻ほころばせていたシュウに、ゼーンは問い掛けた。

「どうかしたのか？」

「白馬に乗った王子様が行くから、よろしくだって」

「はい？」

思わず起き上がり、シュウの発言に首を傾かしげる。

「エリファの王子様」

楽しそうにウインクするシュウ。答えは意外に簡単だった。

その後――。

宇宙ステーションとネウロンの復旧作業、警備隊の治療。そして、犠牲者達の収容は夜通し行われた。

宇宙ステーションの被害は深刻で、ゲートの大半が閉鎖を余儀なくされた。完全復旧まで約1ヶ月はかかるらしい。一方、強制干渉を受けた警備隊は後遺症を懸念されたが、無事に意識は取り戻し、最も重傷だったミリアは迅速じんそくな手当ての甲斐かいもあって、なんとか一命だけは取り留めた。

（結局、犠牲者は宇宙ステーションの利用者、所員、ハイブリッド

合わせて41名か。状況から考えれば少ないとも言えるが)

だが、ハイブリッドとしてだけではなく、生きる者としてそれを妥協することはあってはならない。ゼーンもそれは理解していた。

担架たんかで運ばれていく所員やハイブリッドをシュウと見届けていたゼーンは、ふとエリファの気配に気付き、振り向いた。

ゆっくりと、一步一步を噛み締めるように歩くエリファの両腕には、ネウロンの所長が抱き抱えられている。悄然しょうぜんとした様は、彼女の心中を代弁しているようだった。喪心そうしんした瞳からはいくつもの光の筋が頬を流れていく。

ゼーンはエリファに歩み寄った。

「エリファ」

慎重に優しく名を呼ぶ。歩みを止めたエリファは一拍あってからかぶりを振った。何かを振り払うかの如く、強く。

「私には、できなかった」

「エリファ……ま、まあまあ、お前は十分頑張ったじゃないか！」

エリファの雰囲気不安を感じ、ゼーンは説き伏せようと声を荒らげた。だが、エリファは喘ぐあえような呼吸の後、悔しげに呟いた。

「何も変わっていない。私には……変えられなかったのよ」

言い終えると、エリファは最後の1つとなった担架に所長を寝かせた。そして、運ばれていく担架を追うようにしてエリファは歩いて行く。

「お、おいエリファ！」

叫び、駆け出す。が、すぐにシュウに腕を掴まれ、制される。

「おい、何をっ！」

感情的な行動なのは自分でも分かっていた。分かっていたが、それを他人に抑制されるのは腹立たしかった。ゼーンは思わずシュウを睨にらんだ。

「今はそつとしてあげよう」

「だけど！」

「ゼーン。僕だって齒痒はがゆいよ。彼女の力にはなってあげたいけど……

：ここはグラウさんに任せよう」

グラウの名を出されては、反論しようもない。視線を遠ざかるエリファの後ろ姿に戻したゼーンは、唇を噛み締めてシュウの手を振り払うのが精一杯だった。

ネウロン第2層。展望フロア。

無限とも思える広大な宇宙からすれば、ガラス張りの床から見える景色などほんの僅かでしかない。自分の存在が更にちっぽけなものに思えてくる。命も、心も、意志すらも。

「この力だって」

胸元まで持ってきた左手をひしと握り締めて、エリファは独りごちた。

ふと気が付くと、慌ただしく行き交う人達の喧騒けんそうはいつの間にか静まりつつあった。一人取り残されたような寂しさに、再び瞳が潤うるむ。エリファは俯うつむいていた顔を慌てて上げた。

「どうしたんだ？　こんなところに一人で」

フロアに響いた穏やかな声。その声の主が誰なのかを考えるよりも早く、体は動いた。振り向く。その弾みで零はずれてしまった涙をそのままに、エリファは震える唇を動かした。

「……グラウ」

ここに来るまでに少なからず無理をしたらしい。近づくグラウの足取りは少し重たく感じた。

「グラウこそ……もう動いて大丈夫なの？」

「どうだろうな。医者そはが傍そばにいたら止めたかもしれないけど、どうしてもお前に早く礼が言いたくてな」

「私に？」

エリファは小首を傾げ、聞いた。グラウはやや疲れの見える顔に微笑みを浮かべる。

「ああ。ありがとう、ってさ」

まだ胸元近くにあった左手を胸に宛がう。だが、締め付けられるような胸の痛みは治まらない。

「私には、礼を言われる資格なんて無い。私は……何も変えられなかったのに」

言い知れぬ苦しさ^{あえ}に喘ぎ、エリファは上半身を丸めた。視線の先には朧げな地球の縁^{おぼろ}が見える。それを跨ぎ^{また}、グラウの足が近付いて来た。

「エリファ。全てが顕現^{けんげん}する力なんて、アニマの妄想でしかない」
グラウの胸が頭に触れた。そして、肩に置かれた両手に起こされる。

「そんな簡単なものじゃないんだよ。世界も心も。エリファ一人を責める権利こそ誰にもない」

と、不意に抱き締められ、エリファはグラウの胸に顔を埋めた^{うず}。その心地は懐かしくもあった。

「お前は優し過ぎるんだよ。だから人一倍気負って、未来を焦ってる。それは辛い事だよ。エリファ一人の力で全てを変えようなんて思わなくていいんだよ」

グラウの声はそこはかとなく震えている。もしかしたら泣いているのかもしれない。

「アニマの意志に、エリファは勝った。今はそれだけでも十分だ。

……だから、いいんだ。いいんだよ」

留めどなく流れる涙が頬を伝って床に落ちて行く。そしてそのいくつもの雫^{しずく}が、星々の輝きを際立たせる。

どれだけ言葉を費やしても、今の気持ちを言い表せそうになかった。

だが、その尊い感情^{とうと}は正しい。優しさに和らぐ心は透き通った思いを愛^めでる。その心に煽り立てられるように、エリファは言葉を紡いだ^{つむ}。

「……ありがとう」

そして、その意志は顕現する。

エリファは生まれて初めて、心からの笑みを、表情に湛^{たた}えた。

「ねえ、のぞき見はよくないんじゃないかしら？」

柱から顔だけを出し、グラウとエリファをのぞき見しながら涙を拭っているアオイとゼーンに、シレーヌは忠告した。

「うう……泣けるいいシチュエーションだわ」

「悔しいが負けたぜグラウ、俺も涙が止まんねえ」

「いや、人の話聞きなさいよ」

とは言いつつも、シレーヌも我慢できずに覗き込む。この2年間のエリファとグラウを知っているだけに、目が潤まないはずはない。だがそれ以上に、シレーヌはほっとした気持ちから微笑まずにはいられなかった。

（よかったわね、グラウ）

今日という日は、エリファにとってようやくスタートラインに立つ事ができた記念日にでもなるのだろうか。いや、生まれ変わったと言っても、過言ではないかもしれない。まるで自分の事のように、シレーヌは喜びを噛み締めた。

「さ、こそこそしてないでもう行きましょう？　そろそろ朝ごはんよ」
なみだもろ

涙脆い夫婦漫才師のような2人の頭を叩き、シレーヌはグラウとエリファのもとへ、駆け寄って行った。

総裁室に戻ったガヴリアは、いれたてのコーヒーをゆっくりと味わいながら、エームズの報告に耳を傾けた。

「よかった。エリファは無事だったか」

事後処理を済ませたエームズから渡された大量のデータをデスクトップに表示させていく。一睡もできなかった体は明らかに拒否反応を示していたが、仕事である以上は仕方がない。更にコーヒーに

口をつけ、眠気を打ち払う。

「では、まず被害状況から……」

「いや、もういいよ」

右手に持った分厚い書類を見ながら報告を続けようとしたエームズに、ガヴリアは首を振った。

「後は自分で目を通すから大丈夫。ありがとう」

「……分かりました。ここに、被害状況や犯行グループの詳細。被害者の氏名など記載してありますので。何か他に必要でしたら、申し付け下さい」

「分かった」

「では、私は会見の準備に取り掛かります」

「よろしく頼むよ」

エームズの手から開放された分厚い書類が、デスクへと置かれる。そして一礼し、立ち去ろうとするエームズ。離れていく後ろ姿を見て、ガヴリアは何とは無しに問い掛けた。

「エームズ。よく考えてみれば、私がまだ“総裁”と呼ばれているのはおかしい事だと思わないかい？」

突然の質問にもかかわらず、エームズが丁寧に振り向く。

「肩書とはいえ、確かに国際連環機関ト・コイノンとの繋がりを意味するものでもあります。ご希望とあれば、私は構いませんが」

エームズの気遣いに、ガヴリアは笑顔で答えた。

「かしこまりました。“社長”」

そう言って深々と一礼し、また同じ動きを繰り返したエームズは、静かに退室した。

「“社長”……か」

新たに何かに向かう感情——心機一転。踏み出さなければならなかった一歩が、今日、ようやく始まった気がする。

「さて……はたして私に、呪縛じゅばくを解く事ができるだろうか」

そこは、エリファが好きな場所だった。

ラボエリアの一面。巨大なバルコニーのような造りのスペースの中央には小さな噴水が設けられ、その周りは花壇とベンチでまる囲まれている。すぐ近くにはいくつかの売店、自動販売機や水飲み場などもあり、社員の憩いいじの広場として利用されている場所だった。

今は朝早い事もあり、どの店も開いておらず、徹夜明けか二日酔いかは知らないが、ベンチで1人、社員の誰かが爆睡しているだけだ。幸い、いびきはしていない。

エリファは、今買ってあげたレモネードを大事そうに握り締め、ぼんやりと外を眺めている。

水平線が薄らと浮かび上がっていく。もうすぐ日の出だ。

「ねえ、グラウ」

「ん？」

「アオイがね、ステキな言葉を教えてくれたんだよ」

エリファの声が弾む。グラウは嬉しそうに話すエリファの後ろ姿を見ながら、ベンチに腰を下ろした。ついでにボトルのフタを開け、熱いココアを一口する。

「ん……アオイがか？ 珍しい事もあるもんだ。で、何て言ったんだ？」

「“明日はきっと明るい日”。アオイの座右ざうゆうの銘めいなんだって」

「……おいおい、あいつの座右の銘は“馬耳東風”ばじとうふうじゃなかったか？」

思わず呟く。しかし、どうやらエリファには聞こえなかったらしい。

まだ目は赤いが、幼さの残る顔には年相応の笑みを浮かべ、日の出を待ち遠しそうに立っている。日頃キメラと戦っているなど、その姿からは想像もつかない。

「あ、グラウ見て！ 太陽だよ」

無邪気にはしゃぐ子供のように、エリファが太陽を指す。

グラウは小さくかぶりを振った。聞こえなかったのなら、その方

がいい。危うく、雰囲気を台無しにしてしまうところだった。

穏やかな時間。いつまでもこうしていたい。そんな気分になってくる。

まだ空は夜に輝く星の明るさが勝るが、ゆっくりと、確実に、朝の光は広がっていく。

「こうしてまた、新しい朝を迎えられるのは、グラウのお陰だよ」

振り向いたエリファは、曙光つひくに照り映える瞳で囁いた。内心照れ臭さを覚えながらも、グラウは頷き返す。

「それは俺だって同じさ」

眩耀げんようの海に生まれた太陽。いつもと変わらない光景。だが、いつもとは違う時が、刻まれていく。

（明日はきつと明るい日……ねえ）

アオイの台詞も満更でもないなと心中で苦笑しながら、グラウはまばゆい光芒こうぼうに目を細めた。

エピローグ

総裁室。

会見に同席する為に呼び出されたグラウは、総裁の椅子に座るガヴリアの隣でじっとテレビを見つめていた。すでにニュースではネウロン占拠事件は報道され、今、各チャンネルでは番組を変更して緊急番組を放送していた。そして、その映像には、多くのマイクを前にした初老の男が映っている。見紛うはずもない、国際連環機関の代表、ヴィンセント・ブリストーが。

グラウは舌打ちした。

「してやられたな」

「皮肉なものだな。結局、私達は“出しに使われた”わけだ」

ガヴリアの口調こそ穏やかなものの、表情は険しい。

『……リベラルのこのような非道な行為をいつまでも許しておいてはならないのです！ 我々は今まで以上に強い決意をもって、断固立ち向かって行くべきだと、ここで改めて宣言したい！』

演壇の上で高らかに雄弁を振うブリストー。歓声と拍手が沸き起こる。

「詭弁を。圧制的な所業は醜い私心が成せる業か？ ブリストー」

「で、こっちはどうするんだ？」

「会見は予定通り行う」

「……その意味分かってるよな、もちろん」

ガヴリアは言葉には出さず、瞼を閉じて俯くように頷いた。

「アニマ……いや、シュロム・マウアーが何を成そうとしていたのか、今なら分からなくもない。世界に失望すればなおさらだ」

「だな。でもまあ、アニマが世界を正しい方向に導くとは思えないけど。心が壊れれば世界は終わってしまう」

「それは分かっているんじゃないかな。だからこそ、彼は“世界の心”になる事を選んだのかもしれない」

意味深な言葉と同時に、ガヴリアが一枚の書類を差し出した。

「ネウロンの中枢部で遺体が見つかった。恐らく、この男が今回の犯行の首謀者だ」

顔写真と経歴が書かれた書類には『ヴォルフ・アレンスキー』と書かれていた。その男は覚えている。国際連環機関ト・コイノンでNBM開発に携わり、シュロム・マウアーと干涉インターフェースの基礎理論を作り上げた人物。

「こいつは……いや、待てよ、確か“あの日”に死んでるはずじゃない？」

ガヴリアが頷く。

「じゃあ、なんで」

「究極の力を冠する者の証明。摂理を越えた最強の存在。万象を掌握する精神の根底。それがノエマ・デユナミスでありアニマであり、“精神情報組織”と呼ばれる干涉インターフェースを可能にする存在。今までは信じられなかったが……もはや疑う余地はないだろう。世界はすでに、アニマの手中にあると考えて間違いない」

「理屈は知ってる。だけど命すら情報でしかないってのか？」

「そうでなければ、つじつまが合わない」

「そうだろうけどさ」

「問題は……そのアニマをも利用している者がいるのかいないのか。リベラルとの関係も気になる。私には、今回の事件は何か裏があるような気がしてならない」

睨むような表情のガヴリアは画面を見つめながら言った。

台本通りに進むドラマのように、歓声と拍手は鳴り止まず、それにブリストーが手を上げてこたえている。脚色された会見に、どれだけの中身があるのだろうか。

「世界には裏があるってのが世の常だ。ま、これが人間の本质つてやつなんだろうさ」

「そういう事だろう」

言いながら、ガヴリアは何かに気付いたのか、総裁室のドアへと

顔を向けた。

ドアが開かれる。入って来たのはエームズだった。

「社長、会見の準備が調いましたのでご用意を」

「分かった」

普段のありがちな会話に過ぎないが、ガヴリアが社長という呼び掛けに普通に答え、グラウは驚いた。

「社長だあ？」

「不満かい？ 父が当初そうであったように、本来の肩書に戻っただけだ。戦争は終わり、もう国際連環機関の内部組織ではなくなつた今では総裁という肩書に意味は無い。それに、私なりのけじめでもある」

「……けじめね。それだけの覚悟ってわけか」

「国際連環機関、そしてリベラル。人間である事に自惚れ過ぎた人間が増え、その結果狂ってしまった世界だからこそ、私のような人間にでもしなければならぬ事がある。……エリファが望む未来の為に」

テレビの電源を切り、椅子からガヴリアが立ち上がる。デスクの上に広げられていた何枚かの書類をまとめると、

「さあ、行こうか、グラウ。私達の戦いに」

さすがのガヴリアも、緊張した面持ちで歩き出す。

「ああ」

グラウもその後につき、腕時計を見ながら落ち着かないエームズが待つ総裁室のドアへと向かった。

……だが。

ふと、視線のようなものを感じ、グラウは足を止めた。

どこからともなく、”声”が聞こえてくる。思わずグラウは振り向いたが、そこには当然だが誰もいない。気配だけが、存在している。

『“では”、お前自身は何を願う？』

聞き覚えのある声が、脳裏に響き渡る。それは意識に溶け込むよ

うに、ごく自然な声だった。

(……あんたは。……何で俺にそんな事を聞く!?)

『エリファは自らの意志で私の前に現れた。私はその因子に興味がある』

(へえ、”世界の心“でも分からない事があるんだな。分からない事は恐怖か?)

『世界はその存在自体が恐怖だ。優しさなど無い』

(心のうちにあって望ましいのは、愛ある優しさだって気付かない人間が多いからだろ。だからあんたは尻尾を巻いて逃げ出したんだ) 『優しさなど、偽善と自己犠牲の間に揺らぐ不安定なものだ。人間がそのエゴを乗り越えない限り人は破滅への道を進む。それに憂えただけだ。それは”お前にも“よく分かる事だろう? グラウ・ユラナス』

核心に迫る言葉は、ナイフで刺されたかのように、鋭く心を貫く。(ああ、分かるよ。分かるけど……時間が流れる限り人は進まなきゃならないんだ。あんたのは自分の弱さを認めない為の屁理屈^{へりくつ}だろ。俺はあんたみたいに逃げ出したりはしない)

『なるほど。……エリファはお前のその心になんかを見出だしたようだな。……いいだろう。では、しばし見届けさせてもらおう。お前達の戦いとやらを』

ゆっくとフェードアウトしていく声。いつの間にか深く引きずり込まれていた意識に気付き、グラウは目を開けた。まるで時間が止まっていたような感覚が全身を包んでいる。

「どうした、グラウ?’

ガヴリアが呼んだ。

「あ、悪い悪い」

世界も心も、簡単なものではない。正義とは望まれる儚い象徴でしかなく、悪意は流行りのウイルスのように蔓延^{まんえん}し、人々や世界を蝕^{むしば}んでいく。だが、気付いている人間もいるはずだ。世界を司る精神と呼ばれる心の根底がいかなるものかを。それは醜く、浅ましく、

愚かで、度し難い人間の慣例。

欲望という本音、自由という建前、正義という戯言。

自分の行いを過ちだと知りながらも、それを正当化する術を探してしまふ悲しい人間の性。

（まったく、不器用だよな人間は）

しかしそれは失望すべき事ではないだろう。全てが正しくはないが、逆に全てが過ちでもない。人間は1つではないが、1人ではない。

だから――

（……今は）

遍く未来に希望を馳せ、^{あまね}グラウは力強く^は一步を踏み出した。

エピローグ（後書き）

長かった（～▽～；）とりあえず、何とか終える事ができてホッと一息。

続編も検討していましたが、今はやめておきます（笑）未熟故になかなか思うように書けないもどかしさもあり、5年以上前のプロットを見直すべきかと（ぶっちゃけそんな度胸は無いですが（笑））今更ながらに思ったりしますが、作品の良し悪しにかかわらず、書き終えられただけでも幸せなのかなあとしみじみ思うのであります（ゝ▽ゝ）趣味&下手の横好きの作品ではありますが、もし最後まで読んでいただけた方がいらっしやいましたら、お礼を申し上げます（＊～！～）b

プチ設定資料（前書き）

本編では書けなかった設定資料の一部（今現在、記載できる範囲）
をここで補足させていただきます（へーへ；

プチ設定資料

《“あの日”》

第三次世界大戦終結の要因となった『空白の30秒』——ナイトメアーが発生した、2079年4月5日の事を指す。

その日、統合制御戦闘体系（UCFS）による広域干渉インターフェースが実行され、戦場のハイブリッド達はその干渉下にあった。しかしシステムの中核であったアニメを介してエリファが人間の心に接触した事で、オーバードライブと呼ばれる干渉波の暴走を招き、その干渉波はハイブリッドだけでなく人間にまで影響を及ぼした。結果、意識を破壊された人間達は狂乱し、多くの命が失われた。干渉波の暴走が起きた30秒間、世界がその機能を失った事から、『空白の30秒』と呼ばれている。

《ハイブリッド》

元々、良質の遺伝形質を保って子孫の素質を優れたものにする事を目的とする考えであったが、化学の発達と並行して人間の人為的な進化は進んだ。更にNBM（超微人工細胞素子）の開発に伴い軍事的に転用したのがハイブリッド——Humanoid Interface Bio Linkage Device——である。

《軌道エレベーター》

ジオ社は直径が約30キロにも及ぶ円筒形で、高さは約1800メートルを誇るが、その中心部分に軌道エレベーターは存在する。巻き寿司で例えるならば、海苔とご飯がジオ社ビルで、中心の具が軌道エレベーターとなる。

宇宙と地球の間の物資の輸送をロケットよりも安全かつ低コストで行う事を目的とし、^{ト・コイノン}国際連環機関による月面開発への基盤としてジオ社と共同で建造された。

《レールガン》

物体を電磁誘導によって加速し撃ち出す装置の事。

2本のレールと弾に電流を流し、その電流によって発生する磁場を弾の推進に用いるが、その為には短時間で大量の電流が必要とされる為、電源の小型化――携帯できるレベル――には物理的技術的な問題があった。

しかし、ハイブリッドの誕生によりその問題は解決した。レールガンで弾を発射する為に必要なエネルギーをハイブリッド自身（正確にはNBM）から供給する事によって、電源を必要としなくなったのだ。もちろん、発射する度にNBMの有効稼働率は下がるので、活動に限界が来ればレールガンも使用できなくなってしまう。

レールガンを発射する為に必要とするエネルギーは少なくなき、レールガンを使用する場合は発射のみに集中するのが一般的で、ゼーンのような戦いながらの使用は普通のハイブリッドには不可能である。

《GVR―0019ベクターライフル》

何かと使用制限の多いレールガンの問題を解消すべく、より扱いやすく、携帯しやすく、消費エネルギーの少ない武器として誕生したライフル。

原理や構造はレールガンとは異なり、ベクターライフルはコイルガンの部類に入る。コイルガンとは電磁石のコイルを使って弾を発射する装置の事。大量の電流を必要としないが、その分レールガンよりも威力は格段に劣る為、弾に工夫をする事で威力をカバーしている。弾は専用のウイルス弾を使用し、ウイルスの効果によってキメラを死にいたらしめる。

《マルチタスク》

MTSによって同時に複数のトランスを機能させるシステム。主に

NBMのリミッター解除と併用し、その発動はハイブリッドの能力を極限まで引き出す。しかしその変化に順応するだけの技量と精神力も必要となる為、駆使するのは至難の業。

《アニマシオン》

辞書によれば『魂を生き生きと躍動させること、生気をあたえること』とある。

ノエマ・デュナミスよりもより高次の存在であるというアニマの意識がそこに見て取れる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9636a/>

W i s h

2010年10月8日15時02分発行